
東方空狐道

しらたま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方空狐道

【NZコード】

N3229Y

【作者名】

しらたま

【あらすじ】

ぽつくり逝つて畜生道。肉球ふにふにの前足では何もできないの
で狐つ娘になつてみました。なにそれこわい。

注：最強？ハツ：（失笑）な方は回れ右をオススメします。注：
当作品は東方二次創作作品でございますが、オリ要素を多分に含む
と思われます。注：兎の如く怠ける鈍亀更新です。

導入なんてこんなもん（前書き）

ぬるこものが書いてみたくなつたのでやつてみました。何番煎じかもつ全く分かりませんが、先達の皆様に便乗といつ形になるかもしれません。きっとのんびりいきます。

皆様の本命の小説の片手間程度によかつたらどうぞ。

導入なんてこんなもん

「おい流、今日の連中んとこに力チコリに行くんだけどよ、お前も行かねえ？」

髪をくすんだ金に染め学生服を着流している不良風の男子生徒が、帰る支度をしていた一人の男子生徒に話しかけた。
帰り支度をしているのは、留見流。周りには変人と呼ばれているが不思議と嫌われない、ある意味浮いている人物だった。声も容姿も中性的で、学生服を着ていなければ初見で彼を男と断定できるものは少ない。

「んー？ … 今日は気が乗らないからやめとくわー」

「おつ前変わらずだなあ。お前、前もあそこの連中ぼっこったんじやなかつたか？」

「人聞き悪いな。知りあいかつあげされてたから、懇切丁寧に説得して帰つてもらつただけなんだが…」

なよなよした容姿ながら、流は非常に腕が立つた。小さい時から彼が貪欲に力を求めた結果である。何故それほど強くなるとするのかを彼に聞けば、彼はいつもこつ返した。『何事も、自分の思い通りになつた方がいいだろ?』。

力至上主義者。その答えを聞いたものはみなそう考える。流も、それは否定しなかった。力があれば何でも出来る、そこまで思つていなかつたが、あつた方がやれることは多い。彼は常々そう考えていた。

「関節外しが懇切丁寧かよ。お前の場合ひやんとはめていくからむしろ性質わりいよな。変にお人よしなのによ」

「お人よしなあ。俺は視界に写しといて知らん振りするのが寝覚め悪いだけなんだけどな」

「やうこうのがお人よしなんだよ…なんで俺、お前とそこそこ付き合いつしてんだろうな。ま、お前を嫌つてるやつなんてあんまいねえよな。何でだ?」

「俺に聞かれてもな。みんな俺に癒しを求めてるんじやないか?」

「だはははははははは… どの口で言つてんだよ… ま、俺はもう行くな」

「ははは、氣いつけてな」

「おう。じゃーな」

何の変哲もない日常。俺はいつもおつ帰路について。
非日常なんでものは俺の日常はない。

喧嘩に誘われたのは非日常ではないのか? 答えはNO、頻繁ではないがわりと日常的なものだ。今回は俺が出ていけばパワーバランスが崩れそうなので遠慮させてもらつた。分が悪そうであれば友人のよしみで参加してみたりするのだが、今のところは無敗である。そもそもうちの高校とU高の仲はそれほど険悪ではない。無論いわわけではないが、今日のような衝突はままあることだ。

ある意味小戦争をして日頃の憂さを晴らすといったところか。ルールなど欠片もないがそこには暗黙の了解のようなものがあった。全体の勝敗などはあつてなきようなもので、双方の数がある程度まで減れば自然に収束しめいめいに去つてゆくのだ。

俺の力は彼らの間で無闇にふるつてよいものではないと思う。少々ベクトルが違うのだ。いふならばアマチュア戦に空氣も読まずプロが入つていつて優勝するようなものか。たまの参加でもやるのは何の細工もない殴りあいで武術は使わない。

一般家庭に生まれ、普通に育てられ、こうして普通の学校に通つている。だが、俺は『変人』と呼ばれるようなものに育つてしまつた。それでも大衆に排斥されないのは、俺が処世術に長けているせいだろう。俺のようなものはある意味異端となるのだろうか？

実のところ、俺の根本にある特性は『臆病』だ。何かに害されるとに怯えながら、だからこそ貪欲なほどに力を求め、自らを守る術を身につけた。他人の顔を読み心を読み人間関係におけるあらゆる軋轢を避けてきた。常に強い自分をイメージし、仮面どころか着ぐるみを着込み臆病な自分を知られないように隠している。…今ではどちらが本当なのは分からなくなつてしまつた。何せ俺の心は何にも震えなくなつてしまつたのだから。起伏が少なくとなつた、と言ひ換えるべきか。喜怒哀楽の感情こそあれど、それらも自分の演技なのかどうか分からぬほど希薄だった。『不動の心』などと言えば聞こえはいいが、プラス方向の高揚感などすら俺は忘れてしまつてている。

だから俺は求めているような気がする。俺の全てを搖るがすような非日常を、だ。

だから死後の世界などといつものを知った俺は罰当たりにも喜んでしまったのだ。きっとここは、俺の知る日常なんてなくて非日常に溢れているのだと。

もう、日常には戻れない。そんな事実も飲み込んで。だから俺はせめて俺の日常にあった人たちに謝った。こんな人間味に欠けた人間でごめんなさいと。

「地獄行きじや！」

目の前の、でつかいいかつい男が俺にそう言った。『閻魔様』だと、彼は名乗っているが、自分で『様』とかどうかと思つよ。親より先に死んだのに、賽の河原なんてものはなかつた。いや、とういうより十四歳以上なら関係のない事らしい。好きで死んだわけでもないのに、流石に十三歳以下で死んでしまつた子供が可哀想に思えた。

しかし、地獄行きとはどうやら俺は悪行を積んでいたらしい。はて、自覚は無かつたのだが。

『閻魔様』が手に持つてゐるこれまたでかいハンマーのようなものをガツンと机に振り下ろすと、ぱかっと俺の足元の地面が開き俺はまっさかさまに落ちていつた。

そもそも何故俺が死んでしまつたのかといえば…特に特筆することでもない。この落ちてゐる時間のうちにはまざつと終わる程度のことだ。

貯金を下ろそうと銀行に何も考えずに入つたが運の尽き。どうやらかなりてんぱつているらしい銀行強盗が銃を振り回して銀行員を脅していたようだが、そこにのこのこと自動扉を開けて入ってきた俺は半ば錯乱状態の銀行強盗に頭を打ち抜かれた。

人間は頑丈なくせに妙に簡単に死んでしまう。今回は鉛玉だったので頑丈もくそもないが、とにかく俺はあっさりと死んでしまったのだ。

どじょ

しばしの空中落下を楽しんだあと、俺は足をクッショーンに不毛の大地へと降り立つた。すごい音がしたが、別に足が折れたとかそういうことはなく無傷である。なにやら生前より身体がずっと軽く、ずいぶん強くなっているような気がする。死んだからだろうか。いやわけ分からん。

俺の降り立つた地獄とやらは、真っ暗なのに妙に蒸し暑い。地の底から響くような叫び声もどこからか聞こえてきてかなり氣味が悪かつた。

「がははは新入りか！」、地獄で自分の罪を悔いと良いわ！

太陽の無い空をなんとなく眺めていると、ぞろぞろと鬼がやつてきた。鬼と分かったのは角があるからだ。いや、彼らが鬼と自己申告はしないから（仮）になるのだけど。赤とか青とかそんなことはなくて、灰色？茶色？よく分からぬがそれ系の濃い肌の色をしている。悪い意味でこの地獄にマッチしているのではないだろうか？

因みに彼らはかなりマッチョだ。その肉体美が身体の細い俺にはとても眩しい。

しかし見に覚えの無い罪を悔いろと言われても実感が湧かない。折角なので、抵抗させてもらおう。鬼と戦うのも、なかなか乙なものだ。いやむしろ楽しいかもしない。

「はっ、連れて行きたきや力づくできな！」

「亡者風情が生意氣な！」

「ほああ！ 棘つき棍棒なんて、ずるい。」

「閻魔様、閻魔様！」

「なんじゃ騒々しい。何かあつたのか」

「あの、地獄に落とした魂のうちでミスのあるものがあつたのですが…『輪廻の環』の修行中で、次の転生を終えた後に神靈に昇格するはずの魂なんです…確かに今世の名は『留見 流』だったかと…」

「な、何じゃと！ 確かにそのような者を地獄に落としたはず…いや、ちよつと待つのじゃ！ 書類には確かに地獄行きとあつたはず…」

「…それはもう何百年も前のものですよ！ 毎度毎度机の上を片付けて書類を整理するように言つてゐるでしょうが！ 『ワシには分かるから問題ない』ってこんなことになるからいちいち注意してたつてこいつに！」

「な、なんとこ「ひ」とだ… ビビビビ…すれば… そりいえば、その地獄に堕としちゃった流とかいつものは何をしているのだ…」

「現在、地獄巡りをしております…」

「獄卒の鬼をぼこぼこにした後意気投合し、あらゆる地獄を体験している真っ最中です。既に大焦熱地獄、黒沙地獄、無間地獄、等活地獄、大叫喚地獄を踏破されました…」

「馬鹿な！ 人間程度の剥き身の魂が耐えられるものか！ 消滅してしまって決まっておるつ！ そもそもあやつを地獄に送つてそれほど時間は経つておらんぞ…」

「『地獄』では個人の主觀においての時間の概念なんて無きにしご有らすですよ。外界にとつての一秒が本人にとつての千年に匹敵する」ともざりにあるのですから。… それにあの者の靈格は桁外れです。そんな強靭な魂が肉体に阻まれず剥き身のままでいるからこそあらゆる地獄を耐えうるのですよ。そもそも、修行の初期段階としてこの魂は数百年前の時点で地獄巡りを終えていました

「ぐ、ぐ、ぐ、そそんな者を間違いで地獄に落としてしまったことが知られれば… ぐぐぐ…」

「ど、どこたしましょ」

「… その男をよべ。こうなつたら太古の畜生道に転生させる！ 書類には『輪廻の環』に耐えきれず魂が消滅してしまったとでもしておけばよー！」

「そ、そんな！ 神靈一歩手前の魂を畜生道に墮とすのはまずいですよ！ あの男はむしろ神仏になるはずの魂なのですよ！ それを罪人道の畜生道へ！ それにあれほどどの靈格のモノを、畜生道といえどつかつに下界にやればどうなるか…」

「黙れ。お前にも、家族はいるだろ？ あまり、心配させたくはないのではないか？」

「そ、それは… 分かりました。あの男をよびます…」

なんか地獄制覇して次は何しようかと鬼達と話していたら呼び出された。… そういえばそもそも何で地獄巡りしようとしたんだっけ。暇してたら、鬼達に勧められたからだつたか。は、もしかして俺鬼に乗せられた？ いや、狂氣と正氣の狭間は得難い経験でしたが。いやはや苦痛と苦悩と苦難で幾度も俺の精神が消し飛びかけましたが。ナニカ。そんな刺激が止められない止まらない。あ、俺はMな人じゃないよ。

いやいや、今はこっちが重要か。

「お前は未開時代の畜生道行きじや！」

何故に。

目の前にはまたあのでかいいかつい男。男は手に持つ槌をふつてそう叫んだ。

なんか悪化してるし。あれだらうか、俺が地獄をアトラクションにしてたのが瘤に障つたのだろうか。折角だから鬼と酒を酌み交わしたかったんだが。そういえば釜茹で地獄がなかつたなあ。なんだか温泉に入りたくなつてきた。

それはともかく問答無用で畜生道も納得がいかないので、とりあえず理由を聞いてみる事にする。

「あのー。俺の罪状ってなんなんですか？」

「黙れ黙れ！ 罪人が惚けるでないわ！ さっさと行つてしまえ！」

ぱかつ

納得いかないなあ。まあ何かあればいいんだけどなあ。

キュー キュー

次に意識を覚醒させた俺が最初に聞いたのはそんな鳴き声だった。そして目を開けて最初に見たのは白くて大きい、二本の尻尾を持つ狐だった。

なにこれすごい。

導入なんてこんなもん（後書き）

こんな感じに時間、場面はブイブイ進みます。きっと次回は狐つ娘になっていることでしょうね。多分。

畜生道なめんな おや…？狐の様子が…（前書き）

一話だけじゃ 良く分からんので急遽書き上げて一話目です。時間軸が飛び飛びですが、早く進めたかったのでじりんの有様です。

文章ばっかりですが、なにぶん主人公一人ですので会話ありません。

畜生道なめんな おや…？狐の様子が…

昔々大昔に狐に生まれて早七百年。正直もう生物として長生きつてレベルじゃないぜ。一尾の白狐の母を見て仰天したのも今では懐かしい。

そもそも母含めて兄弟達とともにいたのは生まれて一年程度だった。みな早々に巣立ちをすませ散り散りにどこぞへと去つていったのだ。母狐ですら『夫搜す』的な事を言つて巣から出て行つたのだからこの時代の狐はまあずいぶんとアグレッシブだと思ったものだ。

実際、俺の知る現代と比べると狐に限らずこの時代に生きる生き物はどれも強かつた。俺とて別に肉球パンチで戦うわけではないが、生体エネルギー？的なものを丸めてぽんぽん外敵に放り投げそのうちに逃げ出すといった風に生き延びてきたぐらいだ。

それに異形の者を見ることもままあつた。巨大な蜘蛛であつたり、ぬめぬめした蛇なようなものであつたり、足がいっぱい生えているのに胴体がどこにあるか分からぬ謎生物であつたりと正直俺の知つていた世界とはまるで違う。

まあとはいっても俺もその化け物連中とある意味同類なわけでして。

母狐が一尾だったので、俺は母狐がいわゆる妖狐ではないかと考えていた。ちなみに生まれた当初の俺の尻尾は一本である。あたりまえだが。それはともかく、妖狐ならばもしかして人間に化けられるんじやないかと俺は考えたわけだ。何せ獸の前足でできることなどたかが知れている。俺は以前のような便利な両手が欲しかったのだ。

が、この世界で百年を過ぎたあたりで俺はほとんど諦めていた。狐

の身でありながらこれだけ長生きするのも驚くべきことであつたが、しかし百歳になつても俺は一尾のままだつたのだ。その上身体は1m足らずで、大して成長もしていない。母狐は少なくとも全長2mはあつたのに。そもそも尻尾が増える事はともかく人型になれることには微塵の保証がないのだ。長らく生きてきたが、人型の生き物は今のところうほうほ言つてゐけどりあえず一足歩行はしている猿八割人一割のものしか見た事はない。案の定意思疎通ははかれなかつた。というか食べられそうになつたし。原始人（？）こわい。

そんなこんなでさらに数百年は各地を転々としながら細々と生きながらえていたのだが、転機が来たのは五百年目のことだつた。

その日は、朝起きてからとにかく違和感しかなかつた。風景がいつも違つて見えたり、動きにくかつたりとそんな感覚を意識しながらとりあえづ俺は四肢に力を込めた。

そこでようやく気づいたのだ。自分に手足があることに。五百年ごしの人間の身体だつたために違和感を感じるとは、ずいぶんと狐の身体に慣れてしまつたものだ。

ふるふると生まれたての小鹿のように足をふるわせながら立ち上がり、俺は自分の身体をよく観察してみると、身長140cmほどの少女、幼女？になつていた。今更女になつてゐることは驚かない。そもそも狐に生まれたときから雌というカテゴリだつたのだから。そして雌であることに違和感を感じる前に狐であることに違和感を感じていたため、いつの間にか自身が雌であることには慣れてしまつていた。まあついてるかつてないか程度の差だつたわけで。人型になつた後もそれはあまり変わらない。

人型になつた俺の身体は狐状態だつたとき同様非常に小さい。狐だつたときよりも大きいは大きいが人間の中で言えば小さい部類に入るだろう。

狐状態の俺の体毛は白だ。別にキタキツネとかそういうわけじゃない。森の中であるでカモフラージュできないその身体に頭を抱えたのは一度や一度ではなかつたが。それはともかく人型になつた今もそれは変わらず、真つ白な髪に真つ白な肌となつていた。また頭には真つ白な狐耳があり、腰には一本の尻尾があつた。二尾になるまで五百年かかるとかどんだけーとか思つた俺は悪くない。

ところであまりの衝撃にスルーしていたが、人型になつた俺はなぜか服を着ていた。今まで狐として裸一貫で過ごしてはいたもののこうして体毛のないすべすべの身体になつた今では服がある事は非常に助かる。しかしなんでこうなつたのがが全く分からぬ。結局突然人型になつたこと以上に不毛だつたので考へる事は止めてしまつたが。

袖や裾で広がつてゐるずいぶんとゆつたりとした単純なつくりの白い着物、といったふうなデザインなのだが、妙に身体には馴染んでいた。それこそ狐だつた頃のあることがもはや自然だつた体毛のようだ。つまるところ、これはその代わりのようなものなのだろう。

その後一本足では歩きなれない、といつた歩き方を忘れてしまつた俺はふらふらしながら近くにあつた泉へと向かつた。逃走手段として生存本能の賜物かいつのまにか空を飛べるようになつていて、今回は徒步を選んだ。早いうちに身体に慣れる必要があつたのだ。さもなければミニミズやらアリやらに食べられてしまう。無論魔改造的なミニミズやアリだが。五百年と比べてずいぶんと力の増した俺だつたが、この身体がどれほど使えるか分からぬような状態ではどうにもならないのがこの世界の法則だ。

水面を覗きこんでみると、表情に乏しいが、狐の時は違つ丸い瞳孔の金色の瞳を持つ掛け値なしの真つ白な美少女がこちらを見てい

た。ぺたぺたと顔を触つてみると、水面に映つた少女も華奢な手を顔に当てていた。どうやらこれが俺らしい。

ちなみに表情を変えてみようぐにぐに口やら頬やらをいじつてみたが、ほとんど無表情なままだつた。どうやら俺は表情筋の使い方も忘れてしまつたらしい。

さて話は戻るが、人型になつたことを契機に俺はこれまで定住地を捲していた。人型になつた俺の身体が相当ハイスペックである事を知つたためだ。ここ一百年は逃げる事を止め負け知らずである。もう住まいを転々とする必要はない。

五百歳になつてから一百年、いい場所を見つけたのはそんな時だつた。

俺は人型になつたことをいいことに、行く先々で畑を作つていた。食は暇を潰す重要なファクターのひとつだつたためこれは外せなかつた。そしてそれに最適な場所をようやく見つけたのだ。

俺は畑のそばに小さな小屋を建ててそこに住む事にした。

畑には今まで集めてきた様々な植物が植わつてある。にんじんみたいな大根だつたり、植木みたいなブロッコリーだつたり、毒のあるピーマンだつたりもどきの類がかなり多いが、それでも俺は満足だつた。

さて、ようやく安定した生活に入った俺は太古に生まれてほとんど諦めていたことに着手することにした。

そう、『Sake』だ。

俺は人間だつた頃酒が好きだつた。

未成年ではあつたが、隠れてよく飲んだものだ。初めての出会いは、酔拳を試みたときだつた。いやいや、あの頃の俺はまだまだ若かっ

た。無論酔つたところで醉拳が出来るわけではないのでそちらは失敗したもの、俺にはそれ以上の収穫というか出会いがあったわけだが。

幸い、以前各地を放浪していたときに稻を見つけていたので、原料は何とかなる。：そういえば日本に野生の稻なんてあつただろうか。いや、元の世界を基準に考えても仕方ないか。そもそも諸説はあっても事実なんて現代には残つていないし。

稻の量産に二十五年、とりあえず飲めるものができるまで八十年。あくまで『飲めるモノ』『液状のナニカ』であり、正直言つて不味い、不味すぎる代物だった。むしろほとんど何も知らずにここまで来れた俺を褒めてやりたいぐらいだったが。時間がいくらでもあることは幸いだった。酵母菌の用意に特に苦労したのもいい思い出だ。

その手法を主軸に、結局妥協できるものが造れるようになったのは三百年後のことだった。その頃には俺の尻尾は三本になっていたが、それもおまけのようなものだ。俺の知る時代のものには未だまるで敵わないものの、長い時をかけてようやく作り上げたという達成感はたまらないものだった。

ところで、さりげなく毒ピーマンとやらがあつたが、俺には毒は効かなかつたりする。それは俺自身の持つ能力のせいだ。

『式を司る程度の能力』

生まれた時から、俺はこの能力の存在には気づいていた。が、俺は大して役に立たないものだと考えていた。能力の特性か数字の類には滅法強く、円周率など億単位で小数点以下が出せるが、正直野生

に生きる俺には意味がない。他に「冠婚葬祭司つてどつすんねん、神職でもするんかいなとかやさぐれていたが、この能力の便利さに気づいたのは落ちていた木の実を広い食いしてしまった時だった。

小さい林檎のようなその木の実は実のところ非常に毒性の高いもので、特定の動物しか食べられないようになつていて。しかし、俺はそれをうかつにも口にしてしまったのだ。が、俺が毒に苦しむ事はなかつた。食べた途端その毒の化学式が頭に浮かび、同時にそれを無害なようにばらばらにしてしまったのだ。なんらかの化学反応を生じたわけではなく、超上の力で無理やりにだ。

それからは、今まで大して調べようとはしなかつた能力頻繁に試してみるようになった。基本的には数式を解く時などに自動的に発動しているようになつていて、化学式を操ったように意識的に使うこともできる。

空気中の分子式がいじれる事を知つた時は特に驚いたものだ。同時に反則すぎる能力にも呆れたが。これで地球温暖化も解決だあとか思つてみたが、今はまだ手元の式しか操れないでやつてみたところで焼け石に水だ。そもそもそんな世界的問題もずいぶんと先の事のことだ。

今は爪の先ほどのフラー・レンを作つてみたり、石を放り投げてあらゆる障害に至るまで計算しつくし落ちてくるまでの時間を誤差なく割り出してみると地味な使い方しかしていなうが、未来ではとてもなく使える能力となるだらう。特にネットワークでも発達すれば俺の独壇場だ。定められている一定の方式でつぶられた世界は俺にとつて鴨もいいところだらう。

そんな事を考えながら、また何年も酒造りや農業、能力開発にいそしむのだった。

俺の知らないことはまだまだいくらもある。能力同様幼い頃から知覚していた生体エネルギーのことも未だによく分からぬ。

結局俺だけでは解明させることはできなかつた。俺が俺にとつての武器であり生命線であるこれの正体を知つたのは、それから千年ほど経つた頃。狐になつてできた初めての友人に教えられたのだつた。

畜生道なめんな おや……？ 狐の様子が……（後書き）

いつもになるかは分かんないですが二話目は他キャラ登場ですね。
作キャラがじゃあいません。えー んはもつと先だつたりします。 び
つくり。

色々と 違う気がする 日本神話（前書き）

また投稿です。はじめは縛りが少ないのでわりと書けるんですけど…
作中ではまた時間が飛びました。こんな飛び飛びで、大丈夫でしょうか。

また、今回からオリ設定がやつてきました。ついに話を作るために
日本神話まで躊躇してます。ひらにー

俺の尻尾が一度五本になつたころ、一千歳になつたころだ。正直この世界に来てからは時間感覚がおかしい。というより多分地獄にいたせいで元々おかしかつたのがさらにおかしくなつたような…まあいいや。正直一年なんてそれこそ『あつ』と言つまで、人間の頃の感覚で言えば千年が三年程度のものだ。特に何の代わり映えもしない毎日で、自分の中でかなり画一化されているのかもしれない。そろそろ変化が欲しいなあ…

そんなわけで俺はその日も造つた酒を大きな瓢箪に詰めて、その瓢箪をなんとなくぶんぶん振り回しながら森をふよふよと飛んでいた。最近日課の散歩だ。飛んでいるのに散歩とはこれいかに。まあようするに暇つぶし兼不思議探しといったところで。

昔と比べて酒醸造の技術もずいぶんと向上していたが、『清酒』と呼べるようなものができるからは少し行き詰つていた。俺が半ば満足してきたとこもあるだろうが、今は長持ちするようなものを試行錯誤している。

能力を使って一気に糖をエタノールにしてみたりとか裏技をしたこと也有つたが、妙に味氣ないものになる事を知つてからは普通に作つている。俺の能力は広い分野に渡つて使える便利な代物だが、その反面非常にデジタルで融通が効かない時がある。なので、時間をかけければできるようなことは大抵能力を使わずやつていた。その方が日常にも味があると言うものだ。

また能力を使って構造式をいじり、リアルダイヤモンドダスターとか馬鹿みたいなことをやってみたが、正直ダイヤモンドはフラー

ンやグラファイト以上に燃費が悪かった。俺の能力はパッシブならばともかく、意識的に何かを操るとそれに比例して俺のエネルギーは削られてゆく。その上多量の炭素元素をいじる必要があったせいで、いくらかダイヤモンドを作つたらほとんど動けなくなってしまった。効率悪すぎ。

さて、普段は何もなかつたり、話の通じない非常識生物と遭遇したりとそんなことばかりだつたが、その日は違つた。

いつも通り『てーれれーてー』と意味のない音律を鼻歌交じりに口から垂れ流しながら森を徘徊していると、突然がさがさと近くの茂みが揺れた。俺は、すわ敵でも出たかと謎エネルギーを溜めて臨戦態勢をとつた。普段はエネルギー玉をばらまけば大抵の相手は逃げてゆく。それでもこちらに向かつてくるものは体術で相手をしていた。そして尻尾が五本に増えた今、力もそれに伴つてずいぶんと増した。人型を手に入れた時からの不敗記録は未だに続いている。

果たして、茂みから現れたのは、一人の男だつた。

正真正銘、男である。完全に人型の、男だ。

「おおお？」

俺は突然の一千年ぶりの人間？との邂逅に、声にならない声をあげた。男は上下のある布でできた服を着込み、腰には剣を下げている。俺は溜めていたエネルギーも霧散させ、しばしの間呆けていた。何せ久々の意思疎通のできそうな相手だ。例え彼が俺にとつての敵であつたとしても、羽根四枚体長一メートルの蝙蝠や群れをなして襲つてくる肉食のダンゴムシよりも断然いい。

しかし、驚いていた俺はあることに気づくことに遅れてしまった。さらにそれは俺にとつて致命的な事実だった。

この男、俺より強い。

しかも、男が俺に殺意を持つて腕を振るえば、それだけで俺は一瞬で散り散りになるだろう。それほどの絶望的な差だ。

どうやら俺はずいぶんと慢心していたらしい。ここら一帯の誰にも負けないほどの力を手に入れて、かなり浮かれていたようだ。だが俺はこれほどの相手を前にして、恐れとはいなかつた。むしろ今の俺には歓喜しかない。鉄面皮な表情はまるで動かないが、心中では確かに笑っているように思つ。

仮に致命的であろうと、俺にとつて死は障害ではない。むしろ退屈のほうが敵だ。そんなことを考えてしまつ俺は、本当におかしくなつてしまつたのだろう。

おかしな声を上げてからまるでしゃべらなくなつた俺を前に茂みから出てきた男はしばらく黙つていたが、俺が再び口を開く気配がない事を悟ると、一言ひり言つた。

「ヌシは、何者だ？」

これはまだずいぶんと哲学的な問いだ。残念ながら俺も自分の事は大して知らない。せいぜい『俺』自身であることと雌狐であることがぐらいだ。

そもそもこの男は何者なのだろうか？ 俺や謎生物が持つているような気配、謎エネルギーとは違うものを、この男は放つている。どうやら俺のようなカテゴリ化け物ではないようだし、俺の知るこの時代のヒトはあのウホウホ達なはずだ。たかが千年やそこらでこんな人間状態になつているとは到底思えない。いや、仮にこの時代の生物が異常な進化スピードだとか言われてもまあ仕方ないのかなと納得するしかないが、だがこの男の持つている膨大な力は人間に力

テ「コライズするには到底大きすぎる。

「俺は見ての通り狐だろ？が。あんたこそ何者だ？」

「我か。我はヒトだ」

「嘘付け」

ついそう言ってしまった。

しかしこれほどす「」い力漲らせながらヒトなどとはおこがましい。むしろ「私は神です」とか言つてくれる方が頷ける。今の俺は寛容だ、そんな超常存在だって受け入れられるほどにな。わはは。

「本当だ。名は『伊邪那岐』といひ」

「ふはっ」

え、ちょっと待つて。え、いざなぎ？ なにそれこわい。

「『伊邪那岐』といひ」

「一回言わんでも聞こえとるわい。イザナギで、え、神様？」

「神か。間違いではない。我はヒトであると同時に神でもある」

「こいつはいったいどういふことだ。イザナギといえば日本神話最古の神ではなかつたか。どうしよう、なんかよく分からぬことになつてきた。いや、面白いんだけどね、ただ超展開過ぎて。国産みの一柱を前に俺にいひたいどうじうじうと。」

「それで、主の名はなんとこいのだ？」

内心でおろおろとしていた俺に構わず、イザナギは今度は俺に名を問うた。名前はイザナギが勝手に言つたことだが、しかし相手に言わせといて自分が言わないのは俺の礼儀に反する。

しかし困つた。名乗りたいのだが、俺には名乗るべき名がない。何せ狐になつてから今まで必要ななかつたものだ。

『留見 流』。これは、前世での名だ。男でも人でもなくなつた俺に、この名を名乗る気はない。

「悪いが…今まで名前は必要なかつたからな。俺には、名前が無いんだ」

俺がそう搾り出すよつて言つと、イザナギは驚いたよつて言葉をまくし立てた。

「名を持つておらぬのか。力有る者にとつては真名とは何よりも大切なものであるのだぞ？」

「そう言われてもな…無いものは仕方ないだろ。何なら、あんたがつけてくれよ」

「我がか？」

「そうだ。どうせ呼ぶのはお前ぐらいしかいしないしな」

俺はイザナギに託すこととした。自分でつけるよりも、他人につけてもらつたほうがなんとなく気分が良かつた。名前とは、ある意味祝福だ。真名とは何よりも大切なものと言つたイザナギはある意味正しい。短い音、文字の中に、つけた者の願いや想いが込められ

る。それはとてもいいものだと俺は思う。

俺がイザナギに頼むと、イザナギは顎に手を当てるで考え込んでしまつた。俺としては嬉しい限りだが、そこまで悩んでくれなくても。

「そういうかん… 真名がヌシ自身に方向性を『与える』こともあるだろう。だからこそ相応しいものをつけねば」

名は体を表す、まさに言の葉に込められた祈り、言靈といったところか。特にイザナギのような力を持つものなら、名を付けた者に与える影響も大きいような気がする。

「ひむ、思いついた。ヌシの名は、『ウカノミタマ』にしよう」

「ウカノミタマ?」

どこかで聞いたような。

「うむ。実は以前から妙な気配が森にあることは気づいておったのでな、ヌシの住まいの近くまで行つた事があるのだ。ヌシは確か食物の世話をなどをしておつたな。その時は珍しかつたので見てているだけだったのだが。ともかく、だからこそウカノミタマという名前にしたのだ」

え、全然気づかなかつた。俺もまだまだ未熟ということか。てかイザナギ相手じや分が悪すぎる。仮に俺の力を5とすると、イザナギは20000といったところか… うん、絶望的だな。

「『ウカノミタマ』になんか意味もあるのか?」

「倉稻御魂。これには穀物や食物の神という意味があるのだ」

「ええ！ 神つてなあ、自分で言つのもなんだが俺は得体の知れない狐だぞ？ そんな大層な名前をもらつてもいいのか？」

「『神』とは大なる力を以つて世界に干渉するものの事を言つ。又シほど力のあるものならば、構わぬだろ？」

神の定義ってそんなのがな。今の時代はそれが普通のだろか。というより、俺つて一応力の強いほうだつたんだな。イザナギと差がありすぎて自信消失していた。ということは今まであつてきた謎生物たちはこの世界の底辺なのだろうか。そんな連中相手に最強気取つてた俺、恥ずかしい！

とにかく、イザナギにもらつた名前はありがたくいただくことにしよう。イザナギがわざわざ頭をひねつて考えてくれたものだし。

「ウカノミタマ、ウカノミタマ…うん、いいと思つ。あ、ウカノミタマ、じゅちょっと長いから、呼ぶ時は『ウカノ』つて呼んでくれ」

「うむ、承知した、ウカノ。では我のこともイザナギと呼ぶとよい」

「分かつた、イザナギ」

そうして、俺達は少しの間笑いあつた。

「ところでイザナギ、俺に『何者か』つて聞いてたけど、見れば狐つて分かるだろ？ それに畠の世話してただけなのに珍しいって何でだ？」

「む？ ウカノは『禍物』まがものであろう？ 人のような姿をした『禍物』は、ウカノがはじめてなのだ。それに『禍物』は総じて知能が低い。

まさか畑を作り食物を育てているものがいるとは思わなんだ

「待て待て待て。ちょっと待て。俺は『禍物』なんぞ知らんぞ。『禍物』って何だ」

「『禍物』とは『禍氣』によって変質した生物のことであるが。又シも大量の『禍氣』を放っているではないか。紛れもなく『禍物』である証拠だ」

「また分からん単語が出てきたぞ…『禍氣』って何だ?」

「むつ…『禍氣』から説明するとなると長いのだがな? 構わぬか?」

「…できるだけ簡潔に頼む」

「承知した」

『禍氣』。

これを話すにはまず世界の事から、と説明された。

ずいぶんと昔の事、世界に大地ができた頃は争いが絶えなかつたらしい。そのせいで穢れがたまり、地上はずいぶんと汚染されてしまつた。当時は地上はもう少し広かつたらしいが、この穢れから逃れようとした者達がある場所の要石とやらを抜き、結果的に大地は天界と地上に別れてしまつたそうだ。その時の余波で地上の生命の八割から九割は死滅してしまつた。そのような大異変が起きてしまつたために、地上はかなり歪んでしまつたらしい。

そのままで全てが崩壊する危険すらあつたため、世界はむしろ歪みを力タチとして現出させることで安定化を計つた。こうして世界

の歪みがカタチになつたもの、それが『禍氣』だ。

今では地上に欠かせないものらしいが、元が歪みだつたために影響も多々出てきた。それが『禍氣』によつて変質してしまつた生物、『禍物』だ。

どうやら俺の生体エネルギー？だと思つていたものは、この『禍氣』とやらだつたようだ。

ついでとばかりに話してくれたが、イザナギは崩壊の危機は免れたものの未だに若干不安定な状態が続いている地上を調整するために天界から期限付きで降りてきたりしい。万が一地上が崩壊すれば、連鎖的に天界が崩壊するのは確定なので、必要なことなのだそうだ。

それにしても、『禍物』か。今までみてきたトンデモ生物達は、進化の過程をすつとばして魔改造されてたんだな。妙に機能的ではなさそうなものも多いとは思つていたが。それに、人型のものに遭遇したことがなかつたのは俺以外にいないからだつたようだ。その上、『禍氣』を丸めてみたり空を飛んでみたりしてついたのも俺ぐらいだ。俺だけ他と違うのは、中身が俺なせいなのだろうか。

「ウカノよ。こうしていつまでも立ち話をしていくても仕方あるまい。我の今住む地へ来てみぬか？ 招待しよう。我だけウカノの住居を知つてゐるのでは、不公平であるしな」

「ん？ そうだな…」ここから遠いのか？

「歩いていくのならば、一日ほどかかるであろうな」

「なんだ、すぐじゃないか。行く行く、今から行こうすぐ行こう

折角出会えた話し相手と早々にサヨナラでは、はなはだもつたない

い。そう思つた俺は、案内するとこういザナギにほいほいついていくことにした。しかし、同時に俺はイザナギの言葉に疑問も感じていた。

俺がこの地に住んで千三百年ほど、ここいら一帯は大体探りつくしていはずだったのだが、イザナギの住居はここから一日程度行ったところにあるという。ならば、何故今まで俺はそれを見つけられなかつたんだ？…こんなに真剣になつて考へてるので、これで、数日前に越してきました、なんてオチだったら怒るが。

色々と 違つ氣がある 日本神話（後編）

イザナギさん登場です。出す必要があったので出してみました。

ウカノや『禍物』は妖怪のプロトタイプです。ちなみに『禍氣』
妖力です。

あ、はじめまして、奥さん（前妻）

朝出て夜戻りとか書くヒマねーですよ。寝る時間削るとか本末転倒なような気も…

四話目です。かなりオリ神話になつてきましたよ。神話がします。あ、ヒルコとかも普通にいません。神話をいちいちながるのはさすがに時間がかかりすぎます。

あ、はじめまして、奥さん

夜が来て朝が来て夜が来て朝が来て。

今も昔も、空の顔は変わらない。いや、この時代の方がより澄んだ色をしているだろうか。科学など微塵もないこの世界では、自然のままの大気が広がっている。そんな空気の膜を通して、目には綺麗な空色に映るのだろう。

とはいって、人間だった頃の空を見ていた時間と狐になつてから空を見ていた時間は断然にこちらの方が長い。最近では昔、時系列的には未来の空色の方が夢に思えてくるほどだ。

空に限つた事ではなく、前世の記憶はずいぶんと薄れてきた。実際、前世で縁のあつた人達の顔はもつほとんど思い出することはできない。自分の顔に至つてはとりあえず目と鼻と口がついていた、という感じぐらいしか覚えていないのだ。…それもう完全に忘れてるだろという突つ込みは受け付けていない。きっともう一度見たら思い出すことができるんだ。多分。

雲を見ながら胡蝶の夢について考えていると、イザナギが突然立ち止まり俺に向かつて口を開いた。

「…」「…？」

既に昨日の内に森を抜け草原を歩いていたところだったが、イザナギはこの草原のど真ん中で立ち止まつた。しかし、周囲にはそれほど高くない草しかない。風が吹くたびにさわさわと静かにざわめき

とてもよい雰囲気、だが建物らしきものはどこにも、まるでない。
…はて、こいつは地面に穴でも掘つて住んでいるのだろうか。おい
おい神様、いくらなんでも泥臭すぎだろ。モグラかよ。

「ウカノ、何か失礼な事を考えておらんか？ ヌシの田に憐憫が見
えるような気がするのだが。…ふうむ、まあ、少し待て。 開

俺が口を開かず田で自身の心情を語つていると、イザナギは心外だ
とばかりに一言とともに右腕を振つた。

ぴしりと、何かが切り替わったような空気を感じるとともに、俺の
視界には突如高床式倉庫が現れた。正倉院と言つてもいいかもしれない
が、実際はどちらとも造りが違う建物だった。大体は木造で、
屋根も瓦葺ではない。さらにこの建物の屋根は『へ』のような形で
はなく『／』である。それほど鋭角でもないが、ずいぶんと斬新な
デザインだな。ログハウスというには造りが簡単だが、この草原に
は妙に合つている気がする。

しかし、そこにはさつきまで何もなかつたはず…いやちょっと待て、
俺はさつき周囲を見回した時確かにこの建築物を目に映していた、
ような気がする。いや、確かに田線をやつたはずだ。なのにどうし
てもう一度田にするまでこいつして認識できなかつたんだ？

「さて改めて。こじが我の住処だ。ふ…どうやら驚いたようだな、
我の屋敷の威容に」

「威容といふか異様というか。つかそもそも建物そのものに驚いた
んじゃねーよ。なんなんだ？ さっきのは。イザナギが何かするま
で、これは確かに見えていたはずなのに認識できなかつたぞ」

「そのことが…。何、屋敷の周囲に我が結界を張つていただけのことだ。視覚聴覚触覚嗅覚ついでに味覚、対象特定に必要な情報認識を阻害し、また正しくこの場所を認識できないものはここに入る事はできないようになつておる。とは言つてもこの結界はそれほど強力なものでもない。こつして一度認識してしまえば、再度先の結界を張つたところで一度根付いた認識を阻害する事はできんからな。阻害でなく認識遮断結界などでも張れば、別ではあるが」

つまり五感で捉えてはいても、それを明確に意識することができないといふことか。

しかしそれよりも、この世界では『結界』などという空想技術もまかり通るらしい。いや、そんなことも今更。『禍氣』だとか『禍物』だとか、以前は非常識だ非科学的だといえるようなものが蔓延つているのだ。仮に『魔法』が出てきたところで俺はもう驚かない。

…この時代からしてみれば未来の科学技術の方が『魔法』か。

「…んー？ そもそもこの『結界』はイザナギにとつては技術なのか？ それとも能力だとで感覚的に作つているのか？」

「いいや。一定の法則にのつとり正確に結界術式を構築し、我の神氣を燃料として起動させている。石を投げた時こめた力によつて飛ぶ距離が変わり、また法則に従つて地面に落ちるだろう。本質的にはまるで同じものだ、影響力が違うのだがな」

「ふうん…『結界術「式」』と言つたな？」

「つむ。何故そこまで念を押すのだ」

「いやいや、ただの確認だ。イザナギ、この『結界』といつやつを俺に教えてくれないか？ いざという時に役立ちそうだ」

能力の新たな分野の開拓。いくら俺とて、ゼロからこんなよくわからんものを組上げるのはおもそ不可能だ。が、『結界』の術式を知る事ができれば、そこからさらに応用範囲を広げていくことは可能だらう。離形さえあれば、あとはそれを組み替えていけばいいだけだ。それに、そうして試行錯誤して新しいモノを作っていくという快感は何事にも変えがたい。酒造りに何百年もつぎ始めたのも、造る過程も結果も俺にとっては娯楽のようなものだったからだ。

「教えるのは構わぬが…我が術式に使つてるのは『神氣』と『靈氣』だぞ。又シは『禍氣』を扱えるようだが、我の知る術式にそのまま使つことはできないのではないか？」

それは織り込み済みだ。式の根本の仕組みを理解できれば、機構を『神氣』『靈氣』？用から『禍氣』用に変換することが出来るはずだ。まあそのためにはイザナギの『神氣』『靈氣』？を詳しく知らなければいけないだろうが…それも含めて教えてもらおう。いざとなれば、時間をかけて試行だけ繰り返していけばいい。いつかはできるだろ。

「いや、いい。術式、あるいは基礎だけでも教えてくれたら、こちらで何とかしよう」

「ふむ、了解した。… そう言えば屋敷の前まで来たところに、何故我々はわざわざ立ち話をしてくるのであらうな」

「そうですよ。わざわざ結界を開けたところに、いつたい屋敷の前で何をしているのですか？… あら、お密さんが来ていたのですね」

と、イザナギと結局立ち話をしていると、突然俺でもイザナギのものでもない声が混ざった。その声のした方を見てみると、建物の扉が開いておりその前には一人の女性が呆れた顔で立っていた。俺と目が合うと二口と笑ってひとつ会釈をする様は、とても美しい。イザナギにも共通しているが、一人とも綺麗な黒髪と整った顔立ちをしている。

「うむ、帰つたぞ、イザナミ」

「お帰りなさい。それから、いらっしゃい」

「あ、お邪魔します」

はつ。つい丁寧な言葉遣いをしてしまった。彼女の丁寧な雰囲気には自分の気も引き締まるようなものを感じる。そしてイザナギの次はイザナミさんが来ました。もうアマテラスとか来ていいんじゃないかな。

イザナミさんにはイザナギと同等ほどの力を感じるが、イザナギと違いとも物静かな雰囲気で、そして神秘的な空気にあふれていた。イザナギはもう少し豪儀な感じだ、そして神秘的というか神々しい。決して騒がしいわけではないが、威風堂々としているといえばいいだろうか。

イザナギの家に上がり部屋まで案内されたが、中の造りはとても単純だった。小部屋といえるような壁で区切られた部屋は2・3ほどしかないようで、大部屋一つが家の大体のスペースを占有している。

床は板張りで、しかしそののような技術で接合してあるのか軋みなどは一切なかつた。つやつやとした表面はそしもの一枚の板のようで、未来の科学技術をもつてしても「これほどのものはなかなか作れはないだろ?」

さて、俺は今大部屋の真ん中でイザナギと膝を突き合わせて座つているのだが、現在進行形で小さい敗北感と大きい感動に打ちのめされていた。そんな俺の手にあるのは一つの器。イザナギの手にも同じ物があり、なみなみと透明の液体がそそがれている。

「どうだ。なかなかのものであろう?」

イザナギの言葉に、俺は小さく頷いた。これほどのものは、前世も含めて味わつた事はない。キリッとした辛口とほんのりとした甘味が絶妙に混在し、口当たりも良く、すっと口から喉へと伝つてゆく。飲んでしまつた後も身体の隅々まで何かが巡つているような気がして、とてもいい気分になるのだった。

「おかりいかがですか?」

「あ、お願ひします…」

そばに座つていたイザナミさんが空になつた器を見てお代わりを差し出した。俺はなんとなく借りてきた猫のようになりながら注いでもらい、ひつなつた発端を思い出していた。

家に上げられた後は大部屋に案内され、用意された座布団に腰を下ろしたのだが、その時に肩にぶら下げていた瓢箪を下ろしたのが始まりだ。

どうやらイザナギも気になつていたらしいが、聞くタイミングが今

まで無かつたらしい。それは何か、との問い合わせに俺が簡便に『酒』と答えるとそのまま酒の話題になつたのだ。イザナギも酒を嗜むと聞き、まずは一杯ご馳走になつたわけだが、結果は上の通り。

俺の作った酒ではこれほどの味を出すには、まだ千年単位の時間が必要では無いだらうか。俺の酒は今壁にぶち当たつてはいる。その壁をまず越えなければならぬのだ、時間がかかるのは当然の事。しかもそれを乗り越えたところで課題はまだいくつも残つてゐることだろう。それほどの代物なのだ、イザナギの酒は。まさに神酒みきと言つたところか。

「ウカノはこの世界に生まれてどれほどになるのだ？」

「女に歳聞くなよな。別にいいけどさ。… そうだな、多分八十万ほど太陽と月を見たような気がするが。そつとつイザナギはどうなんだ」

「我が。我は、いやイザナミも我と同時期に生まれた事を考えれば我らとなるが、この世界ができた頃に生まれたことは覚えているのだがな。どれほどかは覚えておらん」

「昔つてレベルじゃないな。生まれた時はどんな景色だつたんだ？」

「ふーむ…虚無だったような気もすれば、何かが出来上がつていたような気もする。なんとも言えん曖昧な世界だつたように思つがな

生まれた時一番最初に何を見ましたかとかナンセンスすぎたか。俺は今世の最初が今ティニユーだつたから覚えているが、イザナギはそういうわけでもないのだ。ましてや気の遠くなるような年月が過ぎてゐるのに詳しく覚えているはずもない。イザナギの話からすれば、一応イザナギの前があつたということだらうか。…俺が見たわ

けじやないしな。イザナギもあまり覚えていないことこのて考えたところで不毛か。

「イザナギは地上を調整する、とか言つてたよな。どうこういふを変えるんだ？」

「ふーむ。まずは一番の大仕事となるであらうが、『禍氣』に手をつけることになるだらう。このままのカタチで地上に残るには劇物すぎるのでは、密度を薄めるつもりだ。量が少なければ問題は無いのだが、今の地上にはこれに満ち溢れてこる」

「やつすむとい、『禍物』はどうなるんだ？」

「どうもならんだらう。これ以上の変化は止まる、が、それでどうなるといつわけではない。…いや、成り立ちが少し変わる事になるかもしけんな。我らの天界の天人同様、地上には『禍氣』の影響で劇的な速度でヒトが生まれつつある。そうすれば感情も生まれる、正だけなればよいのだが、そういうわけにもいかんだろうな」

「よく分からなくなつてきただぞ。簡単に頼む」

「むう。喜怒哀樂だけならばむしろよこのだが、憎悪や恐怖といつた顕著な負の気は周囲に少なからず影響を及ぼる。それらが深刻な変化をもたらす前に、何らかのおとしふりを作つておかねばいかんのだ。…おそれく『禍氣』を薄ぐするためにそれらを使い、それらのおとしふりには『禍氣』を使つことになるだらう」

「…ふうん。ま、すぐの話じゃないんだな」

「つむ。この案が形になるのはずいぶんと先になるであらうな」

「さて、俺はそろそろ帰るぞ。あ、イザナミさんもありがとうございました」

まるでうわばみの「とくかぱかぱ」と器を空け、アルコールを微妙に分解しながらほろ酔い状態に調整し俺はようやく席を立つた。

イザナミさんは、手を伸ばしながら微笑み

「おおー?」

さりげなく俺の頭に伸びてきた手を、俺は寸前で反射的にかわした。かわされたイザナミさんは伸ばした手をふらりと彷徨わせている。その顔はどうかしょぼんとしていた。その視線は俺の頭の上、具体的にはふさふさの耳に向いている気がする。

「む、すまぬな。イザナミは可愛いものが好きなのだ。前も三つ頭の犬を拾ってきて…」

イザナギはスルーするとして、なんだかイザナミさんの顔を見ていると俺が悪いような気がしてきたので、俺はおとなしく頭を差し出した。

するとイザナミさんはこいつと笑うと改めて手を伸ばし、俺の頭を撫でるのだった。母狐になめられた記憶はあるが、撫でられた記憶は無い。それ以降はそんな纖細な動作をするものには出会った事は無い。狐になって初めての経験に、耳がふるふると震えている気がする。まあイザナミさんが嬉しそうなので本望です。

「しかしウカノよ

ようやく解放された俺に、イザナギがふと声をかけた。さつきまでケルベロスもどきの話を熱く語っていた時とは違い、その顔には真剣味に溢れている。俺はそれにつられて自然と身体を引き締めた。

「我は、ヌシのその口調はどうかと思つただが

「氣を引き締めた俺の緊張を返せ。なんことどうでもいいだり…。それに、理由はあるぞ?」

「ほう、なんだそれは」

「実はな

「つむ」

「俺の前世が男だったんだ」

「…「つむ。それでその理由とは?」

おい神様、スルーすんな。

あ、せじねまつて、黙れん（後輩や）

東方でも結界とか魔法とかありましたし、いいですよね。きっと。

あ、いくつか時代間の価値観や法則などを画一化してます。美醜を昔と今でいちいち表現するのはめんどくです。

心の揺れ幅、前代未聞（前書き）

少し短め？　自分じゃ良くわかんないですね。

今回さらにオリ設定追加。黄泉の国＝地獄になつてます。本来は違う感じですねけどね、今作ではこの設定でお願いします。

最近はかなり暴走してゐるような…反響に戦々恐々してます。

イザナギやイザナミさんと交流を始めてこれまたずいぶんと経った。多分、五百年ぐらい。ちょっと前に俺の尻尾が六本に増えてたので、間違いは無いと思う。

そう、尻尾が六本だ。もふもふで、寝る時などに手足を折りたたんで身体を丸ごとこの尻尾に埋めると、それはもう最高の気分なのが、その分とても高張る。そこで俺は何本か隠すことができないかと考えたわけだ。そもそも、俺の本体は狐なのだ。それが、こうして人の形をとつて自然に生活している。ならばさらに人に近づけることができるのではないか？ その考えの下、尻尾が一本になつた俺をイメージしてみると、思いの外簡単に成功した。ぱふっ、と空気をはたくよくな音とともに俺の身体の中に引っ込んでいったのだ。因みに狐の状態に戻ることもできるが、人型の方が便利なので四足に戻ることはない。それこそ数百年に二、三度だ。

さてイザナギのところへはたびたび遊びに行つては酒を飲み交わしたり術式を学んだりこの世界のことを教えてもらつたりと、することはいくらでもあるのだが、イザナギは忙しいのかよく家を空けている。その補佐らしいイザナミさんもよくイザナギについていくお陰で、家に行つても誰にいないなんてことはほざらにある。

そんな時はふてくされて一人で飲んだくれたり、イザナギの家に張つてある結界をいじつたりしている。ちゃんと元には戻してくるよ？

ところで、イザナギに教わった結界術式だが、俺には使えないことが分かつた。え、イザナギの結界をいじつたりしてるじゃないかって？ うん、術式を組み立てたり組み替えたりすること自体はでき

るんだけど、残念ながらイザナギの術式じゃ『禍氣』を燃料にすることができなかつたんだよね。

仮に『靈氣』を液体燃料だとすると、『禍氣』は氣体燃料だ。かなり強引なたとえではあるが、しかし同じ機構で使うにはこれら両者の質は違います。それもこれらは氣体液体の関係のように熱や圧力など外部から力を与えると状態を変えるような、そんな単純な関係ではない。分かつことは、『禍氣』用の術式を新しく確立しなければならないということだ。

因みに『神氣』とやらはかなり万能で、その上『靈氣』や『禍氣』との力の密度とはまるで違い、相当強力なものだ。俺も『神氣』欲しいなー。天人の中でも力が強く、かつ靈格の高い者は持つてゐるらしいけど。イザナギ曰く、いつかは俺にも『神氣』が備わるらしいが、それも何年後の事か。俺を神と名づけたイザナギが言うのだから、間違いは無いだろうが。

以前にも記した氣がするが、俺の能力は既存のものを読み取つたり学習する事などに關しては桁違いに優れていますが、完全に新しい何かを組み立てるとなるとそれはいかない。

今回は『靈氣』方式とはいの事象を確立するための術式を知ることができたので、まつたくゼロからやるよりはましなのだが、それでも氣の遠くなるような時間が必要となるだろう。

そもそも『力』であるのに何故これほど二つに違つてあるのかと言えば、それはおそらく成り立ちのせいだろう。確かに俺は『禍氣』を放出し、イザナギは『靈氣』を発している。しかし、元から生体から生じた『靈氣』とは違い、『禍氣』は世界によつて半ば偶發的に生み出されたものだ。およそ血と空氣ほど違つてあるのに、同じエネルギーとして使うことなどできよはずも無い。

結局大いに暇は潰せるているのだが、五百年経つてもまだ完成して

いないと言えばその苦難も分かつてもらえるだろうか。無論術式開発ばかりをしてきたわけではないが、それでも丸々一百年ほどはやつてきたはず。必要になるのは能力より突発的な発想なので、一人ではどうしても時間がかかってしまう。発想、というかとっかかりさえ確立することができれば、俺の能力ならば瞬く間にそれを補完することができるだろう。最初の一歩や一歩さえ踏み出せれば、あとは筋斗雲に乗って一つ飛びーとでも言えるほどなのが、その最初の一歩が遅々として進まないのが現在の状況だ。

「あ、そういうえば出産祝いとかどうしよう。…果物詰め合わせでいいかなー」

百年ほど前にイザナミさんが妊娠していることが分かった。きっと二人でくんづぼぐれつ夜のプロレスをした結果なのだろう。そもそも出産時期らしいのだが、臨月まで百年とかどんだけー。妊娠している間にかなり弱体化しているということなので、贈り物は酒なんかより果物のほうがいいだろう。

俺はくびくびと瓢箪に口をつけながら、果物類を集めている畠のほうへとよさそうなものを探しに、小屋の外へと出た。ちなみに中身はイザナギにもらつた酒だつたりする。いまだにあの味に勝るようなものは作れてはいない。

空を見上げると、いつもと変わらず青い空が広がっている。天気が悪くなりそうな様子もない。

が、それを確かめ歩き出そうとしたとき、その空が一瞬で真っ赤に染まつた。

「え……！？」

夕焼けなど、こんな時間ではありえない。そもそも数秒前までは青空だったのだ、何の前兆もなく赤色になるわけがない。

俺はいつそ空まで飛んで原因を確かめるかと、宙に浮いた。が、木々を越えたあたりですぐにその原因を見つけることができた。

「しまつた……！ カグツチか！」

イザナギの家がある草原から立ち上がる巨大な紅蓮の火柱。それはまさに天まで届く、いや、むしろ天すら焦がしていた。触れるもの燃えるものは一瞬で消し炭にしてしまっているため火事はおきていなが、外周でこれならば火柱の中心は溶解してしまっているのではないか。だろうか。

俺が草原のほうへと行つてみると、草原は案の定ほぼ完全に焼失していた。灰すらも残っていない。

そのせいでイザナギの家の場所を捜すのに手間取つてしまつたが、だいたい焼け跡の中心あたりにくぼみのような場所にイザナギらしき人影がいるのが見えた。しかし、イザナミさんの姿はどこにもない。

俺はイザナギの少し後に降り立ち、周囲を見回した。あの高床式の家も元から無かつたかのように、ただただ更地が広がつていて。そして、イザナギのそばにはいつもイザナギが腰につけていた剣が突き刺さっている、真っ黒な炭のようなものがあつた。それが、何であつたのかなどは考えたくは無い。イザナギがここにいて、イザ

ナミさんがここにいないことが分かれば、それで十分だ。そして、それも風に吹かれるとぐずぐずになり灰のようになつてゆく。

「イザナギ」

俺は、俺が来ても微動だにしなかつたイザナギの背中に声をかけた。何をしたのか、イザナギの力はかなり弱体化してしまっていた、それでも俺よりは大きいのだが。

イザナギはピクリと震えると、ようやく俺のほうを振り向いた。しかし、その瞳は俺を見るはいない。光の反射もなくなつてしまつたかのように、とても虚ろなものだ。

「ウカノか」

「ああ。何が、あつた?」

「…我らの子が、生まれたのだ。しかし、奴は天を焼き、イザナミを焼いた。だから我が殺した」

やはり間違いないらしい。神話では火傷程度だつたが、実際のこの状況では火傷などというレベルではない。そして、イザナギが天之尾羽張で刺し殺した。天界から万が一のためにと持つて来ていたものらしいが、その万が一で役に立つてしまつとは皮肉なものだ。

「…」

しばし、その場に静寂が満ちた。俺は默祷するために。イザナギは

…何を考えているのだろう。

数分後、俺は再度口を開いた。『のままにしてても、仕方が無い。

「そつと行くぞ、イザナギ」

神話のようにはさせたくない。イザナギに聞いた話を考えれば、時間が経てば経つほどまずいことになる。

「どうへ、行くと言つのだ。ウカノ」

空っぽの声で、俺に返事をするイザナギ。なんだか、イライラする。俺は、いつまでもこんな虚りで弱々しくてうじうじしている親友を見ていたくはない。

放つて置けば、こいつはいつまでもここにいるだろう。我を取り戻すのがどれほど先か。しかしそれでは駄目だ、間に合わなくなる。

「馬鹿野郎！ 黄泉に決まつてんだろ？ が！ 『我らにひとつては死と消滅は同義ではない』 つて前教えてくれただろ？ が！」

はるか昔、天界が地上を離れた頃、地底には同時に巨大な空洞が出現した。まるで天にできた世界に対する反作用のように。そしてそこは最大の『禍氣』の集積地帯である。まさに下界における最大の歪みもある。

地上で器が死んだとき、魂はこの地底の大空洞、黄泉へと自然に落ちてゆく。ならばこの地上で死んだイザナミさんも黄泉に行くはずなのだ。…しかしいかにイザナミさんといえど、いつまでもそのままいれば『禍氣』に魂を蝕まれ、イザナミさんはイザナミさんで無くなってしまうだろう。そうなった時は、それが本当の死で、イザナミさんの消滅だ。たとえ地上に戻すことができなくとも、それを避けることの意味は大きい。

「「」のままいつまでもお前がここいたら、イザナミさんは本当に死んじまうんだぞ！…もついい！…お前が行かなきゃ、俺が行く！」

びつしてこんなに心が乱れるのか分からず、俺はただただその激情を言葉に乗せて呆然としているイザナギにたたきつけた。…これほどの感情の波は、前世すらも含めて初めてだつたかも知れない。その波とともに浮かんでくるのは、いつもの威風堂々としたイザナギと今のイザナギの姿、そしていつものイザナミさんの微笑みと、灰となつて空へと散り散りに消えて行つた消し炭。…その食い違いが、たまらなく俺をかき乱した。

そんな俺を見られるのが嫌で俺は踵をかえし飛び立とつとした。

「…待て」

しかし、その前に俺の肩に手が置かれた。その手はいつもと比べると、頼りないほど弱々しい。だが聞こえた声はいつもの調子を取り戻してきていた。

「こやひなぎ？」

俺が振り向くと、イザナギは俺の肩から手をどけて地面に深々と刺さつていた天之尾羽張を引き抜いた。そしてそれを腰の定位位置に挿すと、もう一度俺のほうを向いた。しかし、なぜかその端正な顔が少し歪められる。

「すまなかつた、手間を、かけさせてしまつたな。…私はウカノのそのような顔を初めて見るぞ。いつもと変わらぬよつにも見えるが、しかしどこか辛そうだ。そんな顔をせずともいい。我はもう、大丈夫だ」

そして安心しむ、とばかりに笑うのだった。

俺はぺたりと自分の顔を触った。なるほど口も頬も動いてはいないが、しかし強張っているような気がする。見ただけでこれが分かるとは、存外イザナギも俺の事を見ていたらしい。

と、そうして顔に触っているのをイザナギが見ているのに気づき、ばつが悪くなつた俺はそっぽを向きながら答えた。

「ふん。俺には、分からんな」

ぶつきらぼうな俺の言葉にイザナギは苦笑をもらした。その顔は、もう完全にいつもの調子を取り戻している。そして空中に飛び上がり俺のほうを向いて言つた。

「さて、我は行くとするが、ウカノも行くのか?」

「お世話になつたからな。俺もありがとうござは、言いたいセ

前は、何も言わずに逝つてしまつたからな。

俺は一度死んだときのことを思ひ出しつつ、やつと顔をこね出さずに続けた。

心の揺れ幅、前代未聞（後書き）

今日は急ぎますので、後で付け足しに来るかもしれません。それで
は。

赤黒い地の底で（前書き）

ଓঠে ক'রি আবে ক'রো

この話は入れるかどうか迷ったんですけど、一応書き上げられたら入れちゃいます。

前話含めてシリアス風味ですかね。

赤黒い地の底で

むき出しになつた「じりじり」とした地面にある、巨大な躰割れたような空洞。その向こうにはホールタルのようなどりりとした闇が広がり、生者の侵入を拒んでいるようにも見える。そこから質量すら感じさせるほど濃密な『禍氣』が、飽和状態をじらえるかのように漏れだしていた。

黄泉への入り口。生者でここに入りまともでいられるものは、それこそ地上では一握りだらう。なにせ死者でさえこの環境では変質してしまうのだ。

俺はこの場所を知らなかつたためイザナギに案内されて来たのは、先刻のことだ。入り口から見えた中同様じばらく濃厚な闇が広がつていたが、もうじばらく奥へ行くと少しづつ闇が晴れていった。それでも薄暗く、むしろうすらと見えるだけの周囲の風景には寒氣すら感じじる。赤や黒や茶や、そんな色が滅茶苦茶に混じつたような地肌がむき出しになつていて。第一印象は、汚染物質で完全に汚染された荒廃した大地といったところだ。以前俺が行つた地獄も、この風景と比べればまだましだ。獄卒の鬼がいたぶんこちらより断然過ごしやすかつたとも言える。彼らは人ではなかつたが、ある意味とてもまつすぐな氣性をしていて付き合つ側としては気分が良かつた。

しかしここはどうだ。濃密な『禍氣』は目に見える風景すら歪ませているようで、ただただ禍々しい。そして身体に纏わりつきこむらの歩みを遅くさせた。かなり強力な部類の『禍物』である俺でさえ、あまり長くいると俺が俺自身でなくなつてしまつだらう。

「…イザナギ、イザナミさんがどこにいるかは分かるのか?」

やうじのふや、半端じゃないや。元が天界の反作用であることを
考えると、それも当たり前か

「ふ、我は長き時をイザナミとともに過いじてきたのだ。我にイザ
ナミについて分からぬことなどは無い。…つむ、それほど遠くは
ない、イザナミも我に気づいたよつだ。それに、どうやらまだ『イ
ザナミ』のようであるな」

「だが、ここにくるまでも時間がかかつたんだ。あまり、時間も無い
だらう。急ぐぞ」

「いわ」

俺にはまったくイザナミさんの居場所が分からないので、俺はとにかくイザナギについて行くことしかできない。特にこの場所は『禍
氣』が濃すぎて、他の何かを感じるには俺の感覚は鋭すぎた。どれだけ嗅覚が優れていようと、激臭の中では役に立たないといったところだらうか。

「む」

しばらく行ったところで、前を進んでいたイザナギが止まった。て
っきりイザナミさんを見つけたのかと思ったが、前にも、そして周
囲にも誰もいない。ただ死の大地がどこまでも続いているだけだ。

「どうしたんだ、イザナギ。急ぐんだから、立ち止まつてゐ暇はな
いだろ」

すると、イザナギは不思議そうな顔をして俺のほうを見た。そして

前の空間に両手を伸ばすと俺でいつ話したのだ。

「何を言つてこりのだ。イザナミならここにいるであら」

「え？」

首を傾げてイザナギが両手を伸ばしたところへと田を向けるが、そこにはやはり何もいない。訝しげな視線をイザナギのほうへと向けると、イザナギは反対に呆れたように言つた。

「ウカノ。ヌシは『眼』を閉じているではないか…その状態で魂を見ることができるはずがなかつ」

「？？？」

そのイザナギの言葉にさうに首をかしげる。俺は今こいつして眼を開いているはずじゃないか。

俺はもう一度イザナギの両手のあたりを眼を凝らすように見つめた。俺に分からぬことを言つても、基本的にイザナギの言つている事は全て正しい。なので俺はイザナギの言葉に従い、『眼』が開くようなイメージを浮かべるのだった。

すると、田に見える風景が途端に変わった。具体的に言えば視界が広がり、今まで見えなかつたようなものが見えるようになった、という感じだ。後々気づいたことだが、どうやらこのときの俺は眼の擬態を外し、禍物狐としての眼に戻していらっしゃい。丸い瞳孔が縦に割れ、金色も増していたようだ。まさにイザナギの言つとおり俺は『眼』を閉じていたのだ。

その状態でイザナギの両手の先に見えたのは、漆黒と紅蓮が混ざり

たようなぼんやりとした光の塊である。むらむら良く見るようにすると、それに重なるように半透明のイザナミさんの姿が視界に浮かんできた。

この環境にあって、イザナミさんは変わらず穏やかに笑っていた。赤い何かを大事に抱えるようにして。

ぱくぱくと半透明のイザナミさんの口が動き、それに合わせてイザナギが頷く。なにやら話しているようだが、俺にはさっぱり分からぬ。イザナギの顔が驚いたり暗くなったり複雑そうになったり嬉しそうになつたりするのをただ見つめているだけであった。

二人の話に区切りがついたところで、俺はイザナギに何を話していたのかを聞いた。

イザナギが言つこゝ、イザナミさんは既にギリギリの状態らしい。つまり、完全に変質し彼女の本質が暴走してしまったのも時間の問題だとか。なのでイザナミさんをここ、黄泉の奥に封印してしまつらしい。封印式には魂の浄化式も含め、長い時間をかけて歪みを戻し天界に戻すという計画だそうだ。…概算では億単位の時間がかかるらしいが。

因みに、一人の子、カグツチの魂はイザナミさんと一緒にいて、しかも融合しかかっている。それをゆっくりと剥がすことも含めての、気の遠くなるような時間の封印のようだ。

カグツチの名前は産まれる前から決めていたらしく、ここに来てようやくちゃんと名づけることができたと、複雑そうな中にも嬉しさを見せながらイザナギはそう言つた。愛せるのか、と問うと、『我らが愛さなければ誰が愛するのだ』と当たり前のようになつて言われてしまつた。かくも深きは親の愛、とな。本当に、幸せ夫婦だよ、イザナギといざなミさんは、あんなことがあつたというのにな。

封印場所に選ばれたのは、イザナミさんと出合った場所からさらに少し行った場所。擂り鉢状に窪んだクレーターのような場所の中心である。

イザナミさんがそこに立つと、イザナギは地面に宙に、無数の線を描いていった。さらにはそれと符合するように何本かの短い線でできた記号をいくつも連ねてゆく。イザナミが教えてくれた封印式の術式であることに気づいたが、今までに無いほどにそれは強固なものだ。普通の術式に注げる力の限界値を桶一杯分とするとき、これの限界値は湖ほどはあるだろうか？

その間俺はと言えば、状態ができるだけ進まないようじと簡易的にイザナギがイザナミさんの周囲に張った結界の補強を行っていた。力こそ注げないが、術式に干渉することぐらいは俺にでもできる。イザナミさんはその様子を、にこにこしながら眺めていた。その間中もずっと、大事そうに何かを抱えているが、それが気になつた俺は少し身を乗り出した。イザナミさんもそれに気づき少しがんぐれる。

イザナミさんの腕の中にいたのは、一人の赤子である。紅蓮色の髪が既に生えていて、穏やかにすやすやと眠っていた。それを見て、俺は安堵するように息をついた気がする。どうやら幸せ夫婦の子供も、いつの日か幸せになれそうだと。

イザナギは術式を束ねるような場所に天之尾羽張を刺しており、そ

イザナミさんに少しだけお礼を言つた後、俺は術式が完成したと言ふイザナギについて窪地の外へ出た。これからイザナギが力を注ぐことによってやく封印術が発動する。

イザナギは術式を束ねるような場所に天之尾羽張を刺しており、そ

れを中心に術式全体へと力を行き渡らせ行く。

その操作自体は非常に順調に進んで行き、何も無く終わると思われた。が、異変が起きたのは終盤にさしかかったところである。

「――！」

身体を押されて、イザナミさんが苦しみ始めたのだ。口からは音にもならない悲鳴が漏れ、俺達の目の前で何かがイザナミさんを変えしていく。封印式には魂情報保存効果も仕込んであるようなのでイザナミさんそのものが消えてしまつことはもうないのだが、それでもこの様子を見ていて心中穏やかでいられるはずがない。

そして、その変化は直に臨界点を越えた。

「――――――！」

音にもならなかつた悲鳴が、ある時を境に空気を揺るがす大叫声へと変わる。だがそれは到底人に発音できるよつなものではない。それと同時にイザナミさんを中心に真っ黒な靄のようなものが噴出し、イザナミさんを覆い隠してゆく。そしてそれだけに留まらずイザナギの構築し完成しかけていた封印とぶつかり凌ぎを削る。見たことも無いほど強固だったはずの結界は、その黒い靄に押されぎしぎしと音を立てて軋み始めた。

「イザナギー！」

「……つ……つ……！」

かなりまづい状況に思わずイザナギのほうを見るが、イザナギも脂

汗を大量に流しながら力を止まることなくどんどん放出している。前代未聞の大封印なのだ、他にかかずらつていられる暇は無いだろう。しかし、封印はそれに構わずなおも軋みをあげる。黒い靄は完全に封印内を埋め尽くし、イザナミさんの姿は全く見ることができない。

「くそつ」

俺は封印術式に手を触れた。じゅうと、すさまじい熱さが伝わるとともに手が焼け爛れてゆく。しかし、俺はそれに構わず術式へと介入した。

確かに、この術式は今まで見たことの無いほど高度なものだ。イザナギにとっても最高のものを作ったのだろう。しかし、こと術式の構築技術ならば、『式』に特化した能力を持つ俺はイザナギの上を行く。

綻んだ部位を補強し、そしてより緻密に強固に術式を後付けで構築してゆく。今の状況で基盤の術式をいじれば、一気に崩壊してしまうだろう。だがその上から被せてゆくような形をとれば問題ない。

そして、どれほどの時間が経つただろうか。

イザナギと俺の疲労がピークに達した時、途端に封印が収束し始め、黒い靄も押し戻してゆく。そしてぎりぎりまで収束すると、封印から真っ赤な炎が溢れだし封印を覆つていった。炎は際限を知らないかのように溝地に溜まつていき、淵でようやく止まつた。深紅の炎はまるで海のようにそこで波打つている。

イザナギも俺も封印が完成したことを悟り、深々と息を吐き出した。

赤黒い地の底で（後書き）

はて何を書きたかったのか忘れてしまったので、また今度。メモとかしどか無いと駄目ですね。

能力って結構あること思つ（前書き）

もう七話目ですね。鈍亀としながら更新していますけど、こんなのは最初だけです。

なんていうか今更ですけど文章多いですね。眼が疲れます。
ところどころの話つてゆっくり進んでるんでしょうかね、早く進んでるんでしょうかね。時間はぽんぽん飛んできますけど。

能力つて結構するいと思づ

イザナミさんを黄泉に封印した後、イザナギは一度天界へと戻つていつた。著しく減退してしまつた力を回復しなければと言つと、挨拶もそこにふらふらと天へと上つて行つたのだ。なるほど封印を終えた後のイザナギは俺ですら勝てそうなほど力が落ち込んでいて、あの状態で地上で仕事が続けられるかと言えば自信を持つてないと言える。

イザナギは完全に力を取り戻すまで最低でも千年はかかるとか言つてゐたが、いくらなんでもスケールでかすぎだろ。

さて、俺はと言えばまたわりと暇な日常に戻つていた。

イザナギやイザナミさんと交流していた頃は毎日が充実していたために、一人でぼんやりしている毎日は少し堪えた。人間も信じられないほどの速度で進化しているが、未だ俺と意思疎通をはかれるほどではない。

また人間の進化に伴い、『禍物』ではない異形も生まれ始めた。イザナギが以前やつていた仕事が、ここに来てようやく形になり始めたのだ。

彼らは人間の負の気が『禍氣』と結びつくことで、それを器として生まれる。そして負の気が核であるためか、彼らは基本的に人間に対して敵愾心を持つっていた。いや、というよりも『本質的に人間を害する存在』と言つたほうが良いだろうか？彼らが感情的な理由無く人間を害するとき、人間に対して明確な悪意を持つものは実はところ多くはない。悪戯のようなもの、人間にとつては堪つたものではないが、しかしそれこそが彼らの存在意義とも言えた。

人間を襲い、その際に出される人間の負の氣で自身の存在を補填する。そして彼らが人間を襲うたびに、人間の彼らに対する恐怖は増してゆく。そのような循環ができていた。

彼らは『禍物』と比べると少し力が劣るが、しかし知能という点では『禍物』の上を行つた。彼らは日々順調に増えているが、彼らを生み出したのは人間の負の感情である。それがこれほどの現象を引き起こしているのだ、イザナギが危惧したように彼らのような存在でおとしどころを作つておかなければ負の氣がどうような作用を引き起こしていたか、想像もつかない。それを思えば、イザナギの仕事はうまくいったと言つてもいいだろう。

そして今まで地上に蔓延つっていた『禍物』はと言えば、日に日に減少してゆき、彼らに取つて代わられつつある。

原因はいくつかあるが、一つは彼らが生み出されていることで『禍氣』の濃度が減少していること。『禍物』の出現原因も彼ら同様『禍氣』だが、この場合彼らのほうが優先される。負の氣は『禍氣』に引き寄せられやすく、『禍氣』が通常生体を無理やり『禍物』へと変容させることを考えれば、非常に自然な流れだ。

二つは『禍物』が彼らと同じものへと変わつていつていること。上で述べたように負の氣は『禍氣』へと吸い寄せられてゆく。そして『禍物』は『禍氣』を放出している存在だ、負の氣が『禍物』とながることもむしろ自然な流れと言える。

そうして、徐々に『禍物』は彼らになつてゆくのだ。元々『禍物』は変異した存在。それゆえ新たな変化に対しても順応してしまつていた。

最終的に、世界からはほとんどの『禍物』が消えてしまうだらう。
：俺のような例外を除いて。

それに気づいたのは、俺の尻尾がハ本になつた頃のことだ。そろそろイザナギ帰つてくるかなー、と日々心待ちにしていた俺は、愕然としたものだ。俺が彼らと同様の存在に近くなつてることに。

俺は、正直俺がどういう存在なのか分かつてはいない。今までは俺が『禍氣』を放つていたため『禍物』なんだと判断していたが、ここここに来て、俺の力が一つ増えたのだ。

人間は、イザナギ同様『靈氣』という力を持ち、イザナギはそれに加えて『神氣』を持ち、そして『禍物』は『禍氣』を持っている。彼らも当然力を持っているが、しかし上であげたもののどれとも違う。と言つて良いかどうかは迷うところだ。何せ彼らの持つ力は人間の『靈氣』と本質的にはまるで同じものだからだ。それでも違うといえるのは、『靈氣』と、仮に『反靈氣』とするが、これらはそれぞれ正反対の力なためだ。

人間は専ら正の氣のほうが多い。そのため、正の氣というフィルターを通すようにして外に放出されるのは正方向の『靈氣』だ。

そして、彼らは元々負の氣が元であるため、当然負の氣のほうが多い。結果的に、負の氣というフィルターを通して外に放出されるのは負方向の『反靈氣』というわけだ。

さて、ここまで来たら分かると思うが、俺に増えた力というのがこの『反靈氣』というわけだ。俺の場合他の『禍物』とは違い、『禍物』の特性たる『禍氣』を失つてはいない。つまり完全に彼らと同じにはなつていないので。しかし、今更例外だと慌てることもない。俺が例外だったのは『禍物』だったころからだ。そもそも、イザナギは突発的事態で急に天界に戻ることになつた。イザナギの機構に不具合があつてもおかしくはない。

そして俺が何故愕然としたかと言えば、実のところ歡喜のためだとも言える。この『反靈氣』は『靈氣』の正反対の力だが、しかしその本質はまるで同じものだ。

つまり。

「よつやく、イザナギ式術式を使つことができひわけだー。」

イザナギに教えられた術式は基本的に『靈氣』に対応したものだ。今まで全く質の違つ『禍氣』であつたためにどうしようもなかつたが、今度の『反靈氣』は違つ。『靈氣』用の術式を『反靈氣』用に変換する程度のことは俺からすれば容易なものだ。

それからの俺は、近年稀に見るハイテンションで森を豪風のように駆け巡つた。他にこの嬉しさを表現する方法が思いつかなかつたといふか、衝動のままに森の中を疾走していたのだ。尻尾も五本ばかりだして『禍氣』や『反靈氣』を撒き散らしながら走り回つていたものだから、血氣盛んな異形を呼び寄せることになつたが、俺がそのことに構うことはなかつた。

普段ならば一本ほどに抑え、面倒の外敵を呼び寄せなによつて力の放出も控えている。眼を擬態していると機能が下がつていたように、尻尾も擬態していると俺の全体の力は減退する。上のような理由からむしろ好都合とは考えていたが…

しかし、この時の俺は故意に連中を呼び寄せたとも言えるだらつ。俺は使つてみたかったのだ、『反靈氣』を。

そして、その口引つ掛かつた異形は俺もはじめて見るほどの駒級の異形だつた。

轟々と木々を揺らしながら森の中を爆走していると、そいつは木々をばきばきと破壊しながら現れた。しかしそのくせ足音などは不気味に静かで、そして異常に速い。

そして、がさがさと木々を踏み倒し搔き分け俺のまえにやつてきたのは、一匹の蜘蛛だつた。

無論ただの蜘蛛ではない、正面から見える高さで既に二メートル強。でかいなんてものじゃない。八つの紫の目はどこを見ているのか分からぬが、なぜか全て俺を見つめているような気がした。身体にはハ本ではなく十二本の脚がついており、さらに先端には鋭い鎌がついている。そして全身真っ黒で鋼のような剛毛がびっしりと生えており、全体的には『すんぐりむつくり』という印象を俺に与えた。

その上、俺を驚かせたのはそいつは『禍氣』と『反靈氣』の両方を放っていたのだ。どうやら俺同様の例外らしい。

「あー、あああ、あー」

蜘蛛から、鑄びた金属と金属を擦り合わせたような妙に濁った音が漏れ出た。どうやらこれが彼?の鳴き声であるらしい。

「とりあえず、はじめまして。ってか? 初対面ならまずは挨拶からだよな、分かってるよ、お前。さあ、そんじゃ後はまあ…分かるよな」

さて、こつして広大な森の中で出会い、田と田があつた以上そこには一つの縁が出来上がるわけとして。まるで一目惚れの恋人同士ようにお熱い関係がこれから始まるわけです。

それはもちろん殺し合い。

「ハーハーハーハー。」

「わはは、それだそれだ。いやー久々だなー、この感じ！　別にバトルジャンキーってわけじゃないけど、男としては闘争本能がうずくというか…今は女かね。まあいいや」

殺氣を撒き散らしながら振り上げられた脚の一撃を、俺は余裕を持つてかわす。そうでなければ続く他の脚の攻撃をかわすことなど不可能だ。こいつの脚はまるで伸縮自在の武器のように、次から次へと俺へと飛んできた。しかもそれが移動しながらというのがたまらない。こちらも避けながら禍彈をぽんぽんぱらまいたが、それらをひとごとくねいつの身体にぶつかると簡単に霧散してしまった。どうやらあの鋼のような黒い体毛は伊達ではないらしい。

「手数… といふか脚数多い上に堅すぎだら、お前」

F 100-100-100

俺はそいつのあまりの防御力に、俺は呆れ混じりに呟いた。望外な堅さにスピード、そして重量がついたとき、それだけでそれは何物にも勝る凶器となる。俺だからこそ避け切れているが、普通の輩ならば既に脚に貫かれるか、あの巨体に押し潰されているだろう。この分では近接戦闘も無理がある。この世界に生まれて三千年余り、『禍氣』によつて魔改造された俺の体躯では想像もつかないほどの異常な怪力を有するが、それでもこの蜘蛛の防御を貫ける気はしなかつた。

しかしまあ、それならそれでやりようはあるわけで、そして試した
いこともいくつかあった。蜘蛛の脚の攻撃はなおも続いていたが、

俺は避けるのを止め急に足を止めた。

そうすると、もちろん今まで当たらなかつた攻撃は俺へと殺到し、激突する。蜘蛛は串刺しにされた俺でも想像するだろつか？ そこまでの思考力を持つてはいるがどうかは不明だ。

ガキン！

「ぎ、ぎ、ぎ、ぎ、ぎ」

「わは！ 成功だ！」

蜘蛛の脚は確かに俺に直撃した。しかし、それは俺の身体数ミリ手前で何か堅いものとぶつかるような音ともに停止していた。

俺が自身の身体に貼りつくように構えていたのは、遮断結界。イザナギの教えてくれた認識遮断結界の汎用性を高めた上位術式だ。単純に他者のありとあらゆる干渉を遮断するもので、それが物理的だろうが靈的だろうが構わない。

だが、仮に俺の未知の干渉、例えば能力によるものなどは少々別だ。ただそれも最初の数度しか効かないが。

能力干渉はあまりにも抽象的すぎて普通では解析する事はできない。だが、相手が能力で俺に直接干渉してきたときは別だ。俺を一つの受信端末と仮定することで能力を逆算し、定型化あるいは式化すること^{パターン}で遮断結界式に打ち込む。

こんな無茶な力技ができるのも、俺の持つ能力ゆえだ。他のやつには絶対に真似をする事はできないだろう。

「んじや、次行くぞ」

遮断結界の性能を確かめると、次に俺は宙に浮かんだ。大体蜘蛛よ

り少し上ぐり今までだ。蜘蛛はどうやら飛びながら、脚を伸ばし攻撃してきたが、地上で避けるよりも樂にすいすいと避けることができた。

今度は腹の部分から器用に俺のまづへと糸を飛ばしてきたが、何のことではない。例えこんな巨大蜘蛛であろうとその糸の組成は所詮たんぱく質だ。

俺は糸が俺の領域に入ると同時に、その組成をばらばらに、散り散りにした。

それがすむと同時に、俺は今度は『反靈氣』を『禍氣』同様丸めて投げた。それはひゅるひゅると蜘蛛に向かってこき、やはり簡単に跳ね返された。

「うーん、大体同じか」

そう呟くと、俺はまたいくつも反靈弾を作り出し蜘蛛へと投げた。そして当然の「」とくその全てが跳ね返される。

それを確かめると、俺は再び蜘蛛の前へと降り立った。

「ああ、あああ、ああ、」

「何言つてゐるか分からんけど、もう終わりだ」

「ああ、、、！」

俺は蜘蛛が何かする前に、指を振った。

すると、先ほどばら撒いた反靈弾が弾同士で共鳴し線を結び、宙に幾何学的な図形を描き出した。そして、それは蜘蛛を閉じ込めるような形になっている。蜘蛛は本能的に危険を悟ったのかその囲いから出ようとしたが、もう遅い。

ががががががつ

「ぎ
！
」

線によつて形成された面は、蜘蛛が胴体を叩きつけても脚を叩きつけても破れない。そして直に結界内の蜘蛛の姿が不自然に歪み、蜘蛛は尋常ではない鳴き声をあげながら苦しみ始めた。

捕殺結界。

相手を閉じ込め、物理的、あるいは靈的圧力を加え圧殺するかなり物騒なタイプの結界術だ。封印結界の亞種ではあるが、こちらのほうがより攻撃的であることは否めない。無論イザナギに教えてもらつたものではなく、俺のオリジナルである。作つた当初は使わんじやないかと考えていたが、必殺不殺を任意で調節できることに気づいてからは有効活用することを決めていた。

蜘蛛の鳴き声が聞こえなくなつたところで、俺は結界を消した。

「概ねうまくいったか成功か。けど便利すぎだろ、この能力」

三メートル強の巨大蜘蛛が倒れ伏し、ピクピクと足を動かしている前で、俺は改めて自身の能力に戦々恐々しながら独りごちた。

能力つて結構することと思つ（後書き）

ようやく術が使えるようになりました。結構いい加減ですが、勘弁してください。

ちなみに、イザナミやら主人公やらの神氣＝神力は信仰には依存しません。主人公はまだ出てませんけど。

莊厳なる天照大御神 わらわら（前書き）

今回短いですね。つなぎみたいな話でしょうか。

アマテラスまで出せましたし、えー んも近そうです。がんばれ自分。

莊厳なる天照大御神 わらわら

イザナギが天に上つて1500年ほど。俺の尻尾がとうとう九本になつた頃に、ようやくイザナギが帰ってきた。

そのときはもうほとんどの禍物の姿は消え、妖怪が世界主流の異形となつてゐる。ちなみに妖怪とは人間の呼んでいた呼称だ。俺も彼らだとか異形だとか言うのは分かりにくいので、妖怪に統一することにした。しかし妖怪とは、なかなか言いえて妙ではないか。妖しき怪異とな。まさに人間側からすればそんなところだらう。

今地上をイザナギが見たらどう思うだらうか？ 妖怪の出現に困惑するか、禍物の消失に驚愕するか、予想通りの結果に満足するか。

それはともかく、突然俺の家にやつてきたイザナギは一人の少女を連れてきていた。髪や顔はイザナミさんに似てゐるが、雰囲気といふかそういう感覚的なものはイザナギに似ていた。髪は頭の横で一本に縛つており、この時代にはそぐわないが、彼女にはとても似合つていた。

「久しぶりだな、ウカノ」

「…ああ、本当に久しぶりだ。千五百年ぐらいだつたか、結構長かつたな」

最低でも千年、とは言つてゐたが、振れ幅五百年は長すぎる。そう思つた俺は、少々不機嫌さを混じらせながらイザナギに暗に理由を聞くと、イザナギは渋い顔をして言つた。

「回復は予想通り千年と少しで完了したのだがな。しかし少々仕事

が溜まつていたようで、上の連中に引き留められておつたのだ… あそこは人は多いのだが急け者も多い。時折我らにしわ寄せが来るのだ

「なんだそりや。天界の癖に世知辛いな、おい。急け者が多いって、天人の氣風か？ 高貴なお人は仕事はしませんつてか？」

「どうだらうな… しかし地上人は勤勉であるのに情けない。それでウカノ、ずいぶんとまた尻尾の数が増えたのではないか。それいつたいどうなつておるのだ」

「俺に聞くなし。俺だつて知らんよ。まあどうせ九本で頭打ちだろ」

現代で聞いた話では九尾の狐が最多だつたはずだ。十尾だとか聞いたことないし。あれ、そもそも俺は妖怪九尾に分類されるんだろうか。反靈氣というか妖氣？は持つてるけど、元は禍物だしな。

「ほんとだ、すごい！ ねえねえ、その尻尾私に触らせて？」

と、イザナギと話していると、イザナギが連れてきた例の少女が口を出してきた。イザナミさんは違はずいぶんと活潑そうな子だ。別にイザナミさんが暗いと言つてるわけじゃないが。きらきらとした目を向けている先にあるのは無論俺のもふもふの尻尾である。とつさに俺は尻尾を背中にかばつた。しかし、九本だ。俺の小さな身体では隠しきれない。擬態して隠してしまえば良かつたのだが、そのときの俺は慌てていて思いつかなかつた。

「おいイザナギ、誰だこの娘… つてぎやああああ！ ひつぱるな！ 痛い、痛いって！」

その少女は瞬間移動のごとき速さでイザナギの後ろから俺の横に移動すると、俺の尻尾をもふり始めた。それも、それがあまりに熱烈であるために、少しひっぱられて正直痛い。強烈な痛みよりも、こうこう地味な痛みのほうが存外響くものだ。

「む、すまぬ。…こらー。勝手にそういう事をしてはならぬと、いつも言つてゐるだろ?」

「だつて父様!」

『父様』だつて。なんだか親子みたいだな。もしかして、もしかするのだろうか。

イザナギは少女を引き剥がすと、少女の腕をつかんだまま再度俺の前に立つた。少し尻尾の毛が持つていかれたが、笑つて許すのが大人げあるだろうか。

「すまなかつたな、ウカノ。この娘は我らの娘、アマテラスという。補佐はイザナミのはずだつたのだが、しばしの間地底から動けなくなつてしまつたのでな、代わりに連れてきたのだ。が、イザナミに似て可愛いものが好きでな。それにイザナミと違つて遠慮せぬから困つておるのだが…というわけで犠牲になつてくれんか」

「嫌じゃー!」

神が『人柱になつてくれ』とか『冗談じゃなさすぎる。しかし、アマテラスか。こちらではアマテラスはカグツチの姉になるのだろうか? ずいぶんと子供っぽいが。とはいつても、流石神の一柱といつたところか、持つてゐる力は大きい。まあ、俺よりも幾分か大きいというぐらいで、イザナギとは比べるべくもないが。イザナギはアマテラスを俺のほうへ少し押し出した。

「アマテラス、彼女はウカノミタマだ。地上にいる間は世話になるだろう」

「はじめまして！アマテラスです！ようじへ、ウカノミタマちゃん！」

「ウカノでいい。そして『ちゃん』をつけんな

世話になるつつても、俺は大して何もしたことないけどな。イザナギの家で『ごはご』していったぐらいで、あとはイザナギはどこに住むのだろうか？前住んでいた場所は、千五百年経った今でさえぺんぺん草一本生えていない。神殺しの炎はどやらあの場所の生氣すら焼き払ってしまったらしい。さて、あの場所に生物が蘇るのはいつのことやら。

「よろしくね、ウカノちゃん！尻尾と耳触らせて！」

「聞いてやしねえ。それと触らせるのは嫌だ、お前引つ張るもん。俺だつて痛いんだよ」

「つむ、それではウカノ、我は一度いい土地を探してくるからな。この辺りは森ばかりで少々我らには不便なのだ。というわけでだ、アマテラスのことはしづらくな任せたが。終わったら迎えに来るのでな」

「へ？……世話になるつうことをうそつかっておい、行くな！」
を円形脱毛症にするつもつかっておい、行くな！」

訴え虚しく、イザナギは俺とアマテラスを置いてどこぞへと飛び去つていった。その場に残つたアマテラスは、止めていたイザナギがいなくなればもう歯止めは効かないわけで。

「ウカノちゃん！」

「どうあー 結界ー」

「え？ ばふつ」

襲いかかってきたアマテラスを遮断結界で物理的に止めると、俺は溜息をついた。落ち着いた俺は尻尾や耳を隠せることを思い出し、耳も、尻尾も九本全て擬態して隠してしまつた。アマテラスは『あーー』とか言いながらしょぼんとしていたが、罪悪感は大して感じない。イザナミさんとの人徳の差を思い知るがいい、小娘！ …俺のほうが年下だろ？ まあいいや。

「はあ…とりあえず、上がつてけ。前、茶の木に似たものを見つけてからな、茶ぐらいは出そつ」

「あ、うん！」

そういうと、アマテラスはおとなしく俺についてきた。尻尾や耳の絡まないアマテラスはずいぶんと素直だつた。

ちなみに、俺の家は昔に建てたものとはもう違つ。何度も壊したりして建て直してきたが、これは何代目だろうか。どちらにせよ、普通に建つている間は俺が組成式を固定しているため、腐つたり劣化したりということではなく、自然に朽ちたものはひとつとしてない。昔は低気圧や強風に破壊されたこともあつたが、結界を使えるようになつてからはそんなことも一度もない。

今家の構想は純和風といった感じだ。

俺は引き戸をからからと開けて、アマテラスを中に入れた。アマテラスは和風の家が珍しいのか、ずいぶんときよろきよろしていたが。

イザナギがアマテラスを迎えてきたのはそれから三週間ほど経つてからだつた。その間俺の精神力はアマテラスの苛烈な攻めによつてがりがりと削られ、最終日にはせめてアマテラスが尻尾を乱暴に扱わぬことを条件に妥協したぐらいだ。しかし、その特訓？のお陰か常時結界を張り続けていられるよつになつたのは幸いである。

アマテラスの帰つた後に、俺が少しくたびれた尻尾の手入れをしていると、小さなはげを見つけて涙したのは蛇足である。次の日には元に戻つていたので結果的には俺の精神はぎりぎりで平穀に保たれていた。

そして、俺はこんなことはこれで最後だと思っていた。

イザナギの定住地が決まつてからはむしろ、頻繁にアマテラスが俺のところに遊びに来ることや、イザナギの地上における魂循環システムや彼岸づくりなどの仕事をなぜか手伝つことになるなどは、この時の俺は知る由もない。

それでも、そんな日々に不満を感じなかつたのは、何だかんだいつて俺が彼らのことを好いていたからだつ。

騒がしい毎日だつと、充実しているといつらのならば、それはきっとこれ以上ない幸せなのだ。

莊厳なる天照大御神 わらわら（後書き）

あの世づくりまで書いてるとぐだぐだしそうなのでそれはスルーです。あとあとちまちま出すかもですが。

九尾の次は八尾？（前書き）

今回もオリ設定注意。

主題によつやく引っ掛かりました。

副題は八尾になつてますけど、厳密にはやつぱり尻尾は九本です。
こんなオリは納得できねえな方は今更ですがブラウザの戻るのボタンをクリックしてください。

九尾の次は八尾？

イザナギが地上に戻ってきてからは、本当に騒がしい日々だった。アマテラスがあまり頼りにならないのか、俺が手伝つこともしばしばあり俺もあちこちを飛び回つたものだ。まあイザナギの仕事の手伝いは基本的に俺の書意なので、イザナギにどうこう言つつもりはないが。

件のアマテラスはと言えば頻繁に俺の家にやつてきては、俺の尻尾を狙つてくる。天界の急け者つてこいつじやないのか…。一応結界で防いではいるものの、俺の結界は概念結界だとそういうふつとんだ代物ではないので、こちらの出力を大幅に上回ると突破されてしまうことがばれてしまった。特に物理攻撃には弱かつたりする。まあそのたびにこちらも結界術の腕を上げていて悪いことばかりではない。どちらにせよ、欠点を残したままなのは否めないが。とりあえず新しい結界作りは今後の課題だ。そしてアマテラスにあって言わせてもらつなら、もう少し自重して欲しいものだ。もう少しおとなしくしていれば、尻尾を触るぐらいなら許可するのだが。

彼女も時折数年単位で来ないときがあつたが、そんなときはマガラゴと遊んでいた。

マガラゴというのは以前殺り合つた大禍蜘蛛のことだ、それからも何度も顔を合わせていた。殺りあつたのは最初の一度だけで、今ではお友達だ。よくよく見てみると愛嬌のあるような顔をしている、様な気がする。名前はなかつたそのうので俺がつけた。彼の顔を見ているとなんとなく浮かんだ言葉がそのまま名前になつただけで、大した意味はない。幸い彼はこの名前を気にいつてくれているようだが、『ぎ』としか言わないので意思疎通が容易でないのが難点か。多分この辺りでは俺同様唯一の禍蜘蛛だろう。他の禍蜘蛛は大体妖

怪蜘蛛になってしまった。とはいってもマガラゴも純粹な禍蜘蛛といつよりは、妖怪とのハイブリッドだ。禍物の力に妖怪の知能を持つこと取りである。そんなわけでここから一帯妖怪の頭をやっていふらし。最近一方的に妖怪が人間にやられることが増えているよつで、そのことを愚痴つていた。

そういえば、最近酒を造る暇があまり取れず難儀していたが、相変わらず瓢箪はぶら下げている。少し前に瓢箪の中に虫が棲みついたのだ。外見はつるつるのサンショウウオもどき。きっと『酒虫』といふのはこうこうのなんだろう。虫というか、酒の精みたいなもので、水を入れてしばらく置いておくと美味しい酒が勝手に出来上がっている。

おそらくこの瓢箪を数千年も酒瓢箪に使っていたために、この中に生まれたのだよつ。実害は無いし、むしろ利益ばかりだ。まだ意思疎通を図るほど知能はないらしく、俺の呼びかけには反応しない。また放っている靈氣も極少量だ。いつか話せるぐらいに成長してくれば、話し相手に最適なんだがなあ。

さて、それは俺の尻尾が九本になつてから千年ほど経つてからのことだつた。

とある朝のことである。起きだしてきて早速尻尾に違和感を感じた俺は、ぼつとした頭で自分の腰を見た。

「なんじや いじやあつー。」

擬態して隠しているとかそんなことはなく、俺の尻尾が一本消えて八本になつてしまつている。それを理解した時、俺の眼氣は一発で

吹き飛び、しかし混乱した頭のままで俺は家を飛び出していった。

「イイイイイイイザアナアギイイイイイイイツ」

多分このときの俺の行動原理は『困ったときの神頼み』だったようと思つ。戸を壊しそうな勢いで吹き飛ばし（壊れた）、地を踏み砕いてイザナギの屋敷のある方へと空気を摩擦で燃やしながら飛んだ。

実はここ五百年ばかり、アマテラスがこちらに来たり、マガラゴと遊んだり、酒虫と戯れたりとイザナギの家には行つてはいなかつた。だからイザナギの家が見えるはずのところまで飛んでいつた俺はさらりと仰天した。

「なんじや じりやあつ！」

そこには、五百年ほど前はなかつたはずの街ができていた。しかもただの街ではない、元現代人の俺から言わせてもらえば、所謂未来都市である。

様々の人間があちこちの舗装された道を行き交い、たくさんの車が音もなくすいすいと車道を走つてている。世界の風景にそぐわない高い建物が立ち並び、ガラスらしきものが太陽に反射しきらきらと光つていてる。

何故気づかなかつたし！

こちらのほうにはしばらく來ていなかつたとはい、これほどのものが作られていることに気づかなかつたことに俺は頭を抱えた。そもそも、以前見た時の人間は弥生だか縄文だか、それぐらいの文化しか持つていなかつたはずだ。それがいつの間にかこんなことに…人間といえど、成長スピードが半端じやない。

とにかく、人間のど真ん中にこの姿のまま飛び込むわけにはいかず、俺は耳と尻尾、さらに禍気を隠し、特殊な結界をフィルターに見立てて張ることで、妖気を靈気に見せかけてから人間達の街に入り込んだ。このときも少しの違和感を感じたが、未だに慌てていたためにそのことを気にしている余裕はなかった。

街に入るにも、入つてからも警備がしつかりとしてあつたが、人間に擬態しかつ高度な認識遮断が使える俺にはまるで効果がない。街の中には人工的な風景に満ちている。風情のある風景など一切なく、とても無機質な世界だった。イザナギの家がこんな街の中にあるなどあまり考えたくはなかったが、イザナギの気配は間違いない街の中心辺りにあつた。

俺がぱたぱたと小走りにそこまで行くと、イザナギの家はこの未来都市の中で変わらず存在していた。俺の和風の家を真似て作られたらしい和風の屋敷。五百年前に見たものとまるで同じものだ。変わっているのは周辺の風景だけで。

「イザナギッイザナギッ」

ばしばしと入り口である引き戸を叩き、俺はイザナギの名を叫んだ。アマテラスが出てきたらどうしようとか考えないこともなかつたが、今の俺にはそれ以上に優先すべきことがあつた。はたして出てきたのは、運よくアマテラスではなく久しぶりに顔を見るイザナギだった。

騒ぐ俺を、イザナギは宥めながらとにかく俺を家に上げてもらつた。そして、座敷で俺が一息ついたところで、イザナギは口を開いた。

「ずいぶんと久しぶりではないか？ ウカノ」

「やうだな。しかし俺は思い出話をしたきたわけじゃない。この街のこととか色々聞きたい事はあるが、まずはこっちからだ。なあ、お前にこいつを見てどう思つ?」

と、俺は今出せる尻尾を全て出してイザナギに見せた。九本だつたはずの尻尾は今はハ本。これにイザナギはなんと答えるだろうか? 慌てて来てはみたものの、俺は少し冷静を取り戻してきていた。よくよく考えれば、イザナギ自身狐に詳しいわけではない。九尾狐なんかも、この地上では俺ぐらいのものだ。

が、イザナギはこともなげにこいつ言ったのだった。

「おお…靈格が上がったのだな。我はウカノにおめでとう、と言えばよこのだらうか?」

「へ?」

「ううむ。やはつ、五百年とこつものは短いよつで長いとこつ」とか…以前会つた時はまだこんな兆候は見られなかつたのだがなあ」

「ちょっと待つてちょっと待つて、五百年が長いか短いかはいやどうでもよくて、え? 俺の尻尾がハ本になつちやつたことに關しての反応は無し?」

俺がイザナギの意外な反応に、惑いながら詰つと、イザナギは俺がいつか見たような顔をした。どこか呆れたよつな顔である。イザナギのこの顔を見るのは黄泉でイザナミさんを見たとき以来で…

「前にも言つたはずなのが…。『眼』を閉じていれば見えるものが見えないのも当然であろう…」

「え！」

確かにこのとき俺は眼の擬態はまだ解いてはいなかつた。しかしそれが尻尾と何か関係があるのだろうか？ とにかく俺は、あの時と同じようにイザナギの言葉にしたがい眼の擬態を解いた。瞳孔が縦に割れ、瞳がますます金色を帶びていく。

すると、八本の尻尾の間に半透明の尻尾が一本見えてきた。その感覚はいつかの魂状態にあつたイザナミさんとどこか似ている。

「俺の尻尾が靈体化してる…？ なんだこれ、聞いたことないぞ」

「ヌシはもともと例外だらけであつたろう、今更だと我是思うのだが。おそらくは靈格の上昇に伴つて肉体から逸脱してしまつたのであろう。だが、それなら逆に受肉させることもウカノには可能なはずだ。自身の領域内での操作はお手の物であろう？ それに、気づかぬか？ すいぶん前に我の言つた通りになつたぞ。今のウカノには神氣がある」

次から次にイザナギの口から出でくる言葉に、俺は目を回した。しかし、その一方で頭のどこかは冷静だつた。

まずは神氣の確認。なるほど俺からはイザナギのものと同じ、高密度の力の塊、神氣が放出されていた。これが禍氣と隠したり、妖気を靈氣に擬態していたときに感じた違和感の正体だろう。これでかなり使える術の幅は広くなることが見込まれる。

そして、靈体と化してしまつた俺の尻尾の受肉作業。これは存外簡単だつた。擬態の時と同様だ。俺の意思一つで尻尾は靈体実体と切り替えられるらしい。そこではじめて気がついたが、尻尾を靈体化しているときは俺の力は著しく上昇していた。これがイザナギの言う、靈格が上がるというやつなのだろうか？

「ようやく神氣が出てきたってのに実感がないな…一応妖氣で事足りてたし、尻尾が消えたってことや、ここにいきなり未来都市ができてた方にびびってたし。…ってそうだ。いつたいどうなつてんだ？ここは確かに五百年前はお前の家しかなかつたんじゃなかつたか？それがどうしてこんなことに…」

五百年ほど前、確かにここにはイザナギの似非和風の屋敷しかなく、あとは以前のイザナギの家のように草原が広がっているだけだつた。以前ほど広大な草原ではなかつたが、しかし周囲に人間の集まりはなかつたはず。この劇的ビフォーアフターが気にならないわけがない。

しかしイザナギは首をかしげながら軽く言つた。

「ううむ…ウカノとともに地上の魂の輪環機構を創り上げてからは、各地で最終微調整を行つていたのだがな…いつの間にか人間が集まつてきてな、気づいてみればこんなことになつっていたのだ。しかし今代の地上人は凄まじいな。この短期間でこれほどの発展を遂げようとは…さしもの我也仰天した」

はははと笑いながら事も無げに言つイザナギに俺は嘆息した。いつの間にか、つて相変わらず時間感覚ぶつ飛びすぎだろ。…俺も人のこと言えないか。

しかし、他に重要なことを言つていたイザナギが、俺は気になり思わず尋ねた。

「…最終、つてことは、そろそろ戻るのか

少しトーンを落として問つた俺に、イザナギも笑いを潜めて真顔になると、

「…戻ると言つた。

「近いうちに、又シに挨拶に行こうと思つていたのだがな、丁度よかつた。…あと数年もすれば、我は天界に戻る。やることはほとんど終わつたのでな、いつまでも地上にいるわけにもいかぬ」

「… そつか」

「つむ」

「……」

「……」

しん、と清涼な座敷が静まり返つた。俺もイザナギも何も言わない。

イザナギ、イザナミさんと出合つてからおおよそ三千年。イザナミさんは今は地底にいるし、イザナギも千五百年ばかり天界に戻つて地上にはいなかつたが、こうしてみればとても感慨深い。感覚的には十年も経つていないうに思えるが、それは俺がどこか人間だったときの感覚を捨て切れていいからだろうか。俺の異常に気の長い時間感覚は確かに人外のものだが、過ぎ去つた時間への思いはまるで人間のようだ。

俺はイザナギのことを親友だと思つてゐるが、イザナギは俺のことをどう思つてゐるのだろうか。時折、こうして俺の臆病な部分が顔を見せる。氣恥ずかしくて怖くて、面と向かつて聞くことはできない。せめてイザナギも俺といふ時間を楽しく感じてくれていれば、それは俺にとつてもとても嬉しいことだ。

別に今生の別れといふわけではないのに、何故こう湿っぽくなつているのだろう。俺もイザナギも、多分無限に近い寿命を持つてゐる。

百年後か千年後か万年後か億年後か、いひなど想像もつかないが、生きてさえいればいつかまた出会うこともあるだろ？あの日、ぱつたり森の中で出会つたよ！」。

とにかく、こんな空氣は俺にもイザナギにも似合わない。だから俺は瓢箪をつかみイザナギの方に掲げて、肅々とした雰囲氣を一掃すべく一言、じう言つた。

「…呑むか

「うむ」

困つたときの酒頬み。今日から少なくとも数日は夜通し酒盛りになるだろ？

俺は器と酒を取りにいくイザナギの背中を見ながらそつと思つた。

「なあイザナギ、さつき自分で取りに行つてたけど、この家お前一人なのか？アマテラスはどこ行つたんだ？」

「今は確か天岩戸の方に行つておるはずだ。む、言い忘れておつたが、アマテラスは我が戻つた後もしばらく地上に残るようだぞ」

「ふーん。つて、天岩戸って何だよ。そりげなく知らない単語出すのは止めてくれ」

「ふむ、言つてなかつたか」

「ああ、聞いてない」

「…話の腰を折るでない。我は人間には過干渉はせぬようにしておるので詳しくはないのだが、この街は三つの部門で全体を統括している。一つは『行政部』、一つは『軍事部』、もう一つは『技術部』。天岩戸は『技術部』の中核で、アマテラスはその長というわけなのだ」

「へえ…三権分立ねえ。最近妖怪が狩られてんのはその『軍事部』の仕業なのか？」

「いや…『軍事部』は基本的には防衛しかせんはずだ。妖怪を狩っているのはおそらく『行政部』の私兵だらう。確かに権力は三つに分けられていいのだがな、完全にというわけではないのだ。『行政部』や『技術部』が些細とはいえ独自の軍事力を持つておつたり、『軍事部』や『技術部』が少しだが行政権を持つておつたりな。それで権力の平均化を図つておるのだろうが、いつかはそれも崩れるのだろうな。どういう形かは分からぬが」

「人間てなそんなもんだろう。純粹な力だけで全体を纏められるほど、簡単な生き物じゃない。それで、暴走してんのは『行政部』か？ その長…ついでに『軍事部』の長は何ていうんだ？」

「ふむ、実は一人とも我の養子なのだ。どうやら力が大きいゆえに捨て子になつていていたようなのだが、たまたま我が拾つて育てておつた。どちらも優秀な子らだ。『行政部』の長は『ツクヨミ』、『軍事部』の長は『スサノオ』といつ。どうだ、良い名だらう？」

「…………なるほど。」
「ただちに良くなつたな、」

九尾の次は八尾？（後書き）

ああ…ようやく原作キャラが出せます。長かったです。

大昔東方の定番、大古の未来都市です。

ちなみに、しばらく後に時間が大幅に飛ぶと思うので、靈尾が増え
ていくのは描寫されません。ごめんなさい。

薬剤少女（前書き）

来ました。都合上短くなつてしましましたが、原作キャラです。ど口調とかわけわかれなので、半ばオリキャラと化しています。ご了承のほどを。

イザナギの屋敷を出た俺は、早速アマテラスの天岩戸に向かう」とした。別にアマテラスに進んで会いたいわけではなかつたが、『天岩戸』自体には興味がある。アマテラスへの挨拶はそのついでだ。それにアマテラスの仕事をしている様というのも見てみたい。普段の様子からは全然想像がつかないので。

ところで、俺の服装は人型になつた時にいつの間にか着ていた白い着物から何も変わっていない。言うならば、とても古めかしいものだ。仮に現代の街で歩いていれば目立つ、それは目立つ。それでもこの未来都市で俺が堂々と歩いていて目立たないのは、認識阻害のせいもあるが、他に多種多様の服であふれているという理由もある。急激に発展したせいか服飾文化が安定しておらず、通りには様々な種類の服を着た人間が歩いている。俺の白いシンプルな着物なんぞは、その中では街の景観の一部にすぎない。

また人間の髪や目の色も様々で、丸ごと染めているんじゃないかと思うぐらいだ。俺の真つ白な容姿が目立たないのはいいんだが。

イザナギに聞いた『天岩戸』を見つけたのは、屋敷を発つて一時間ほどしてからだつた。一際立派な研究所といった風情で、これまた多種多様の人間が出入りしている。

俺はその中の一人にぴつたりとくつついて侵入していった。警備員？ とか監視カメラ的なものはあつたが、指紋認証だとかそんなハイレベルなものは無い。一応結界に属性を付加して透明になつてみたり、体温も偽装してみたりしたが、認識阻害もしているので意味

はない気がする。

それから、アマテラスのいる場所を見つけるのにも苦労した。結局『主任室』とか言つ場所の情報を、受付嬢の認識を騙しながら受付にあつた機械から入手したのだが、その主任室の入り口にはこれまで障害があつた。：指紋認証である。ここかよーとか思つたりしてみたが、俺でもこれはどうしようもない。認証端末を騙くらかすことはできないし、破壊するのも論外だ。扉をすり抜けでもできたらいいが、そんなことができるるのは尻尾だけだ。尻尾だけ通り抜けてもしようがない。

俺は諦めて、他の端末からクラッキングでもしてみようかと考えていると、俺の歩いてきた通路から一人の少女が歩いてきた。長い白い髪をお下げにして一本に縛り、青赤のおかしなナース服の上に白衣を羽織っている。

少女は『主任室』の扉の前で立ち止まると、指紋認証端末に指を差し入れた。ぴつ、ぴつと、無機質な電子音とともに端末の画面が目まぐるしく変化してゆく。俺はといえば、それを真横から眺めていた。相変わらず認識阻害を行つてゐるため、少女が気づく様子はない。

ほどなく、しゅいんとほとんど無音で扉が開く。少女は特に臆することなくつかつかとそこには足を踏み入れた。俺はすかさず少女がそこに入ると同時に、身体をスルリと中へと入れた。

が、そこはアマテラスの部屋ではなかつたらしく、彼女はいなかつた。

そもそも、そこは主任室といつよりは研究室だった。隅っこには申し訳程度に執務スペースが置いてあるが、ほとんどはやせやまな薬剤や器具で埋め尽くされてゐる。

少女は執務机で何事かしていたが、その何かを終えた後は、栓をして並べてある試験管の方へと歩いていった。どうやらこの主任室は少女の部屋らしい。

「という事は、ここでも結構上の人間なのかな」

主任室の主ということは、多分そういうことだ。つまり、アマテラスの場所も知つている可能性が高い。そう思い、俺は少女に話しかけることにした。何気に入間に話すのはこれが初めてなのだが、俺は大して気にしていなかつた。

「なあ」

「……？ 誰！？」

認識阻害を解いて少女に話しかけると、少女は身体を強張らせて叫んだ。しかし、その時点では一本の試験管を手に取つていた。少女が驚いた拍子に持つていた試験管は少女の手から滑り落ち、試験管は床にぶつかつて割れ、中の溶液も無残に床に飛び散る。

「あーあ……」

「！？」

さすがに驚かせた俺が悪かつたかと思い、俺は少女の足元まで歩いていくと、飛び散った溶液や試験管に指を乗せた。瞬間、それらが落ちて割れてしまつ前の姿へと戻つた。…ただし完全に元に戻つたのは試験管だけだ。溶液が反応してしまつていいのかいなか知らない俺ではどうしようもない。

それに栓をして、とりあえず試験管たてに戻した俺は、改めて口をぱくぱくとさせている少女の方を見た。彼女との距離は既に50？程度、ほとんど田の前にいる。そこで、俺ははたと気がついた。

「俺の方が背が低い…」

200mほど、負けていた。数十年前から少しの変化もない身長では仕方がない。…と、俺は思つていたが、尻尾が靈体になると同時に少し成長していたことをこのときは知らなかつた。幽靈みたいになつたのに成長つてじゆこと？と首をかしげるのはずいぶん後のことだ。

「…貴女、誰？　どうやつてここに入つたの？」

少しは落ち着いたのか、警戒の現われか身構えながら俺に向かつて誰何する少女。俺の目的は彼女ではないので、特に何かをするつもりはない。…場所聞くために暗示とかするかも！

「俺はウカノミタマという。天岩戸にいるはずのアマテラスに会いに来たんだがな、どこにいるのか分からん。ここは、『主任室』はずれだつたしな。で、どうやつて入つたかといえば、あんたについて入つてきた。あんたが気づかなかつただけだ」

「わけが分からぬいわ…アマテラス様に会いに來たつて、知り合いなの？」

「そうだな、そこそこ古い知り合いだ。それで、アマテラスのいる場所を教えてくれたらありがたいんだが」

「…信用できないわ」

「だろうなあ」

「でも、以前アマテラス様が白い狐の友達のことを話してたわね。ふかふかの尻尾が九本もある、言葉は乱暴だけど可愛い娘だつて。私も、それを聞いた時はアマテラス様が何を言っているのか、良く分からなかつたんだけど、もしかして…」

アマテラスに他に狐のお友達がいなければ俺のことなのだろう。だけどそれって妖怪があ友達つていつてるようなものだる。尻尾が九本ある普通の狐とか、ないわー。いいのか責任者。いいのか少女。妖怪は基本的に人間の敵なはずなのだが。

「俺のことだろうな。で、妖怪?が入り込んでるわけだが、どうする?」

「…でもあなたには尻尾がないわ。それにどう見たつて人間でしょう」

俺が妖怪、というか禍物だけど、めんどいのでもう妖怪でいいか。少女から俺が妖怪であることに反応はない。

妖怪を相対したときの人間の反応は、恐怖、逃走、失神、とこんなところだが、たまに突然変異的な人間がいて、そういう人間は闘いや様子見を選ぶ。それは他の人間と違い余裕がある証拠だ。会った事はないが、イザナギが言つていたツクヨミやスサノオがいい例だろう。つまり、妖怪に劣らぬ力を持つているということだ。

少女もおそらく突然変異的な、力を持っている方の人間なのだろう。

俺は少女の言葉に答えるべく、尻尾を九本全部を一瞬出してまた戻

した。

少女は呆気に取られた顔をしていたが、直に冷静な顔つきに戻すと俺の要望に答えてくれた。

「…」の部屋を出て右に10m、突き当たりで右に右に14m、そこから今度は左に8m行ったところに扉があるわ。データ上には記載されてない場所だけど、アマテラス様の趣味でロックはない扉だから、そのまま通れるはずよ」

「そーか、助かった。じゃ、ばいばい」

「ば、ばいばい」

と、俺は颯爽と扉に向かった。しかし、その歩みは途中で止まる。

「あー————つーー」

突然の叫び声に振り向くと、少女が例の試験管を持って中の溶液を見ていた。そういえば、俺があれを元に戻したことに対する何も言わなかつたが、よくあることなのだろうか。

「ちよつとー これ作るの苦労したのよー? ビジしててくれるのよー!」

「あん? 何がいけないんだ?」

俺は扉から執務机の方に移動しながら少女に聞いた。少女は試験管の中の青い液体を指差しながらなおも叫んだ。

「これは元々は緑色だったのよ、それが空氣と反応したせいで青色

に…ああもう… またやり直しだわ！」

俺は執務机の上の記録紙をざつと見やり、それから少女のほうへと歩いていった。それから、その手にある試験管を奪い取り、栓を抜いて少し振つてからすかさず栓をしなおし、少女の手へと戻した。その間僅か四秒。

突然の俺の謎の行動に、ぽかんと口を開けている少女を尻目に、俺は今度こそ主任室を颯爽と去つていった。

部屋に一人残された少女は、ウカノが出て行った後に我に返り、扉を恨めしげに見つめながら肩を落とした。『どうしてくれる』と、見るからに門外漢の少女に言つたところでどうしようもない。

言いようもない虚無感を感じながら、少女は手の中になつた試験管を何気なく見つめた。

「な…！？ 何で…？」

一度酸化してしまつたものが、そう簡単に戻るわけがない。ましてや、少女が扱つてているのは通常の溶液よりもはるかに高度で纖細なもの。そして、それを扱えるのはこの天岩戸の中でも少女ぐらいのものだ。だからこそ主任、だからこそその専用の研究室である。

しかし、少女の手の中にある試験管の中では緑色の溶液が静かにゆらめいていた。

薬剤少女（後書き）

書いた話とか読んでも、文章がへたくそで恥ずかしくなつてくるんですね。ところどころ修正はしていますが、文章全体はそのままにしてるので、なおさらですよ。前よりかはマシになつてるとは思つのですが。

神代の三貴子は斯くの如し（前書き）

例の一人が早速来ました。スサノオには注意です。激しくオリを含みます。これほどんど毎回言つてますけど、そんそんくどいですね、正直。やめましょうか。

少女に言われた通りに通路を歩けば田の前には普通の扉。豪奢でも華美でも莊厳でもなく、無機質なこの通路においても絶妙に浮いている、どこまでも“普通の”扉だ。むしろ民家にあるほうが自然な扉が目の前にある。アマテラスの趣味と言つていたが、あいつはこんなアンバランスを楽しむやつだつただろうか。

扉にはなるほど鍵というものは一切なく、取つ手を掴んで押し開ければ簡単に扉は開くだろう。無用心と、思えるかもしれないが、少なくともアマテラスの相手ができる人間は此の都市にはいない。無用な用心ならば、彼女は趣味を優先するだろう。しかし仮に用心の必要があつたとしても、趣味を先に置きそうだと思えるのは、あのアマテラスだからだらうか。

扉を押し開け中を見ると、そこは一種の別空間だつた。部屋の中の雰囲気はアマテラスのイメージとかけ離れている。床には絨毯がひかれ、部屋の奥には重厚な執務机が置いてある。壁にはいくつもの棚が並び、その中には無数の紙媒体があつた。そして部屋の中央には低いテーブルがあり、それを囲むように置いてあるソファには三人の男女が座つていた。テーブルにはその人数に合わせて、ソーサーに乗つた三つのカツプがめいめい湯気を立てている。

一人は銀髪の男で、尖つた雰囲気を醸し出していた。美形の顔も、その空気のせいでどこか神経質に見えてしまう。そして、男のかけているソファには一本の両刃の剣が立てかけられている。

一人は金髪の女で、男とは違ひ落ち着いた感じだつた。飄々としていて、その態度に大人の余裕が見受けられる。こちらは壁に巨大な

黒い大剣を立てかけていた。その存在感は男の剣とは段違いである。そしてもう一人は黒髪の女で、言わずと知れたアマテラスである。前二人は人間なのでアマテラスが一番年上のはずだが、しかし三人の中では一番子供っぽい。人間一人も、どちらかといえば少年少女ぐらいの容姿だが、少なくともアマテラスよりは大きかつた。

俺が扉を開けたのに最初に気づいたのは、扉がすぐ見える位置に座っていたアマテラスだつた。アマテラスはその子供っぽい顔に喜色を表し、つかつかと扉の方にやってくると、

俺の腰を見ながらそう宣いやがつたのだった。

「顔を見る顔を。俺を尻尾の有無で判別するな」

「あはは！　『ごめん』ごめん。久しぶり、ウカノちゃん！」

「それほど久しぶりでもないと思うが、うんまあ久しぶり」

「久しぶりだよー、ああ、もう私はウカノちゃんのもふもふ成分が足りなくて…あ、とにかく入つて入つて！」

アマテラスは俺の手を取ると、部屋へと招き入れた。アマテラスと話していたらしい一人の男女は、アマテラスの突然の行動には慣れていなのか、特に大きなリアクションもなくアマテラスと俺の方を向いている。金髪の女は俺と目が合うと笑顔で会釈をしたが、銀髪の男の方はといえば、剣呑な目つきで俺を見つめていた。その手は、ソファに立てかけられている剣に伸びている気がする。

それはいくら美形でも、『何あれ感じ悪い』とでも言われそうな態度だった。

えてしてその言葉が使われるとき、態度が悪いのはむしろそういう方であることが多いが、この男の態度には熟考の余地はない。何せ俺に向けられる視線には、殺氣すら混じっているような気がするのだ。

「あ、二人とも、前言つたような気がするけど、この子がウカノミタマだよ！」

ガキンッ！

と、アマテラスが言い終わるか言い終わらないかのうちに、俺の左手の人差し指と中指は剣を挟んで止めていた。止めずとも、彼の腕では俺を斬ることは出来なかつただろうが、真剣白羽取りをリアルでやつてみたかつたがためにやつてしまつた。失敗しても切れやしないので、危機感もスリルも爪の先ほどもなかつたが。

そして、俺を攻撃して来たのは無論銀髪の彼である。俺に一体何の恨みがあるのか知らないが、正直場所はわきまえて欲しい。

「姉上を惑わす穢らわしき妖怪め！ さつさと死んでしまえ！ この、^{ウケモチ}有稻姥痴が！」

有稻＝多分俺の名前。姥＝婆。痴＝愚かなこと。
要約すると、『ウカノのクソババア』？

「あ、あ、？ 喧嘩売つてんのか、てめえ」

「黙れしゃべるな空気が穢れる！ 貴様らが息を吐き出すたびに、

空気が穢れてゆくのだ！ 何故妖怪がこの神聖な場所に… さつさと去れ！ いや、ここで死骸塵芥残さず消滅しろ！」

「はっ、四千年は早いぞ、糞ガキ！」

俺が指から剣を離すと、男は流れるように剣をひき戻し再度構えた。その切つ先は、微塵もぶれることなく俺の方を向いている。先ほどよりも強い殺気がびりびりと空気を焦がす。マガラゴのものには劣つてるものだつたが。

「止めなさい、ツクミ！」

しかし、一触即発の空気をアマテラスが破つた。むしろ、今まで黙つていたほうが珍しいぐらいだ。どうやら突然の男の、ツクミ？の行動に驚いていたらしい。ツクミはアマテラスの怒声にびくつと震え、しかし抗議するようにアマテラスの方を向いた。…どうやらこの男、こうこう荒事は専門ではないらしい。剣を向けた相手から田を逸らすなど、素人でもしない。

「し、しかし姉上！ 姉上はここに騙されておられるのです！ ここには正真正銘穢らわしき妖怪で…」

「黙りなさい！ 私の友達に剣を上げるなんて、どうこう見なの！」

おー。なんだかお姉さんっぽい。

俺は少し小さくなつてゐるツクミから田を離し、叱るアマテラスの方を見た。黒髪で、頭の両脇で紙を縛つていて、身体もちつこいが、その姿は弟を叱る姉である。背の高いツクミに負けじと胸を張る姿はとても微笑ましいが。

「ウカノちゃんに謝りなさい！」

「そ、それは……」

「ツクヨミー。」

「う……シシリイシマシタ」

どう見ても謝つてないだろ的な謝罪を、俺に向かって一秒で済ませると、ツクヨミは即座に背を向けて扉から出て行つた。といつか逃げて行つた？ どちらにせよ、彼は最後に俺に向かって一瞥、と言うより精一杯の心のこもつた一睨みをしていくことを忘れなかつたが。

「ツクヨミー……もう！ ゴメンねウカノちゃん……ツクヨミが妖怪が嫌いなことは知つてたんだけど、まさかウカノちゃんにまであるなことするとは思わなかつたから……」

「人間一人に傷つけられるほど弱くないから、別にいいけどな。やっぱり、他のやつに俺のことは言つていたのか？」

「うん！ 『もふもふの尻尾が九本ある可愛い女の子』って言つたよ。」

「ああ、そう……」

いいのかなあ。

少なくとも、今まで俺が見た妖怪の中では、人間と同じ姿をしている妖怪は俺だけだった。しかし、存在する妖怪の姿も千差万別であ

る。元が人間の負の気なのだからそれも当然なのだが、だからこそ、人間と似た姿をしている妖怪がいてもおかしくはない。

そして尻尾のある人間などはない、つまりアマテラスの話を聞けば俺が妖怪であることは一目瞭然だということだ。

「あ、まだ紹介してなかつたね。さつき出て行つたのは、この街のもつぱら行政を担当してゐる『行政部』の長のツクヨミね。父様の養子で、私の弟なの！」

「ああ、それはイザナギに聞いてる」

「そうなの？ ま、いいや。じつに座つてるのはスサノオ、父様に聞いてたのなら知つてると思つけど、この街の防衛を司る『軍事部』の長だよ！」

そう言つてアマテラスが指したのは、ツクヨミが飛び出してからもずっと動かずにソファに座つていた、金髪の女だった。なるほど『軍事部』の長というのは伊達ではないらしく、力も空氣もツクヨミとは段違ひだつた。この歳で、おそらくマガラゴゴにも相打ちぐらいには持ち込めるのではないか？ とこうぐらいだ。

彼女は上品に笑顔でぺこりと頭を下げた。こついう余裕のある態度も、ツクヨミと比べると円とすっぽんなどこれいかに。

「はじめまして、スサノオです。ウカノミタマさんの話は、姉さんにも父さんにも聞いてますよ」

「みたいだな。おつと、はじめまして。挨拶には挨拶で返さないとな。ウカノミタマじや語呂悪いから、俺呼ぶときはウカノつて呼んでくれ。しかし、『スサノオ』つていうぐらいだから、男だと思つ

てたんだが

「そういうか？ 私には似合わないぐらい女の子らしい名前だと思しますけど…」

「ああ、そう…」

スサノオは自然な動作で首をかしげながらそう言つた。俺は肩をすくめながらそれに返す。こんなところに感性の違いがあつたとは。カルチャーショックにしても大世代違いすぎだろ。

「スサノオは、妖怪がここにいることに何か反応はないのか？」

「ここにいらっしゃるのは、妖怪である以前に姉さんのご友人です。そのような方に向ける刃は、私は持ち合わせておりません」

なんだらう。アマテラス、ツクヨミ、スサノオで色々と違います。同じところはアマテラスとスサノオの性別ぐらいしか見つからないんだが。何この出来すぎた妹は。アマテラスはイザナギに似ているけど、スサノオは血もつながってないのに、雰囲気がイザナミさんに似ている気がする。

「あ、ウカノちゃん、とにかく座つてよ!」

アマテラスが俺の背をソファの方へと押した。遠慮する理由もなかつたので、大人しく従うことにする。俺が座つたのはさつきツクヨミの座つていた位置で、スサノオの正面だった。テーブルの上にはツクヨミのものであらうカップが乗つていたが、さすがにこれに口をつける気はしない。

それに気づいたらしいアマテラスが、執務机の上にあつたおかしな

機械に手を伸ばした。

「あ、もしもーし？ うん、私私。飲み物のお代わりを持ってきてくれないかな？ あ、運ぶのはオモイカネちゃんに任せてね。ついでに、オモイカネちゃんの分の飲み物もお願ひ。…うん、うん、それじゃよろしくー」

どうやら電話の類らしい。

新しい名前が出てきたのは気になつたので、話を終えたらしいアマテラスに聞いてみることにした。

「なあ、オモイカネって誰だ？」

「『JJI』、『天岩戸』の研究主任だよ！ ホントはもつと長い名前何だけど、長すぎるし発音も面倒だから、最後の『オモイカネ』だけで呼んでるの。まだ小さいんだけど、私より優秀なんだよー！」

「だらうな…」

「？ 基本的にこここの研究業務の最高責任者はあの子なの。私はお飾りみたいなものかなー。あ！ 別に仕事してないわけじゃないんだよー？」

「大丈夫よ姉さん。姉さんの仕事はこここの看板なんだから、何もしなくていいの」

「うわあん！ スサノオちゃんが虐める！ 助けてウカノちゃん！」

「…うん。アマテラスはアマテラスらしいのが一番だよな」

「わあん！ オモイカネちゃん早く来て！」

しばらくしてやつて來た、さつき出会つた赤青白衣の少女にアマテラスが縋り付いたが、理由を聞いた少女にけんもほろろに扱わっていた。アマテラスの直属の部下が少女なのだから、訳は言つに及ばず。

太陽神とはすなわち斯くの如し。言わば太陽のような彼女ではあるが、神祕など欠片もない天照大御神である。

しかし天照＝彼女が既に染み付いてしまつた俺は、もうこの時代に毒されているのだろうか。月夜見尊は狭量で姉命の妖怪嫌い、建速須佐之男命は大人な女。

けれど、そんな後世に語られない神の姿が見られるこの時代を、俺は心底楽しんでいるとと思つ。

神代の三貴子は斯くの如し（後書き）

えーりんの名前。『ハ意 ××オモイカネ』。最後だけそう聞こえ
るような気がするといつ無理矢理設定。

シクヨウさんは多分もう出ません。狐を徹底的に避けるでしょうか
ら。

似非未来都市での日常（前書き）

よつやくこの時代に出でつもりだつたキャラクタを出しちつました。
とこつわくでもつすべで都市滅亡ですね、wktk。

それにもしても、今回はなんだかぐだぐだなよつな…

俺がこの未来都市を見つけてから五年後、イザナギは宣言どおりに天界へと帰つていった。五年程度は、俺達にとつてはそれこそたいした期間じゃない。だから、イザナギとの別れもずいぶんとあっさりとしたものになつた。イザナギが行くことを惜しんだのは無論俺だけではなく、多くの人間がいたが、イザナギは派手なことを嫌つたために盛大な送別会などは無く、俺とも一言二言言葉を交わしたぐらいだ。

アマテラスはまだ地上にいるものの、彼女もあと数年もすれば天界に戻るそうだ。『天岩戸』はやはりオモイカネに任せるとのこと。ちなみに俺とオモイカネは相性がよかつたのか、最近はオモイカネのところに入り浸つている。

「G・97からG・283までお願ひ。詳細はこの紙に書いてるから

「へいへい」

俺はオモイカネの差し出した紙を手に取り、試験管群に手を伸ばした。

俺が最近はオモイカネのところに入り浸つてるのは、こうしてオモイカネの仕事を手伝うためだつたりする。はじめて会つた時にまたまた見せることになつた俺の能力が、彼女のニーズに合致したらしく、彼女からの協力要請がアマテラスを通して俺のほうに来たわけだ。躊躇いなく妖怪に何かを頼むところ、オモイカネも本当にい

い性格してると思つ。

俺にもメリットがあつたので快く受けたのだが、しかし何分オモイカネの仕事量は多すぎた。だから、俺がこうして忙しなく働いているところわけだ。

五年が経つて、オモイカネはまた成長していた。既に俺との身長は比べるべくもなく、また胸部も張り出してきた。人間つて成長早かつたんだなあ。

「どうしたの?」

「オモイカネも昔はあんなにちっちゃかったのになあ…今ではこんなに可愛げがなくなつてしまつて…」

「あなたは最初に会つたときから私より小さかつたでしょ。それに私達人間からすれば成長しない妖怪のほうが不思議よ。それと胸を睨むのは止めてくれない?」

「はつ。俺がでかい胸を欲しがつているとでも? 残念ながら、俺も自分の身体にそこまでのこだわりはない」

「そうよね…大きい胸なんて邪魔だし、肩が凝るし、およそデメリットしかないわ」

「今お前は全俺を敵に回した」

「めちやくめちやくだわつてるじやない!」

とは言つたものの別にでかい胸が欲しいわけじゃない。ただなんとなくまな板を見ていると砂丘ぐらいは欲しいとか思わないかい? い

つからこんなこと気にするようになつたんだろうな。精神は男のままのはずなのだが、俺は妙にこの身体に適応している。おそらく、男からそのままこの身体になつていれば、こう簡単には馴染めなかつただろう。しかし、この身体になる前に狐の身体のスパンがあつたことが幸いだ。なにぶん狐の身体しかなかつたときは、ついてるかつていいないかより、動物の身体に慣れることのほうが重要だつた。

「出来たぞ、97→283。えーと、次はこの方をやればいいのか？」

「ええ。…相変わらず馬鹿みたいに早いわね。しかも不純物一切なし…。いちいち反応物を推測、生成物を分離抽出とかやってた私が馬鹿みたいじゃない。それだけ手間をかけても、不純物がいくらか混じるのに」

「そつちの方が正道だろ。俺のは正直邪道だぞ。あんまり楽には慣れるなよ、応用が効かなくなるぞ。…ああ、オモイカネの能力ならそれも無意味か？」

オモイカネの能力は『あらゆる薬を作る程度の能力』。

物理的に作れるものであれば、材料さえあればどんな薬でも作ることが出来るらしい。例えば、以前作っていたがん細胞を過程はどうあれ結果的に駆逐する薬とか、もう謎過ぎる。がんつて遺伝子疾患じやなかつたつけ…。

さらに俺がいることで、自然界にはありえないような組成の物質を作ることもできるので、オモイカネの能力の反則ぶりに磨きがかかっている。そのうち不老不死の薬を作るんじゃないだろうか。

「あなたの能力のほうが大概反則でしょう…。意味不明の構造をし

た石を持ってきたときは気が狂いそうになつたわよ

「あれか。あれは失敗作だな。もう少しで成功しそうなんだが…」

「何が？」

「できたらオモイカネに見せる。それまでは言えないな

首をかしげるオモイカネをよそに、俺はこの試験管を仕上げた。この後はスサノオのところに行くつもりなので、あまりのんびりはしていられない。

スサノオは存外忙しい。いや、おそらくツクヨミが一番多忙なのだろうが、彼とは接点がないのでどうでもいい。とにかく、スサノオが時間を取れることはあまり多くはない。だからこそ、遅くなるわけにはいかなかつた。

俺は仕上げた試験管を置き、オモイカネへと声をかけた。

「んじゃ、俺はそろそろ行くわ

「ええ、今日もありがと。スサノオ様によろしくね

「うひひ

この都市に来て俺が一番頻繁に通う場所はオモイカネのところだが、その他にも時折通う場所がある。それが、スサノオのところだ。

最初は、スサノオの腕鳴らしに誘われたのが始まりだつたが、あれ

よあれよと言う間にその交友は今まで続いている。最近では彼女の副官、タケミカヅチとも模擬戦をやっているほどだ。ちなみにタケミカヅチも俺が妖怪だということは知っているが、特に文句はないらしい。彼も、いわゆる強者なのだ。

「おーい、スサノオ。…あれ、どこか行つてたのか？」

「あ、こんにちは、ウカノさん。ええ、街の近くまで妖怪が来ていましたので、追つ払つてきました。例の『蜘蛛』です」

真つ黒な戦闘装束を身に纏い、黒い大剣を背負つて歩いていたスサノオに、俺は声をかけた。その身体には木の葉などが付いていて、そしていつも櫛の通つたつややかな髪も少しほつれてしまつている。さらに、彼女のそばにはタケミカヅチも付いていたのだからなおさらだ。

精悍な顔つきの、中年に入る前の青年、といった感じの男がタケミカヅチである。極限まで鍛え上げられた細マッチョ。理想的なその肉体は、戦闘においてもその見た目を裏切ることはない。そして、タケミカヅチはどちらかと言えば寡黙なタイプの人間だった。話を振られなければあまり口を開くことはない。

例の『蜘蛛』：マガラゴが来たということは、二人だけで行つたのだろう。一般兵の未来的武装な光線銃ではあの身体には傷一つつけることはできないのだ。

彼女も、そしてタケミカヅチも銃を使わずに剣を使つてているのは、ただ単純にその方が強いからだ。禍氣は、人間の外見を大きく変貌させることはないが、進化を早めたり、こうしてたまに異常な能力を持つた人間を生んだりする。おそらく、禍氣が今以上に薄れてしまつてもこれがなくなることはないだろう。

さて、二人と戦つたマガラゴだが、今回も死んでしまつてことはないだろう。普段マガラゴと話してゐる俺だからこそ知つてゐことだが、実はマガラゴは、人間に対する感情は種族の確執程度のものしか持つてはいない。ようするに、マガラゴは必要以上に人間と敵対することはないのだ。

それが分かつてゐるのかスサノオもタケミカヅチもマガラゴを殺すことはない。マガラゴが死んでしまえば、頭がよくなつたとはいへ世辞にも人間ほどではない妖怪達が無秩序に動き出してしまつためだ。今でこそマガラゴが頂点に立つことで纏まつてはいるが、それが居なくなつてしまえば、人間に対し個人的な感情を持たないマガラゴのようなものが、また上に立つとは限らない。もしも人間に對し憎悪を持つものが立つてしまえば、行きつく先は泥沼だらう。

二人は相対するマガラゴの態度から、なんとなくそこは察してゐた。

「ツクヨミはどうしてるんだ？ 相変わらず妖怪に手を出してるのか？」

すると、スサノオの端正な顔が嫌そうに歪んだ。彼女にしては珍しい面だが、スサノオとツクヨミの相性は実はとてもよろしくはない。この二人は、アマテラスが間に立つことでようやく纏まつてゐるようなのだ。一人だけで一つのテーブルにつくことは、まずありえない。アマテラスが天界に戻つた後はいつたいどうするつもりなんだか。

「どうやら、そのようです。ウカノさんが来られてからは減つてゐるのですが、勝手なことはほどほどにして欲しいものです」

ふう、とスサノオは不愉快そうな表情で悩ましげに息を付いた。ツクヨミの私兵は誰もが一般兵だ、スサノオやタケミカヅチのような単体で妖怪を蹴散らせるような者はいない。そのため狩られているのは、力の弱い小妖怪ばかりだが、それでも妖怪側に不満が出てくるのは当然だ。

今回マガラゴが街の近くまで来ていたのも、そういう不満を払拭するためだろう。

確証はないが、一人が動かなければマガラゴは街へと本格的に侵攻していたはずだ。結局、事なきを得たわけだが。

「ま、それなら今回は模擬戦無しだな。また暇が出来たら呼んでくれ」

「あ、すみませんウカノさん…通信符をいただけませんか？ 戦いの最中に紛失してしまったんです…」

「ん、ああ分かった」

頭を下げるスサノオに、俺は袖から出した、いくつもの短い線で出来た記号が書かれた短冊大の紙を一枚渡した。

『式紙』。

決して大層なものではない、紙に術式を打ち込んだだけの単純なのだ。力さえ注げば誰でも使える上に、俺にとつても術式をシヨートカットできる便利な代物である。未来のアニメとかに出てきた御札を参考にしたのだが、存外につまくいつた。欠点は、妖気タイプと靈氣タイプがあることだろうか。残念ながら二つともに対応した式は作ることは出来なかつた。

ちなみにスサノオに渡したものは、通信符の名前そのままに離れた場所にいる相手と会話ができるのだ。ただ、この式紙では出力があまり高くなく、あまりにも隔たりがあると効果を發揮することは

出来ない。

ゆくゆくは、この式紙の性能を上げることと、式紙よりも上位のものを作ることが目標である。実はこの田論見は、未だ完成こそしていないものの、五年前に神気が使えるようになったことでかなりの進歩を遂げていた。

「ありがとうございます」

「今日はもう戻るわ。また暇が出来たらその式紙で呼んでくれ。タケミカヅチもまたな

「はい。お気をつけて」

「…ああ」

スサノオのにこやかな声とタケミカヅチの重厚な声を背に、俺は街を出て森へと戻つて行つた。街の近くの森が、ぼろぼろになつていたが、おそらくあそこがマガラゴと一人の激闘地だつたのだろう。

街を出た後の俺は、マガラゴのことが気になり彼を探していくと、俺の家の前で座り込んでいる巨大な蜘蛛を見つけた。その脚は三本ばかり折れてしまつていて

が、マガラゴにとつては外傷は重傷とはなりにくい。特に脚ともなると数日後には再生しているほどだ。あな恐ろしきは妖怪の再生力。おそらく人間とは違い、妖怪はその器ゆえに肉体の欠損を空気中にある禍氣で補えるためなのだろう。

俺がマガラゴの前に降り立つと、ガサゴソと彼は小さく動いた。その様は巨大蜘蛛なのに何故か微笑ましい。

そしてその日は、最近発生している解決しなければならない問題諸々にめそめそと嘆く、意外と纖細なマガラゴを慰めることになるのだった。

俺としては、こういう時は酒だ！　なのだが、生憎彼の身体というか口は酒を呑むのには適していない。結局俺がしたのは一人で瓢箪に口を付けながら、ぐちぐちと愚痴るマガラゴに相づちを打つぐらいのものである。

似非未来都市での日常（後書き）

魔法というか魔術というか、ファンタジーの技術って便利なんですね
けど、加減が難しいんですね。
後々はさらにチート化が進んでしまいます。攻撃手段が少ないので、
そのあたりを特に。あとはチート式神とか。

俺もシクヨリせ、あつと臆病者（前書き）

ふはー…。今日は怒涛の展開です。もつとゆっくりすべきでしたかね。

今日は狐がなんだか冷たいような。なので注意です。

話の展開についていけないなどの指摘もお待ちしております。改善できるかどうかは、…なのですが。

イザナギがこの地を去つてさらに五年。今度はアマテラスが天界に戻つて行つた。イザナギ同様多数の人間に惜しまれていたが、それは彼女なりの人徳があつたためだろう。俺が見た彼女は自由奔放だったが、それでも誰からも好かれていたと思う。

最後は、俺の尻尾を千切れんばかりにもふつてから、名残惜しそうに去つて行つた。数本ばかり毛を抜かれていつたが、最後だと思えばお安いことだ。別にさつさと行つて欲しかつたというわけではない。俺も彼女を好いていた一人だつたのだから。

さて、アマテラスがいなくなつたことで都市の情勢は大きく変わつた。もともと水面下でくすぶつていた事が表面化しただけのことだ。

『技術部』の現トップはアマテラスに代わつてオモイカネ。彼女がそうなることは決まつていたことであるし、そもそも彼女自身は街の流れに関してはそれほど興味はないらしい。『技術部』はあくまで技術畠の運営する勢力だ、少なからず行政権を持つていようと使う気がなれば意味はない。『技術部』の立場は『行政部』『軍事部』の中立といつたところか。

しかし、『軍事部』は違う。『軍事部』のトップ、スサノオと『行政部』のツクヨミは、ツクヨミのでしゃばりを発端として、静かではあるが幾度か衝突していた。アマテラスがいたからこそバランスが崩れるることはなかつたが、そのアマテラスももういない。

場合によつては本格的な抗争にまで発展しただろうが、スサノオ自身はその展開を望んではいなかつた。そして、結局ぎりぎりで均衡を保つていた三貴子の二人は、スサノオとツクヨミが互いに完全に愛想を尽かす形で、崩れる過程もなく完膚なきまでに崩壊した。スサノオの都市からの追放。ツクヨミが裏から動いたこともあるが、スサノオ自身もこのままツクヨミのいる都市に留まるつもりは微塵も無かつた。『軍事部』のトップはタケミカヅチに受け継がれ、スサノオは一人都市を去る。

「姉さんももういませんし、この都市にいつまでも居るつもりはありません。それにあれが近くにいることは、私にはとても耐え難いものなのです」

「以前から都市を出て一人旅をしてみたいと思つて居ましたし、後悔はしていません。無責任かもしませんが、それでも私は私がしたいこともやつておきたいのです」

そう言つて、スサノオは黒い装束を纏い大剣を背負い行つてしまつた。

イザナギもアマテラスも、彼女の行動を責めることはないだろう。幼いときから真面目に仕事に打ち込んできたスサノオが、ようやく自分のしたい何かを始めたというのだから、むしろ喜んでいるかもしれない。天界に行つてしまつたので、実際どうなのは預かり知らないが、あの自由奔放な一人ならきつとそうだ。

さて、スサノオの後任のタケミカヅチは良くも悪くも、軍人というより武人気質なところがあつた。ツクヨミに大きく反発する事こそないが、しかし曲がつていて思えるようなことは絶対にしない。ツクヨミからしてみれば、スサノオよりはマシだろうがそれでも扱いにくい相手だろう。そんなタケミカヅチは、前線で戦う者であり

ながら妖怪に対して、これまた種族間の隔意しか持っていない。そういうところは、とてもマガラゴに似ていた。

タケミカヅチもマガラゴももう幾度もなくぶつかっていたが、そこに相手に対する負の感情は微塵もなかつた。ただただ、自分の帰属するもののために剣と爪を交え、互いの根が尽きるまで自身の全てをぶつけあう。

それは恒例行事のようで、人間と妖怪のバランスを保つために必要なプロセスだったように思う。

が、それも限界に近づいていた。いや、イザナギが危惧していたようにつかは来るはずのものだつたのだ。それが、少し早かつただけ。

マガラゴの言った、妖怪による都市の人間にに対する総攻撃、徹底抗戦。

アマテラスとスサノオが都市からいなくなることで、激化した妖怪狩り。既にマガラゴが妖怪を抑えるのは不可能だつた。それでも、マガラゴは彼らを最後まで纏め上げることをやめはしない。

そして、同じ時期にオモイカネの言った、月移住計画。

三年ほど前に採決され、既に最終段階へと入つた壮大な地上からの脱走計画。まるで図つたようなタイミングの実行日が告げられた。結果的には、妖怪の進行を食い止めるために月移住組と残留組に別れることになった。『軍事部』は、間違いなく残留組である。

主導は無論『行政部』の長、ツクミ。

この計画が地上の穢れとやらから脱却するためなのか、今は天界に、上にいるアマテラスへ何らかの思い入れがあるのかは分からぬ。それでも、彼は確かに何よりも上を目指そうとしていた。

「あなたはどうするの？」

天岩戸でフ拉斯コの中の溶液を見つめていた俺に、オモイカネがそう聞いた。

「どうつて？」

「『行政部』の情報からでは、計画決行の日と妖怪達の大進行の日がほとんど重なっているのよ？ あなたは、人間と妖怪、どちらに付くの？」

「どちらにも、付かない」

少しの不安を声に滲ませながら聞いたオモイカネに、俺はそう答えた。

仮に俺が人間につけば、俺がマガラゴを殺せばそれで終りだ。他の妖怪が俺やタケミカヅチに勝つことはない。

が、俺がマガラゴを殺すわけはない。

仮に俺が妖怪につければ、この都市の主要人部を全員殺せば終りだ。既にこうして中枢に入り込んでいるのだ、その程度は造作もない。しかし、俺がオモイカネやタケミカヅチを殺すわけはない。

仮にツクヨミを殺せば？ 断じてノーだ。形はどうあれ、ツクヨミは間違いなく人間側の指導者なのだ。俺は頭を失った人間を放り出すほど無責任でもなければ、人間を導くほどの器量も義理もない。

そもそも、マガラ「もタケミカヅチも俺が味方に付くことを望まなかつた。自分達の問題は自分達で付けると、そう言い張つていた。なるほど、俺は今まで両者間の問題に首を突つ込んだことは、一度たりともない。似たもの同士のマガラ「とタケミカヅチのことだ、今度の衝突で、双方の全てを終わらせるつもりなのだから。

「そう、それならいいわ」

オモイカネは俺が人間に付くことはないと言ったのに、安心したようには息を付いていた。

「怒らないのか？　俺が傍観者でいることに」

怪訝に思つた俺がそう問つと、オモイカネはおかしそうに笑つて言った。

「何で？　ウカノらしいじゃない。あなたは他人との関係は大切にするくせに、とても淡白ところがあるわ。どちらも大事だからこそ、いなくなることを承知しながら、どちらにも肩入れしないんでしょう？」

「…ああ。俺は臆病者だからな。片方を拾うために片方を捨てなければならぬのなら、俺はどちらも捨てないし捨わない。今の俺に、両方拾えるほどの力は無いんだ。…が、」

そこまで言つて、俺は袖から一つの小袋を取り出してオモイカネと渡した。

少しずつと感触と、じろじろとした感触がする袋である。

「これぐらいはいいだろ。力はあっても、オモイカネは非戦闘員だからな、それはお守りみたいなもんだ」

「これって…」

オモイカネが袋の中を見ると、そこには朱色の石が入っていた。そして、それは自然界にはまずありえない構造をした物質である。

俺は式紙を作り、しかしその術式の弱さには頭を抱えていた。しかし紙一枚ではそれがほぼ限界で、段階を越えるにはそれこそ式紙の改良だけではまるで足りない。

そして思いついたのが、物質を構成する構造式だ。

ファンタジーには、あらゆる魔術的要素を取り入れ、要塞のような堅固さを持つ屋敷や、迷宮構造を一つの封印式として作り上げ、超巨大な牢屋を作つたりと、一つの要素に三次元的な術式を盛り込んだものが時折あつた。

俺は自分の能力を利用して、それをマジマジサイズで行使した。

無論、簡単なことではない。妖氣禍氣では根本的に力が足りなかつたり、あまり術式側を重視するとカタチを保つことが出来なくなつたりと、問題はいくらでもあつた。

しかし、神氣によって力不足は改善され、さらにオモイカネとともにいることでその膨大な知識を吸収し、最終的にはようやく俺なりの答えを導き出すことに成功した。

その集大成が、今オモイカネに渡した朱色の石だつた。その性能は式紙とは比べ物にはならない。式紙に対し『式玉』と言つたところだろうか。

「ちょっと前、お前にとつてはばしいぶん前にか、言つたる。出来上がつたら見せるつてさ。俺からオモイカネへの餞別、贈り物つてわけだ」

「…ありがと。ねえ、オモイカネつて、私の名前じゃないのよ。今更だけど。そもそも、そう聞くこえるというだけで『オモイカネ』つていう単語すら入つてないわよ」

「いや、知つてるけどな。だが、俺に××と呼べといつのか。呼ぶたびに神経使つのは嫌だぜ、俺は。言いくらいだよな」

「ええ。だから、私のことはオモイカネでも××でもなく、『永琳』て呼んで」

「…偽名か?」

「そんなどころね」

「 そんじや、『永琳』」

「何?」

「そろそろ、行くわ

「…そり」

「ああ。じゃな、永琳」

「ばいばい、ウカノ」

それから何日も、俺は自分の家で瓢箪を傾けていた。瓢箪の中の酒虫も、なんとなく俺を責めているような慰めているようなそんな気がした。

マガラゴは既に街へと侵攻している。彼と顔を合わせたのは数日前が最後だった。そして、タケミカヅチともだ。タケミカヅチも体制を整えマガラゴを待つていてるだろう。

俺の知る限り、全体的に優勢なのは人間側だ。だが、今回の大戦ではおそらく妖怪側のほうが優勢だろう。単純な数では人間のほうが多いが、ここに戦闘力では妖怪のほうが上で、そして地上に残るのは『軍事部』の人間だけだろう。つまり数の利はそれほど大きくはない。

『軍事部』に限らず戦える人員全てに武器を渡して応戦すれば勝てるだろうが、被害も甚大ではなくなることは明らかだ。増してや、あのツクヨミがその策を選ぶわけがない。

確証こそないが、しかし間違いなくツクヨミは故意的に妖怪の大侵攻に時期を合わせたのだろう。『軍事部』の人間を一掃するために。おそらく彼は月にいけば『技術部』にでも都合のいい存在を創らせるはすだ。『軍事部』のように自身の意に沿わないものではなく、人間に逆らわない従順な奴隸を。この都市の『技術部』なら、それが可能だろう。その上、穢れの無いという月に行けば時間などいくらでもあるのだから。

俺が一人酒を呑んでいると、式玉の発動を感じた。広域遮断結界、これが発動したと言うことは、戦争も最終局面に入っているのだろう

う。しかし、永琳が死ぬことはない。あれの作る遮断結界は、マガラゴでも壊せない。

結局、人間に肩入れしてゐるんだな。

不意に俺はそう思った。

なんだかんだ言つても、死んで欲しくはないものだ。永琳は元より、マガラゴやタケミカヅチにもだ。が、両者の争いに首を突つ込むわけにはいかない。何せ、そもそも成り立ちからして人間と妖怪は敵同士だ。そこに憎しみなどの個人的感情がなくとも、ぶつかりあいは避けられない。そこに、どつちつかずの俺が入る隙などないのだ。

そうしてしばらくして、俺は瓢箪に栓をして立ち上がつた。せめて、見送りぐらいはしたかった。

少し前に見た街の面影は既にない。あちこちの無機質かつ整然としていた建物は、そのどれもが破壊され雑然とした様相を呈していた。いくつもの人間や妖怪の死体が散らばり、まさに死屍累々といったところだ。…その中に、ただの一人も顔見知りなどはいなかつたが。

空を見上げれば、煙をたなびきながら凄まじい速度で一つの光が天へと昇つて行つていた。そのうち大気の層も突き破つて宇宙へと飛び出し、俺にも見えなくなることだろう。玉石と、そしてその持ち主がその中にいることを確認して、俺はまた歩を進めた。

街の中心より少し手前にいたのは、一人の男と巨大な蜘蛛だつた。しかし、男は、タケミカヅチは何本もの爪が刺さり、完全に絶命していた。血が完全に乾いていないことから、ぎりぎりまでマガラゴ

と戦っていたのだろう。苦悶の表情など少しも浮かべておらず、どこか満足げだったことは救いになるだろうか。

巨大な蜘蛛、マガラゴは、十一本の脚のうち九本が既にもげ、身体のあちこちが焦げ付き、そしてタケミカヅチの持っていた剣が胴体には深々と刺さっていた。

「 」

虫の息でも、それでもギリギリの状態で生きていたのは、彼だからこそだろう。音にならない、かすれた空氣のようなものしか、彼の口からは聞こえないが。

「…死ぬのか？」

俺は彼の前に立ち、聞いた。仮に神の奇跡があつたところで、彼の魂をつなぎとめておくことは出来ないだろう。何せ、彼はもう死が確定してしまっているのだから。それでも、こうして俺と話が出来るのは。

「俺を、待つてたのか？　来るのかも分からぬのに。お前を助けてやれるわけでもないのに」

「 」

「…そうか。お前らホントに、俺のこと良く分かってるよ」

マガラ「にこんなに想われるほど、俺はいいやつじゃない。むしろ俺は選択から逃げた卑怯者だ。タケミカヅチやマガラゴが死ぬことを容認した愚か者だ。

「 」

「…分かつたよ。どうせ俺は死なないだろうからな、億年だって、この地上で待つててやる。だから、また戻つてこい。お前の居場所ぐらいにはなれる。しかし、地獄の閻魔の裁定は厳しいぞ。あいつらはどうもお堅いからな」

こんな時なのに、なぜ俺の顔はなおも動かないのだろう? 泣き顔だつて見せはしないが、笑い顔だつて見せられないじゃないか。

「 あ」

「…ああ。またな、マガラゴ」

最後に、ようやくいつも鳴き声を発し、そしてそれつきりマガラゴは動かなくなった。

俺は、最後まで静かな瞳でそれを見つめていた。
いつの間にか、俺は人間だったころより凍り付いてしまっているらしい。タケミカヅチも、マガラゴも、死んでしまったといつに俺はこんなにも揺れてやしない。

転生といつものを、死が消滅ではないことを、知つてしまつたからだろうか。

永い永い時の中で、いつか再び出会えるからだろうか?

「ん?」

深く沈んでいた俺の心中に水を挿すように、俺はナニカが動いているのを感じた。既に動くものない、俺しかいないこの場で、何か

大きい力が感じられる。

そして、それはとある建物からだつた。マガラゴたちがいた場所より少しげつたところ、そこは比較的無傷で、細部に傷はあるものの倒壊などはしていなかつた。

『行政部』の本拠、『月宮』。

俺も入つたことはない。

中が気になつた俺はそこへと脚を踏み入れた。セキュリティは大方停止しており、その類の妨害を受けることはない。造りは大体天岩戸と同様で、迷うこともほとんどなかつた。そして、ツクヨミの部屋もアマテラスの部屋と同様の配置である。なんとなく何かの執着を感じないでもないが、とにかく俺はそこへと向かつた。

扉はさすがに重厚な作りで完全に閉じてしまつてはいたが、もう壊さないよう気を付ける必要はなかつたので、扉を構築する式をとにかくばらばらにしてやつた。

00:18 00:17 00:16

中は天岩戸のアマテラスの部屋よりもずっと広かつた。いくつもの機器が配置され、それに付随するようにいくつもの椅子が置いてある。この部屋は、執務室というよりもまさに何かの指令室と言つた具合だつた。

00:15 00:14 00:13

さらに、中央にあつた一際大きなモニターは不吉なカウントダウン

を刻んでいた。既にロケットは飛び立ったのだ、なおさら何かを起動しているとは思えないのだが。

しかし、今なおさり何かが動いているのだ。この数字は、その制限時間を示しているはず。

00:12 00:11 00:10

言いようのない不安に付き動かされ、俺は近くの端末を高速でいった。もともとこの類に強い俺には造作もない。

そして、じきにこのカウンタダウンの答えは導き出された。

00:09

「あの、糞^{シクヨウ}ガキ…！ やつてくれたな…！」

00:08 00:07 00:06

小さなモニターに映し出されたのは、この地上を破壊しきくす、この都市の科学の粋と人間の靈力による神祕をふんだんにあしらつた、まさに夢^{ドリーム}のような爆弾だった。俺が感じたのは、この爆弾に込められた膨大な靈力だろう。起動することでようやく俺にも感じられたのだ。

永琳は間違いなく関わってはいないだろう。彼女がこんなものを作るのは思えない。ということは、俺はずいぶんとツクヨミを見くびつていたらしい。永琳にも場合によつてはスサノオやアマテラスにも知られずに、これほどのものを作り上げたのだから。

00:05

逃げる？ 無理。じきにや。

00:04

タイマーの停止？ 可能だが、タイマーを止めたところで爆弾は止まらない。タイマーはただ表示されているだけで、爆弾とはシステムが独立している。

00:03

爆弾の破壊、もくは解体？ 無謀。刺激を「与えることは元より出来ない、解体する時間などもない。

00:02

「クソ！」

俺は八尾と、そして靈尾を一本、つまり今の全力を出し切り強固な結界を作り上げた。しかし、それだけでは全く足りない。袖から今持っているだけの式紙、式玉をばらまき、六十、幾百、幾千もの結界を作り上げる。俺の手札はこれで全部だ。

00:01

最後に、俺は出来るだけ身体を縮め丸くして、結界を極限まで凝縮した。

00:00

そして、次の瞬間には俺の視界も意識も全てが真っ白に染め上げられた。

この日、地上の生物のおよそ九割が死滅。
永琳が気づいたときには、地上はおよそ全てが火の海と化していた。
青かつた地球はその時、まるで太陽のようにも見えたといつ。

?年後、某所。どこぞの地中よつ狐這い出る。

「う...」

ずしん ずしん

「え?」

ギヤアツ ギヤアツ

ガアアアアアアアツ

「?」

人間 恐竜

「???」

俺もツクヨミも、きっと臆病者（後書き）

かなり大雑把に、 地球史？

地上の霸権推移

第一世代 現天人

V - C 境界

第二世代 現月人 その他ほぼ絶滅

P - T 境界

第三世代 恐竜 絶滅

K - T 境界

第四世代 現地上人

こんな感じです。大体の年代は分かるでしょうか。矛盾点等見逃しきつたらありがたいなと…

SFのヒーローこと思つ（前書き）

また暴走です。チート式神作りました。投稿するか迷いましたけど、もつこけるといまで。

式神つてあれ鬼神を使役するものなんですね。ファンタジーでは色々な使い道が出てくるので、良く分かんなくなつてます。今回の人型式神のモデルは某薬味漫画のちびせなです。

最初に俺が目を覚ましたのは、深い土の中だった。自身の記憶の最後に張った結界はかなり綻んでいたが、しかしきりぎりで残っている。

身体の頭の天辺から足のつま先までがつちりと土で固まっていたが、このときほど本当に能力を持つていて良かったと思ったことはない。どれほど腕力があるうとも、これほど積もった土の下で、動かせない手でどかすのは無理と言つものだ。とにかく少しでも動く隙間が必要だった。

周囲の土を構成するものをバラバラにしながら、俺は少しづつ結界を広げていった。これなら、十分俺が動くスペースを作ることが出来る。

そうして上だと思われる方向に必死に掘り進んでみれば、唐突に目に光が飛び込んできた。しかし、俺の目に飛び込んできた光景は以前のものとはまるで違っている。

周囲には絵や化石でしか見たことのない植物が生い茂り、これまたスクリーンやらでしか見たことのない巨大なトカゲが堂々と闊歩していた。

原生植物に恐竜、進化した哺乳類が本物を目にすることのないもののオンパレードである。

起き抜けの頭で必死で考える。
何故こうなつたと。

恐竜が出現したのは現代を基準に約2億5000万年前。が、地を

揺らすほどの大型恐竜が出現したのは、恐竜全盛期頃の白亜紀だろうか？ だとすると今は約1億4000万年前ほどになるのか。あれ？ だとすると俺達がいたのはいつごろになるんだ？ 爆弾で吹き飛んで、次は恐竜。あのが中生代最後の大量絶滅だとすると、俺は2億5000万年前ぐらいにいたつことになるのか。…あの時の生態系は謎だったな。なんで後世に残らなかつたんだ。

つか俺どんだけ寝てんだよ。いや、生きてるだけマシかな。どういで土に埋もれてるわけだ…

…そりいえば、今の大気に含まれる禍氣の濃度があの頃と比べると濃い。つまり、今の地上には人間、ひいては妖怪がないということになる。完全に恐竜の天下、というわけだ。

「さすがに、恐竜とお友達にはなれそうにないな…」

正直、何をすればいいのか分からぬ。現在位置など分からぬし、仮に分かつたところで無意味だ。恐竜がここまで進化しているということは、少なくともあの時から数千万年は経過しているのだ。俺の家はあの時消し飛んだらうし、もし壊れなかつたとしても埋まつてゐる。そもそもそれがどこか分からぬ。

あの時の知り合いは、イザナギ、アマテラスは天界、永琳は月に辿り着いているのだろう。これだけの時間が過ぎたのだから、生活環境も整つてゐるはずだ。…しかしあ天界も月も今の俺には接点がないわけで。スサノオだって、あの頃の時点では所在不明になつたのだ。長い年月の過ぎた今となつては生存はもう絶望的。ぶつちやけ完全に独りなのだ。

「人間が生まれるまでつて、流石に永すぎる。1億年話し相手がい

ないのは堪えるな…」

唯一の救いは、瓢箪をがつちりと抱えていたことだろうか。そういうえば丸まつたときに瓢箪をお腹に抱え込んでいたのだ。中の山椒魚も、我関せずといった風に無事だつた。しかし妙にでかくなつている気がする。相変わらず話しかけても反応を返してはこないが。だが、酒は呑める。俺にとつては非常に大きい事柄だ。

そういえば、他に変わっていたこともある。

俺の尻尾九本全てが靈体と化していた。靈体が見えないものが今俺を見たら、狐の耳だけが頭に生えている、尻尾無しのおかしな妖怪に見えることだ。

また、これはおまけなのかどうかは分からぬが、九本の靈体実体を切り替えて遊んでいると、うつかり全身が靈体になつてしまつていた。慌てて戻そうとしてみると簡単に元に戻れたが、これは看過できないことだ。何せ尻尾しかすり抜けられなかつた扉も、今は全身が通り抜けられるのだ。…扉の無いこの時代では何の意味もないが。しかも全身靈体にしてたらさながら幽靈ですぜ、俺。

おまけ機能はともかく、俺は靈尾が増えたことで同時に爆発的に増えていた力にも驚きながら、靈尾七本を隠し残り一尾の靈体を解いて表に出した。俺にとつてはやはり、この状態が一番落ち着くのだ。

「つて、なんか地面までの距離が少し遠い！ 成長してるー！」

これに最後に気づいたことに心中泣きそうになつたが、ショック同様そこには喜びもあつた。以前男だつたものとしては、いつまでもちびっ子では自信の喪失？につながると言えよう。それゆえ、10cmも伸びたのは俺としては大快挙なのだ。幼女からの脱却、これ以降成長することがなくとも、その事実は俺を一時的に高揚させた。

しかし、今まで成長しなかったのに、幽霊みたいになつたら成長つてどうしたことだろう。相変わらず俺の存在 자체が謎過ぎる。

さてそれはともかく、1億年の間ぼっちで過ごす度胸のなかつた俺は話し相手を創ることにした。科学技術で人工知能搭載のロボットだとが造つたりする発想があるのでから、俺の術式技術でもなんかできるんぢやないの？ 最初はその程度の考えではあつたものの、他にやることのない俺は適当な場所に結界を張つて引きこもり、その作業だけに没頭していた。

最初にやつたのは、式紙のバージョンアップだ。そして、まずはこれを核として人形を創ることから始めることとする。

その上で思い出したのが、妖怪という存在だった。人間の負の気と禍気を器とし、それに魂が入ることでそれは妖怪となる。ならば器をつくり、その器を動かす器官、魂を式紙で代用してみれば？

簡単なことではないが、それを思いつくと同時に俺の頭の中には既に設計図が出来上がりつつあった。式紙では自由意思を持たせるには弱すぎるが、初期段階としては十分だつた。次段階には式玉があるのだから。

俺にとつて運が良かつたのは、禍気の特性を知つていたことだらうか？ 禍気は負の気に引き寄せられ一つの器となす。俺に負の気そのものを造ることなどできはしないが、禍気には詳しいこともあり、負の気の禍気を吸い寄せる機能を再現することは可能だつた。似たようなことは、今までもやつてきたのだ。

だが、これは一枚では不可能だつた。やはり式紙は強化しても弱す

ぎる。結局、それに気づいた後に辿り着いた答えは式紙同士の連結だった。つまく術式を乗せ組み合わせることで、複数枚の式紙は互いに相乗しあい、よつやかく基準値には達せられた。

式紙三枚を使い、禍気を集め器とする器官にする。さらに式紙を五枚を使い、それらにありつたけのプログラムを打ち込んで魂代わりの器官を創った。いや、簡易AIといったほうがいいだろうか。最終的には、自身で思考し、俺の指令を遂行するような人形が完成したのだが、そこに柔軟性は微塵もなくどこまでも機械的なものだった。なんというか、どうもしつくりとこない。

が、これはあくまで式紙を核としたもの。本番は式玉からだ。一応、人形は最初に式紙を使つたと言つことでそれにちなみ、『式神』と名づけたが。

ちなみに、俺の情報を式神の器の術式に打ち込んでいるため、できた式神の姿は俺自身だ。ついでに白い小袖と赤い袴も付属させてある。イメージは巫女装束だ。なぜか口リサイズなのだが、耳もあれば尻尾もある。そして、俺同様に無表情だった。それに見つめられるのはなんだかあれだったので、狐の仮面を上に被せておく。複数体作つたときに同じ顔がずらりと並んでいるのも怖いので、この仮面はこのままでいいだろう。

そういうえば、式神を造る仮定で憑依型の式神もできたが、正直今はほとんど使い道がないので置いておこう。

式紙核タイプはひとまず放置すると、俺は次に式玉のほうへと手を付けた。

ただこちらは構造が複雑ではあるものの、基盤や工程はほとんど式紙の方から流用できる。式紙という下地がある分、発想ゼロからやるよりはマシだろう。

こちらは式紙のように連結することもなかった。式紙より断然体積が大きいこともあるが、こちらは禍氣を集める器官と核を分ける必要が無かったためでもある。

ただ誤算だったのは式玉の構造をいじる必要があつたことだろうか。そのお陰で、全体構造のバランスをとるためにこれまた苦労することになってしまった。

最終的に完成はしたものの、結局それまでの時間は式紙の時よりもかけてしまっている。

しかも、完成したのはまたしても人形だった。いや、式紙のものより比べるべくもなく高性能なのだが、やはりどこか無機質だった。自己進化していくという可能性もあるが、確証はない。どれだけかかるかも分からぬ。やはりAIでは限界があるのであらうか？

行き詰つた俺は、最後の手段を選んだ。

「いっそ、人工的に魂を造つてやる」

正直どうかしてたと思つ。

魂を作るために以前以上に結界に引きこもり、それからもう何年経つたのかは分からぬ。外にいる恐竜がどうなつたかなんて知らない。世界がどう変わつたかなんて、今は興味ない。

俺はただただ完全自律式神を目指していた。

最初は話し相手が欲しい、それだけだったが、途中からはもう意地になっていた。存外俺は、作る者だったらしい。

本物の魂は作れずとも、それと同じ機能を持った物は作れる。俺はその信念の赴くまま、式玉を改良し続けた。

魂というものは、イザナミさんを見たとき以来幾度となく見てきている。今の時代だって、恐竜が死ねば魂は遊離してゆく。今は人間がいなさいで地獄の管理機関は凍結されているため、魂は元々あつた法則に従いあちこちを飛び回っている。

それらを思い出しながら、俺は創ることだけに打ち込んだ。緻密に、複雑に、そうしていくたびに、式玉は朱色からビンビンと赤を増してゆく。

それを見るたびに、俺は完成が近づいてることを感じた。

思えば、俺は正気ではなかつたのだろう。式神を作る過程でも然り、俺の思考は彼ら同様どこまでも機械的なものになつていた。そもそもなれば魂を作ろうなど考えるはずもない。その機構を知つているからこそ、俺は余計にそう感じられた。

ならば、こうして完成が近づいているというのは俺の執念故だろう。人間が生まれるまでの時間全てをそれだけに費やし、冷静な気狂いの「」とく、正気ならば発狂しそうな代物を精密に組み上げていった。

そうして、その時は呆気なくやつてきた。

力チリと、そんな幻聴が聞こえるとともに、俺の手の中にあつた未完成品が完成品へと変わった。式玉とは違うつるつるとした表面が、その瞬間は一際大きく輝いた気がする。

元々は朱色だった式玉は今は血色など通り越して、目を細めそうなほどの紅を呈していた。

「…式^{起きの}」

紅の玉を掲げ、俺は一言つぶやく。所詮これは魂の偽物。だが、きっとナマモノの真似事は出来るはず。この構造は、ほぼ妖怪のものと同一なのだから。

俺は確信を持つて、玉を放り投げた。

ぱしつと、そんな音とともに玉は急激に眩く光り、そして周囲の禍氣を凄まじい勢いで吸い寄せていった。その濃度は従来の式神のものとはまるで違う。そう、妖怪並みの器を構成できるほどだ。玉は禍氣を吸うたびにぎらぎらと発光していた。その様はまさに『禍々しい』のだが、密かにてんぱっていた俺にはどうでもいいことだった。

これと同じ物はもう作れない。完全に同一の魂は、同じ存在というものは一つの世界に同時に存在することはできない。きっと同じ物を作ればどこぞへと跳ばされることだろう。つまり、俺はそれほど完成度の高い偽物を作ったのだ。

数分後、もう一度ぱしつという音とともに発光はぱたりと止んだ。周囲の禍氣の流れも完全に止まっている。

俺は玉があつたところへと足を進めた。そこにはもう玉はなく、以前の式神達同様人型が、多分俺そつくりの少女がいる。だが、今までのものとは違いそれは赤い髪をしていた。

「おーい」

そもそも、従来の式神は立つた状態で現れていたのだが、こいつはうつ伏せで現れた。まるで俺のような不精者だ。赤い髪も、無造作に地に散らばっている。そして顔が見えないせいで俺と同じ姿なんかは確証が持てない。ただ、身長は相変わらず口リサイズだ。何でだろう。

うつ伏せになつた頭を、俺は容赦なくばしばしと叩いた。正直起きてくれないと成功なのかどうか分からぬ。今の状況的にはほぼ成功なのだが、それもどこまで正確であろうとあくまで推測だ。

しばらく叩いていると、そいつは徐にむくりと身体を起こし、これまたゆつくりときよろきよろと辺りを見回していた。その顔は、俺の造りとまるで同じだ。しかし…

「…」

「おーい？」

そいつが何も言わないので、俺はもう一度声をかけた。そいつはぴくりと動くと、またゆつくりと俺と目を合わせた。その目は、髪同様に真っ赤に染まっている。そして、そいつの顔を見ると同時に俺は悟った。こいつは俺でも、自由意思に欠ける機械のような今までの式神でもなく、完全に別の存在だと。

「うー」

なぜなら、機械も俺もこんなに無邪気な顔はしない。

しかし、話し相手になるにはまた時間がかかりそうだ。

SFのAIはすごいと思う（後書き）

というよりも、モデルはアリスさんの人形かもしれない。完全自動人形とか…

子供って、よく分からぬ（前書き）

いそがしす。書けましたので、投下。この二つの話の表現つて、余計難しいです。

あと、恐竜はまだ絶滅していない時代になりました。恐竜つて美味しいんでしょうかね。さすがに分かりません。

子供って、よく分からぬ

「あつ」

俺の生み出した完全自律式神、見た目は髪と眼が赤い口リ状態の俺そつくりである彼女に、俺は『紅花』^{べにばな}と言う名前をつけた。紅花は他の式神とは違い、ほぼ完全に一個の存在だ。いつまでも名無しでは心もとない。

しかし、紅花はまだ自分の名前も認識できていないようだつた。しかしむしろそういうところが生き物らしく、完全自律式神の成功の証でもあるのだが、かつての俺の姿とまるで同じといふことに奇抜さを感じた。俺にもこんな時期があつたんだろうなと思つと、感慨深いものではあるが。…前の人生でだけどな！

「あつ」

だがやはりしゃべれないといふのは残念だ。幸いなのは、俺の情報を少なからず打ち込んでいることだらうか。元俺の知識も、今は使えないと言つだけで十分に彼女の中に蓄積しているはずだ。あとは使い方を教え、経験を積ませればいい。それと精神の成長か。どれもゆっくりやつていけばいいことだ。

しかし。しかしだ。

「とりあえず、尻尾を引っ張るのは止めなさい」

「う？」

アマテラスもそうだったが、お前らはもふもふをもつと丁寧に扱えるのか。てか紅花にも尻尾はあるじゃないか。

そう、他の式神にも言えることだが、俺を元にしたせいがどいつにも耳と尻尾は付いている。ただ尻尾の本数はどの式神も一本だけだ。紅花は成長する可能性はあるが、他の式神は尻尾を増やすなら俺がバージョンアップをせるしかないだろう。

紅花は自分の尻尾には興味がないのか、俺の尻尾が気になるのか、執拗に俺の尻尾を引っ張っている。その顔に悪意など欠片もなく、注意してみても首をかしげているだけだった。しかし俺は痛いのだ、ちくちくしてもつ地味に。

口頭で注意しても伝わらないのか止めてくれないので、今度は注意しながらぱじりと引っ張る手を叩いた。すると、しばりきょとんとした顔をしてからぴぎゃーと泣き出してしまったのだ。

正直、俺は紅花にどう接すればいいのか分からぬ。何かをされたたびに、見た目はそこそこの歳をしていても、中身が赤子であることを思い知らされる。道理の通じない相手といつものを、俺は特に苦手としている。相手が何を考えているのか分からぬし、推測も出来ない。

泣き出した子供を田の前に俺に出来たことは、逃げることでも慰めることでもたたくことでもなく、ただ見つめていることだった。紅花の目からはぼろぼろと涙がこぼれ、悲鳴のような泣き声が周囲に轟いている。だが俺は見てるだけ。その様を、痛ましく思わないでもないがしかし、見てるだけ。

子供というものは、えてして視野が狭い。それは視界のことではな

く、意識の範囲という意味でだ。せいぜい同時に考えられるのは一つ二つ、だから子供の行いというものはいつも傍若無人に見える。何かをしていれば、周囲に配慮することほどどの余裕は彼らにはほとんど出来ないのだから。

結局何がいいたいのかと言えば、紅花の泣き声は周囲に対する配慮は少しもない。ぶっちゃけて言えばうるさい。結界を張つていなければ恐竜が寄つてきただろう。

そもそも、彼女はいつたい何故泣いているのだろう？　俺が叩いたことが原因なのだが、しかしそれが泣く理由になるのか？　叩かれた、と感じる程度の強さだったのだが、紅花にはそれが痛かったのだろうか。

そんな益体のないことをただつらつらと考えながら、俺は泣きに歪んだ紅花の顔をぼんやりと眺めていた。紅花は子供らしくその感情の起伏はとても大きい。些細なことをきっかけにこれほど大泣きするほどに。同じ顔をしていても、その様は俺とはまったく似ていなさい。

今の泣き喚く紅花を見て、うらやましいと感じることはない。しかし、紅花が笑う様子を見て俺は同じ気持ちでいられるだろうか。

結局、紅花は泣きつかれて寝入つてしまつまで泣き止むことはなかつた。数日間ぶつ続けて泣き続けたのだから、大したものだと言わざるをえない。その様子をただ眺めていただけの俺も大概だが。どうせ起きれば今回のことは忘れてしまつているだろう。幼い紅花に過去にいちいち田を向けるほどの思考力はない。

俺は式玉二つで式神を二体作り、取りあえず食べられそうなものを探しに行かせた。俺は酒だけあればいいのだが、紅花はそうはいか

ない。いや、食べずとも支障はないだろうが、俺は幼い頃の味覚つて大事だと思うんだ。そうでなくとも、うまい物ぐらいは経験として食べさせてやりたい。この原生植物生い茂るこの世界に何があるかは知らないが。

「あ。じゃあ式神に任せたら分からなかな。食べられそうなものを探して来てなんて指令、曖昧すぎだろ」

が、行かせたところでそれに気づき、俺は急遽式神を戻し眠る紅花の元に付かせると、自分で結界の外へと出て食べ物を探しに行つた。一応紅花が結界を通り抜けられないようにはしているが、万が一と「いつこ」ともある。紅花の居場所は分かるものの、うつかり出てしまつて恐竜と遭遇してしまえば目も当てられない。紅花に戦闘力は無いはずだ、多分。俺をある程度コピーしているから、生存本能のままに戦えるかもしれないわけだが。

結界の外へ久々に出た俺は、改めて周りを見回した。今まで周囲に注意を向けることはなかつたために、風景が変わつてることには気づけなかつた。この場所は、俺が来た時は岩や木々で囲まれた概ねただの平地だつたのだが、いつの間にか少しおだかな斜面が出来ていた。それにともない周りの生態系も多少変わつてている気がする。ただ、恐竜は相変わらずこの地上を支配しているらしい。そこかしこにそれらしい足跡を発見することが出来た。

「木の実探しと…、あとは、恐竜つて食べられるかな…。トカゲみたいなものだし、大丈夫か」

ということは、この世界は弱肉強食真っ只中。俺に見つかつた運の悪い爬虫類？諸君は、諦めて俺の経験値と紅花の血肉になつて欲しい。

もぎゅもぎゅと幸せそうな顔で肉を食べる紅花を見ながら、俺は溜息をついた。食材集めでの収穫はいくつかの木の実と、草食恐竜を狩つて持つてきた肉である。全部は持つてきていないが、他の肉食恐竜が食べつくしてしまつだろ？

木の実は、幸いわりと現代まで形態が変わっていないものもあつた。しかし数は少なく、探すのには苦労したが。イチジクとか妙にでかい気がする。

草食恐竜を選んだのは、肉食恐竜は肉が固そつだからといつ理由からだつたのだが、しかし草食恐竜の肉も固かつた。仕方なく能力でたんぱく質をある程度分解し焼いたのだが、本当はナマモノにこの能力は使いたくなかった。何が足りないのかは知らないが、そうして出来たものはどうしても味を物足りなく感じてしまうのだ。旨み成分まで再現しているはずなのに、何故か天然物に負けてしまう。

美味しそうに食べる紅花を見ていると、少し申し訳なく思つてしまふ。いつか天然の肉を食べさせてやりたいものだ。…よくよく考えれば、この時代でも哺乳類やその他の動物はいるはずだ。今回は大きい恐竜にしか目が行かなかつたが、今度から探してみよう。でも一応残つた肉は干し肉かな。

ちなみに炎は術を使って出した。自然界において、なんらかのエネルギーが熱になることなどはままある。では、妖氣とかも他のエネルギーに変換できないかと試行錯誤した結果、実現させられたのが

発火だ。ぶつちやけありえないとか止めて欲しい、これでも複雑な工程を踏んでいるのだ。今は改良が進んだので簡単な術式で発火させることができるが、最初は調節が難しかった。それこそ周囲を暖める程度の熱エネルギーしか出せなかつたり、二十メートルにも及ぶ火柱を出してしまつたり。

「う？」

俺が相変わらず酒を呑みながら紅花を眺めていると、紅花はこちらを向き首をかしげた。その様はとても可憐ではあるが、しかし如何せん口の周りは肉汁で汚れ、小袖もえらいことになつていて。俺は作り置きしていた紙を取り出して、それで紅花の口の周りを拭いた。紅花はくすぐつたそうにしているが、抵抗はしていない。

そんなことをしながら、俺はふと思つた。

紅花は俺のことをどう思つてゐるのだろう？ と。紅花を生んで、大した時間は経つちゃいない。そんな生まれたばかりの紅花は、俺をどう見つけてゐるのか。紅花は確かに子供だが、何も出来ない人間の赤ん坊というわけでは実はない。歯は生えそろつていてるので肉を食べるこことだつて出来るし、あるいは歩くことだつて出来る。それは、身体は出来上がつてゐるということもあるが、無意識下で俺から受け継がれた情報を使つてゐるためだらう。

だが、その精神はやはり子供なのだ。言葉はまだ分からぬし、簡単なことで笑つたり泣いたりする。

そんな子供な紅花は、生まれてからずっと田の前にいる俺のことをどう感じてゐるのか。

問題は、俺自身ですら紅花のことをどう思つてゐるのか分からぬことだらうか。ただ言えることは、俺は紅花のことを道具だとは思

つていないとこつことだが。

「なあ、紅花」

「う？ 一やア、ベ二ハな？」

俺が紅花に話しかけると、紅花はたどたどしくも俺の言葉の真似をした。やはり、早い。俺の真似とはいえ、何かをしゃべらうとすることは出来ている。

俺は、一言一言を区切るよりむづくつと繰り返し紅花に言った。

「べ・に・ば・な。お前の名前だ」

「べ・に・ば・な。なまえ？ べに・ばなの、なまえ？」

「やうだ、紅花の名前だ」

何度もいったが、紅花には既に十分な知識がある。単語の意味を合致させてしまえば、十分彼女とでも会話になるはずだ。元々赤ん坊は周りの人間が話している言語を聞き、言葉を学習するものだ。ならば、紅花がしゃべれるようにするのなら、会話が一番のトレーニングではないか。

「その肉は、おいしいか？ 俺が、取つてきたものだ」

「その、一べ？ オいしい、ベにばなは。とてきた？」

「この肉は、おいしいか。それはよかつた、とつて來た、甲斐がある」

「「」の二ク、おこし。マカツタ？」

「ああ、とても、いいことだ」

そんな風に、途切れ途切れにゆっくりと会話しながら俺は紅花に言葉を教えていった。まだ言葉はたどたどしいが、しかしどのようにものか覚えてしまえばあとは慣れでどうとでもなる。何だかんだいつても、こうして実際に会話は成立しているのだ。なにより、紅花は俺の言つた言葉を考えトレースしている。言葉を使おうとしている意志があることが、俺には喜ばしかった。

と、そこで俺は忘れていた事を口にした。

「やついえば、言つてなかつたな。俺の名前は、ウカノミタマだ」

「オレ・ウカノ？」

「……それでいい。だがあえてもう一度言わせてもらおう、私の名前は、ウカノミタマだ」

別に俺が『俺』を使うのはいいんだが、紅花が『オレ』と言つと不安になるのは何故だろ？。そう思つた俺は、急遽一人称を『私』と偽つた。

が、次に紅花から出た言葉に俺は固まつた。

「おかーさん？」

「そうだ。…………あれ？」

無邪気に言つた紅花に思わず頷いてしまつた後に、首を傾げる。そんな単語は、俺は教えてないぞ。いや、単語は知つてゐるだろ？。し

かしそれが正確に使えるかどうかでいえば、別の話だ。

それも、俺が『おかーさん』だと、俺がおかーさんである要素がいつたいどこにある。

「おかーさん！」

「げふっ」

突然、紅花が俺の腹にぶつかってきた。しかも頭からである。紅花の思わず頭突きに、俺は上体を折り空気を吐き出した。結界を張つていなかつたために思わずダメージを受けたが、しかし紅花が怪我をする可能性を考えるとむしろこの方がよかつただろう。

「お、私は、紅花にとつて、母親なのか？」

分からぬのならば、本人に聞けばいい。俺のこんがらがつた頭は、そんな答えをはじき出した。そもそも、何故俺はこれほど困惑しているのか。

俺はきりきりと腕で腹を締め付けてくる紅花に尋ねた。もしかしてこれは締め上げているのではなくて、抱きついているのだろうか。紅花の力が強すぎて、攻撃にしか思えない。

もぞもぞと紅花は俺の腹部で動きながら、ぐつと俺の方に顔を向けていた。

「ワタシ、ハはおや？ ワタシ、の、おかーさん。ウカノ・は・ワタシの、おかーさん！」

そつ舌足らずな口調で、しかし赤い耳と尻尾を嬉しそうに。またぱたと動かしながら、紅花は俺に笑顔でそう言った。そして、一層強く俺に抱きついてきた。それはそれは嬉しそうに。

紅花に、言葉の知識はある。

ならば、自身を生み自身を叱り自身に食べ物を『え自身を守るもの』がどう言つ存在なのか、その存在がどの言葉に当たるのかを自分で考え探し出したのだろう。

紅花が俺をどう思つているのか、だつて？

『生まれてからずつと田の前にいる俺』。そんな女を生まれたばかりの子供がどう見るかなど、そんなことは考えるまでも無かつたようだ。

俺にしてみてもそつだ。今まで俺は、無意識に紅花のことを気に掛けていなかつたか？ わざわざ食べ物をとつてきたり、紅花が美味しそうに食べていたり紅花が成長しようとしている様を見ると嬉しくなつたり。

永い、永い時間を掛けて、俺は紅花を生んだ。腹を痛めたわけではないが、苦労しながら生んだそんな存在に、愛着がわかないわけが無いじやないか。

「やうだつたんだな。紅花は、俺の子供らしい」

俺は紅花の赤い頭に手を置いて、そつと撫でた。初めて触つたその頭は、とてもさらさらしていて俺のものより触り心地が良い気がする。紅花が自分の物ではなく俺の尻尾を触つていた理由は、こういうことなのだろう。

「あうー」

田の前で嬉しそうに揺れる尻尾を、俺はいつになく穏やかな気持で見つめていた。子持ちの親というものは、いつもこんな気分でいるのだろうか？ それは、とても幸せなことじやないか。

：イザナギがあのカグツチを愛し、イザナミさんがあのカグツチを大事に抱いていた事も、今では分かるような気がした。

子供って、よく分からない（後書き）

私、を使いつちやいましたね。親心つてやつです。これからどうなるかは分かりません。両方混ざつてしまつかも。

過保護親つてモノペかな（前書き）

今回短いですね…。何でこんなに描写がつまへ書けないんでしあう。
時間を掛けてじりとの有様です。

過保護親つてモンペかな

紅花は基本的に活発な子である。

結界の中にも十分元気なのだが、紅花は外に出るとさうに活動的になるのだ。結界の外に出した途端に、紅花はびゅんびゅんと地を走り、空を飛び回り始める。中身がまだ精神年齢の低い子供なのだから、動きたいという身体のうずきに抑えが利かないのは当然のことだが、しかしその身体能力は普通の子供どころかそこのらの生物を軽く凌駕している。さらに精神的未熟さに付随して、紅花はまだその力のコントロールすら未熟なことが問題だった。

例えば走り回っている時にうつかり小型の恐竜にぶつかりでもしたとしよう。おそらく恐竜はその衝撃で首の骨でも折れて、ぼっくりあっさり死んでしまうことだらう。そんなことになってしまったら、その恐竜はとりあえず食べることになるだらうが、それでも『うつかり、偶然』殺してしまった等という経験が紅花に悪い影響を与えるだらうことは想像に難くない。いや、俺は紅花がもしも何かの命を奪つてしまつた時に、彼女がそのことに何も感じないでいるかも知れない事を恐れているのかもしれない。俺自身がそうだったゆえに、そうなる可能性も十分にある。

だから俺は、紅花が結界の外に出ている時に彼女から田を離すことはない。

ただそんな時、俺はこう思うことが多い。俺じやない俺がもう一人欲しいと。

紅花を外に出した時は、大抵数体の式神を遊び相手兼護衛に付けて

いるため、意識の全てを紅花に向けることは出来ない。なぜなら、確かに式神はある程度自身で行動し、自身で思考することはできるが、その式神という術式を維持しているのは間違いなく俺だからだ。割かれる意識は「一体」とでは微々たる程度であるが、しかし間違いなく意識に隙はできる。式神を増やせば増やすほど手は増えるもの、しかしその分俺の思考能力は式神維持に割かれてゆく。そして、俺の情報処理能力とて馬鹿げた性能こそあるものの、決して無制限というわけではないのだ。

できるだけ外に出た時は、俺は紅花の自由にさせている。そもそも、厳しすぎる抑圧など子供にはストレスにしかならない。ならばガス抜きは必要であるし、適度に自由に走り回っている方が子供としてはとても健康的だ。しかし自由にさせる分、万が一の時のために紅花のサポートをする式神は多く必要になる。それだけ、紅花にも注意を向けなければならないはずの俺の隙は増えていくのだ。

紅花に集中する俺と、式神に集中する俺。もしも身体も思考も分けることが出来れば、その利便性は計り知れないだろう。今とて紅花の面倒に苦労はしているものの手に余っているわけではないが、もしもの事態が起つてしまつた時にこのままで大丈夫か?と思うことはままある。結局、紅花の世話がメインとなつてゐるため、その構想には着手できずにいたわけだが。

結界の中には俺の知る術式について教えていることが多い。核に負の気の特性を打ち込んだために偶発的に後付けされたのか、紅花は俺同様妖氣を放つていた。そのため、妖氣用の術式を教えることも無駄にはならない。紅花は術式についての知識も持つてはいるはずだが、全てを持っているわけではないし、そもそも

今の紅花に使えるものでもないだろ？。紅花に何かを学習させることが、紅花の思考力を養うためとでも言えばいいだろ？か。幼い頃に培われたものが後々に「」える影響も大きい。

ただ問題は、やはり子供な紅花には堪え性がないと言つたところか。やはり自由に元気に走り回ることが好きなのだろ？、俺が教えていてもどこか上の空で、身体がうずうずしていることは良くあることだ。だが、時には我慢することも大切だ。遊ぶ時は遊び、学ぶ時は学ぶ。食べる時は食べ、寝る時は寝る。俺とてそこまでキッチンとしているわけではないが、しかしこういうことは親として模範とならなければなるまい。将来紅花にだらけた娘になられると、きっと俺は後悔しても仕切れないだろ？。

うーん。俺つてなんか過保護だよなあ。

俺は式紙や式玉状態の式神を調整しながら、術式を刻んだ複数枚の式紙をしかめ面で睨んでいる紅花を横目で見ながら、そんな事を考えていた。

確かに俺は紅花には幸せでいてもらいたいし、いい娘に育つて欲しいとは思つてゐるが、ちょっと神経質にきちきちし過ぎてやしないか。ここにいる俺は本当に俺なのか、本氣で考えそうになる。しかし紅花を前にすると、やっぱり過保護な母親になってしまつ。本当の俺はもっとだらけていたはずなのだが。

「おかーさん、おかーさん」

と、隣で式紙を睨んでいた紅花が式玉をつづいていた俺に声を掛けた。

「『E』が分からないと『E』でもあつたか？」

「う、えと、あそば？」

紅花は少しおもひしながら、むずおずと口を開いてそつ言つた。
無意識か故意か上目遣いに俺を見ながらではあるが、残念ながら俺
にはそんなものは微塵も利かない。

俺は相も变らぬ動かぬ表情で紅花の持つ式紙を指差しながら言つた。

「それはもう出来たのか？ それが理解出来るのなら、構わない
が」

「え、つ・で、できた、よ？」

「せうか。じゃあ少しテストだ」

「え、つ」

「その式紙の2#84と332#3はどの部位を基盤として2￥4
5とリンクしてくる？ ついでに、これらの基点となつてこいる部位
も合わせて答へなさい。片方でも答えられたら、合格だ」

「え、あうー2#84い？ わ、わかんない・の…」

「その式紙の術式を理解していれば、式紙を見るだけで答えられる
よつなテストだぞ。紅花、遊びは、勉強が終わつてからだ。今回は
1￥から34\$22までだからな」

涙目になつてゐる紅花に、俺は無情に告げる。…別に勉強を急ぐ必
要などは無くゆつくりやつていけばいいのだが、しかしそれを甘や

かす口実に使つてはいけない。一度言つた事を、子供の我慢で折るようなことは絶対にしてはいけない。駄々で現状を変えられるなど覚えてしまえば、それはそれは碌な者になれないだろ。

「つうーつ・ワタシ、つかれた・の！ もう、あそびたい！」

…が、勉強の合間に休むことは必要か。適度な休憩は集中力持続のために必要なものだ。

紅花の言葉でそう思い、俺はその場から立ち上がった。

「紅花、私は少し出かけてくるから、いい子で留守番していなさい
「ワタシ・も、おかーさん、と、おそと・いく！ ワタシも・いき
たい！」

「駄目だ。今回は食べ物を探してくるだけだからな、ここで大人し
くしてなさい」

俺は置いてあつた式神の核のうち式玉を一つ抜き取り、式神を一體顯現させた。そして俺の尻尾にしがみつく紅花を靈体化しながらかわして、外に出ていった。この時俺は多大なミスをしていたのだが、気づいたのは事が終り、大事が始まつてしまつてからだった。

「おかーさん！ …うー。おかーさん…」

紅花は赤い瞳に涙を滲ませながら消えていくウカノを追いかけたが、その途中でウカノの式神に阻まれてしまつた。

「いけません」

ウカノの声や紅花の声に似てはいるものの、しかしその声は紅花は言つまでもなくウカノと比べてもとても無機質なものだった。紅花は濡れた眼を向けて式神を睨んだが、顔の上半分を隠す狐の仮面のせいだ式神の眼は見えず、そして下半分に見える口も少しも揺らいではいなかつた。

「おかーさん・と、ワタシ、おそと・いきたい！」

「ここで大人しく待たせるようにと、ウカノさまに申し付けられております」

涙声で訴えて、式神は欠片も引く様子は無い。そう、たとえ四肢千切れようと式神は命令を遂行するだろう。恐怖心などの負の面もあるとはいえ、柔軟性を持つ感情といえるようなものを、ウカノが持たせられなかつたためだ。

紅花にしてみれば、時には自分の遊び相手で、時には自分を邪魔する、そんなちぐはぐな相手だった。そして、今はもちろん自分の邪魔をする相手だ。

そもそも、紅花を遮るものは式神だけでなく、この周囲に張られた結界も同様である。ウカノが一緒の時ならすっと通れる薄膜のような結界も、紅花一人の時はまさに壁のようだった。式神も結界もウカノが紅花を心配するがゆえなのだが、紅花にとつてはどちらも自分の邪魔をするものである。

普段なら紅花も大人しくしているのだが、この日の紅花はある意味運悪く我慢の限界だった。身体がうずうずしてどうしようもない。早く外を掛けまわりたい。そんな思いが心の中で溢れんばかりにな

みなみと揺れていた。

「おかーさんの、ばか…いい・もん。ひとり、で、おそと・いく、の」

そう呟く紅花の田の先には、式紙や式玉、そしてウカノの置いて行つた式神がいた。紅花は何故か自分を邪魔する式神をなんとかできそうな、そんなおかしな感覚に突き動かされながら、式神にその小さな手を伸ばしていた。

なんだかまたえらく成長してますね。流暢にしゃべりだすまでもう少しでじょうか。

心の痛みとはそれをおひがが故である（前書き）

書きましたー。最近は特に東方とは何の関係もありませんね。申し訳ないです。この、空気読めないやつめー！とかはやめてくださいね。といひで つてよく使つてしまっています。便利ですね。

心の痛みとは危をおもひが故である

結界に紅花を置いて食べ物を探しに出た俺は、しかし十分も経たないうちに探索をやめ、結界のあつた場所へと全力で引き返していた。この時の俺は近年稀に見る焦りようだったろう。植物だろうが岩だろうがお構いなしに吹き飛ばし、元の場所へととにかく走る。望外予想外の出来事と結界の中にいたはずの紅花の安否にかきたてられ、他を気にしている余裕など無かつた。

つい先ほどのこと、あの場所に何万年も張っていた結界が破壊されたのだ。幾度となく改良し、張りなおしていたため綻びなどは決してない。しかし、仮に恐竜が大拳をなして体当たりしても破壊されないような結界は、『内側から』呆気なく破壊されてしまった。

実を言えば、あの結界は外側からの力に対してもそれこそ物理的にも馬鹿げた防御力を誇るが、しかし内側はそうではない。元々あの結界は外側からの干渉を遮断するために張ったためのもので、決して内側にいるものを捕らえるための結界ではないのだ。いや、今の紅花程度の力では破壊出来ないほどの代物ではある。だが仮に、俺の式神が八体ほどで攻撃すれば破壊出来るのではないだろうか。

そうだ。俺の結界を破壊したのは十体の俺の式神だった。

「やつぱり…！ 全部なくなつてるー。」

結界のあつたはずの場所は、地面がえぐれ術式の残滓も分からぬ

ほど惨憺たる光景となつてゐる。紅花も俺の式神もどこにもいなくなつていた。そして、置いたままにしてしまつておいた式紙や式玉も無くなつてしまつてゐる。

俺はその場を中心にして、感覚を外側全方位に向けて限界まで広げた。瞬間、頭に入る情報量も莫大なものとなる。それら全てを取捨選択し、紅花と式神の反応に意識を集中した。

本来なら俺の式神は常に俺とバスでつながつてゐる。それは俺が式神を維持するためであり、そして万が一の時のための安全装置でもある。どれだけ離れていようと、精度は落ちるもの、俺の能力の特性上俺には式神に対しある種の絶対権があった。たとえ他人が俺の式神を操つていたとしても、有事の際には俺がコントロールを奪えるようになつてゐるのだ。

しかし、今回俺の結界を内側から破壊した式神達は完全に俺の手から離れてしまつてゐた。紅花の世話を任せていたはずの式神からも、その反応は無い。そのコントロールどころか、もしものためのバスですらだ。こうなつてしまつては、一度近くまで接近し直接能力で奪い返さなければならぬ。

俺の感覚に引っかかつたのは、この場から高速で離れてゆく十体の式神、そしてそのうちの一體を追いかける紅花だつた。おかしなことに、十体の式神はそれぞれ別々の方向に動いており、まるで整合性が取れない。

「まさか、暴走しているのか？」

もともと俺が式神を作つた時から、億が一にでも何らかの形で暴走をしてしまつ可憜性は考慮していたため、バスをつないでいたのだ。

しかし、そのもじものためのパスも今は途切れてしまっている。このパスは何者かが術で奪えるようなちゃちなものではない。先も述べたように、俺には式神に対し能力による不条理な絶対権がある。もしもパスに干渉できる者がいるとすれば、それは俺と同様、同系統の不条理な能力を有している者に他ならない。

「くそ！ 完全に俺のミスだ…！」

そして、式神は基本的に受動的にしか動かない。暴走する時にしたって、誰かが一度発動させなければ暴走などするはずがない。結界の中にいたのは、俺の式神と紅花のみ。この式神も何者かに操作を奪われた事を考えると、やれる者は一人しかいない。

俺の誤算は二つ。一つは、結界を外側からの侵入がほぼ不可能だと推測していくことから、内側を考慮せず絶対のものと過信してしまったこと。もう一つは術式をまだろくに扱えないと思っていた紅花のそばに、式神の核たる式紙や式玉を放置してしまったこと。

紅花は、俺の情報をいくらかコピーした一個の存在なのだ。俺の能力もいくらか引き継いでいたとしても、不思議ではない。今式神が暴走させてしまったのも、この能力をうまく使えていないせいだろう。

紅花が式神を追いかけていると思われるのは、おそらく俺に叱られると思ったためだろうか。だが、今回の原因は俺の不注意だ。

「怪我などしてくれんなよ！ 紅花！」

式神を三体作り、散らばる式神のうち九体を追わせ、俺は紅花のいる方向へと全速力で飛んだ。行かせた式神には、どうにもならない

時は式神を破壊するよしにと指令を『え』てある。

暴走している以上、いつかは式神止まる。紅花からのコントロールも外れているはずなので、器を維持する事が出来なくなるはずだ。しかし、それでも放置することは出来なかつた。今回のこととは俺が原因ではあるが、少なくとも紅花も関わつてゐる。仮に取り逃がした式神が他に大きな影響を与えても、俺は紅花を責める気は微塵もないが、紅花が自分自身を責めてしまふかも知れない。それを、俺はどうしても避けたかつた。

その上、さうに悪いことに今回暴走している式神のうち数体には厄介な機能がついていた。

俺の式神には大まかに分けて二種類がある。半自律式神と、憑依式神である。本来はどちらかでしかないのだが、しかしその数体には試作として両方の機能を付与していたのだ。

憑依式神とは、ある種の拡張ソフトである。既存の存在と契約を結び、それに憑けることでパスをつなぐ。そして憑かれたものは、憑依式神によって本来の自身の能力が拡張される。簡単に言えば、より優秀に強力になるといつところだらうか。

恐竜に試した時は、相手に契約を結ぶほどの知能が無かつたために俺からの強制契約となつてしまつたが、得られた結果は大きかつた。知能もいくらか上がつたのか、俺に對して従順になり、そして他のどの恐竜よりも強くなつていた。…結局その時はその契約はすぐに破棄したのだが。どうせ、強制的に結んでしまつたものなのだ。相手の意思など関係なく。

さて、本来であれば俺が契約をしなければならず、憑依式神が能動的に何かに憑依するなどはありえないのだが、今度の、いわば半自

律憑依式神は違う。確証はないが、おそらくあれらは自身を仮主として対象に憑依する事が可能だ。その上暴走してしまっているために、もしも大型恐竜に強制憑依でもしてしまえば、被害は甚大なものとなるだろう。そして、今の紅花では式神憑依した恐竜には勝てない可能性が高い。実のところ、今回の半自律憑依式神とは式玉の式神達だ。式紙による憑依式神とはそれこそわけが違う。

しかし、とにかく俺が近くまで行ければ暴走していようが憑依していようが、強制的に止めることが出来る。俺が行くまで紅花が無事でいる事を願いながら、俺は飛ぶ速度をさらに速めた。

紅花は焦る鼓動を氣にもせず地上を疾走していた。目の先にいるのは自分と八割九分同じ姿をした、白い髪の少女である。紅花はその白い少女を追いかけていた。

結界にいた紅花が願ったのは、結界が無くなることだった。何かの理屈が、根拠があつたわけではなく、紅花は自然に式神に手を伸ばし、ひたすらにそれを願つた。

そしてその願いはすぐに叶う。式神達の暴走という形で。

紅花はまだ術式を自身で組み立てることは出来ない。式紙を介せばその式紙にある術を使えるかも知れないが、しかし式神はそれとはわけが違う。それでも紅花が式神に干渉することが出来たのは、紅花の持つ能力に理由があつた。

『式神を操る程度の能力』。

ウカノの持つ『式を司る程度の能力』と比べると、まるで汎用性に欠ける、むしろウカノの能力を劣化コピーさせたような代物かもしれないが、こと『式神』という分野においてはウカノに近い絶対権を持つていた。

だが、紅花が望んだのは漠然とした結果であり、明確なコントロールは最初から取らなかつた。そして紅花は能力の使い方も、そもそも能力を持っていることすら知らなかつた。それゆえ、顕現してい式神も、式紙や式玉状態だつた式神も、ウカノや紅花の操作から外れ、結果的に暴走したのだ。これは、紅花も、増してや式神達が意図したものでもない。本来ならば、誰からの命令も受けていない式神の機能は停止するはずなのだ。

今回の起動が無意識の紅花の能力が原因だつたために、中途半端な命令を受けた式神達は誰からの操作もないままに暴走してしまつた。ある意味、紅花の能力は優秀だつたとも言える。不完全な形で発動し、式神を『操る』ことは一瞬しか出来なかつたわけだが。

暴走を始めた式神達に対し、紅花は何も出来なかつた。

スペックならば紅花の方が確実に上なのだが、しかし機能性という面では、経験の足りない紅花ではただただ機械的な式神達には劣る。その上、一度に十体の暴走となると紅花には止められるはずもない。結果的に式神達は結界を滅茶苦茶に破壊すると、方々へと凄まじいスピードで勝手に走り去つてしまつた。

紅花は呆然としていたが、すぐに我に返り式神のうち一体の後を追いかけた。ウカノの結界を破壊し、そしてウカノの式神達を理由は分からぬがあちこちに散らしてしまつた。なので『おかーさんに叱られる。おかーさんがワタシを嫌いになっちゃう』、そう思った

のだ。もともと外に出る、という言いつけを破るようなことをしようとしていた紅花だが、これらのことはそのこと以上にまずいことだと、紅花は気づいていた。しかし紅花は何をすればいいか分からず、とにかく式神を追いかけることにしたのだ。

「まつて、あ、もと・もどつて…」

前を走る式神に必死に呼びかけるが、式神は無言のまま走り続け紅花に答える気配は全くない。紅花には、その後ろ姿がウカノの、母親のものと重なってしまった。だから、紅花は必死に追いかけた。ここで白い式神を見失えば、ウカノにも置いていかれるような気がしていたのだ。

「まつ・て…おいて、いか、ないで」

紅花は懸命に手を伸ばした。ウカノに生み出され、生まれてからウカノしか頼る相手のいない紅花にとつては、ウカノは自身の全てと言えよう。だからこそ、置いていかれることなど、それは紅花にとって死に等しいことだった。

「えう！？」

急に、前を疾駆していた無表情の少女が紅花の方を振り向いた。しかしそれは止まるためではなく、紅花にとつては最悪の展開だった。少女は、強く地を叩く音とともに紅花の方へと高速で方向転換したのだ。紅花はそれにすぐ反応できるはずもなく、迫る少女に対し何の防衛も出来なかつた。

物言わぬ少女の言葉は、紅花と同じ大きさのはずの小さな拳だった。しかし、見た目はただ脆そうなそれは、岩のような硬さを伴い凄ま

じいスピードで紅花の腹につき込まれる。スピードに乗っていたはずの紅花の身体は、その逆方向へと簡単に飛ばされた。

「あつ、あゆつ」

地に勢いよく倒れた紅花の口から、うめき声が漏れる。肺から一気に空気が押し出され、咽たのだ。

「い、たい…いたい・よう…」

お腹がちりりと熱さを帯びてゆき、そして身体の中までさきと痛んでいく。痛みというものを初めて知った紅花は、感覚を支配してゆくそれに、ただお腹を押さえることしか出来ない。その視界も、何かをこみ上げるとともに涙で歪んでいた。

「\$￥　?&a m p;-\$#」

「ひつー めかー・せん…おかーせんー」

ぎしづと、何かが地を踏む音とともに、そんなわけの分からない、言葉なのか音なのかも分からないものが聞こえ、紅花は身を竦ませた。恐怖が全身を支配し、そこから動くこともままならない。紅花にできたのは必死に母親を呼ぶことだった。

「…？」

目を閉じ震えていた紅花は、何も起きたことに首をかしげた。と、それからいくばくもしないつむじ、地面が微かに揺れる。だんだんとその揺れは大きくなつてゆき、ついに『ずしん』という音が紅花の間近で聞こえた。その音は、間違いなく何かとても重いもの

が紅花の近くにやつてきた事を示している。

紅花はびくつと身体を震わせ、恐る恐る顔を上げた。

「…………」

「！？？？」

顔を上げた紅花の目の前にいたのは、紅花の数倍の巨体を持つ巨大な生物だった。全身を重厚な皮膚が覆い、凶悪な外見の一一本の足が地を踏みしめている。四肢には鋭い爪があり、突き出した顔には割けた口が、何本もの歯があつた。そして、冷たく縦に割れた瞳がじっと紅花を見つめている。

それは、式神に憑依された恐竜だった。

今の式神には明確な思考は存在しない。ただただ、『結界を破壊する』といつ命令、いや存在意義に動かされていた。

紅花を攻撃したのは、自身を追う者を邪魔をする者と判断したためだ。近くを通つた恐竜に憑依したのも、排除に最も確実な方法を選んだだけだった。

片や無感情で自動的で機械的。片や苦痛と恐怖と絶望。

半自律式神と、完全自律式神である紅花には、それほどの隔たりがあつた。

「…………」

恐竜は一声吠えるとがばつと口を大きく開き、目にも止まらぬ速さで紅花へと迫つた。牙の一本一本が唾液でてらてらと光り、口の端からびちびちと唾液が飛び散る。一瞬の光景だったが、それらが紅花にははつきりと見えていた。それと同時に紅花の身体が完全に硬直する。先の恐怖など比べ物にならない脅威が、殺意じみたものを撒き散らし迫り来ているのだ。

その瞬間、紅花の見る世界がとてもゆっくりとしたものに変わる。この時の紅花の頭にあつたのは、未知への恐怖と、ウカノの言いつけを破つてしまつた後悔だつた。

そして

轟と、その全てが鈍速の世界において、巨大な瓢箪が紅花の頭を食いちぎろうとした恐竜の巨躯を凄まじい勢いで薙ぎ払った。

恐竜の姿は紅花の視界から擦き消え、余波が周囲の木々をさわざわと鳴らす。紅花は田まぐるしく変化していく光景に対応できず、ぱくぱくと口を開閉させた。

「紅花」

俺は空っぽの表情で膝をついている紅花に走りよった。紅花も俺に気づいたのかよろよろと立ち上がり俺の方へと歩いてくる。紅花の腹部の様子がおかしい。やけに体温が上昇している。それはつまり紅花が何らかの怪我を負ったということだろう。

間に合わなかつた、そんな言葉が、俺の頭の中でめぐる。確かに、紅花は死んではいない。だが、身体にも精神にも傷を負わせて間に合つた等と言えるか？　いいや、言えるはずがない。

俺の不注意で、紅花に傷をつけてしまつた。正直、悔やんでも悔やみきれない。

と、紅花は俺の手前で立ち止まると、俺から顔をそらすように少しだけ顔を俯かせた。その口は小さく動いている気が、俺にはした。紅花にさらに近づくと、俺の耳に小さな声が聞こえた。

「……ご・めん、なさい。ごめん、なさい、ごめんなさい」

次の瞬間にこは、俺は紅花の小さな身体を抱き締めていた。

「ごめん。ごめんな、紅花。俺が、悪かったんだ」

ふるふると震える身体を、ぎゅうっと抱える。溢れだしそうな紅花の心を安心させるように、包むように。

徐々に紅花の謝る声は小さくなつてゆき、代わりに喉の奥から漏れだす嗚咽が大きくなつていぐ。紅花もぎゅうと俺の身体をつかんだ。

「う、う――――――うああああああああああああああああああ

あああん！――！」

「大丈夫だから、もう大丈夫だからな」

とうとう大きな声で泣き出した紅花を、俺はただただ申しわけなくて、ただただ愛おしくて、抱きしめ続けた。少しほつれてしまつた髪を撫で付けるように撫でる。俺の服は紅花の涙でどんどん濡れていつたが、少しも気にはならなかつた。いや、むしろそれほど泣いている紅花のことが気になつていた。

少しでも早く、また紅花が笑えるように、また紅花の笑顔が見られるように、俺は少しだけ俺よりも低い小さな赤い頭を撫で続けていた。

心の痛みとは何をおかがが故である（後書き）

他の式神は程なく機能を停止したり追跡者に破壊されたりしてます。
それと、恐竜は後々で美味しくいただきました。

恐竜はあつせつフードアウト（前書き）

今回はつなぎみたいな回です。特に何もありません。人間とのファーストコンタクトももう少し先ですね。時間はめっさ飛んでます。いつまでも恐竜やつても仕方ないので。ただしこれの欠点は、紅花を成長させなきゃいけないんですよね。

紅花が能力を初めて使つたときから、紅花の成長は加速していった。その時以来あまり俺の側から離れようとはしなかつたが、俺も紅花を一人にするのは出来るだけ避けるようにしてていたので、問題のあることではない。時が経つにつれて、紅花の話す言葉もずいぶんと流暢なものになつてゐる。

特に変わつたのは、式神についてよく聞くよつになつたことだろうか。相変わらず、普通の術式に関しては苦手のようだつたが、こと式神においては理屈を越えて紅花は優秀だつた。基本は出来ないのに応用は感覚で理解できる天才、といつたところだらうか。自分の意識を集中させれば、同時に十数体の式神を維持出来るよつになつてゐる。

ただ、一度こう聞かれた時はどう答えるかとても困つた。

「ワタシと、式神たちと、どう・ちがうの？」

おそらく、優秀であるがゆえに自分で自身と式神の関係に気づいたのだろう。紅花も式神もその本質は同じものなのだ。だが、決定的に違うものが、両者の間にはある。

「紅花が紅花としての個を持つてゐること。それが、紅花と式神達との違いだらうな。式神は主体性を持たないんだ。いや、持つことが出来ない。いくら自身である程度判断する思考力を持たせようと、それはあくまでバックで主がいるからこそだ。式神は、自分で自分に命令を下すことが出来ないのさ」

「よく、わかんない」

「うーん……、式神は使うモノがいてよつやくその役目を果たせる『人形』、というところか。言い方はあまりよろしくないがな。つまり、俺達が使わなければ式神は自分がいる意味を無くしてしまう、存在している意味を無くしてしまうんだ。だが、紅花は自分が望むことで、自分の意思でここにいる」

銃は撃つために、傘は差すために、靴は履くために。それぞれが意図をもつて作られ、そしてそれに沿つて使われる。使われることがなくなつてしまえば、それらは在る意味を無くしてしまう。それらに、自分で自分を使つことなどできないのだ。

なら式神は？

「式神の存在意義は、誰かの命令を受けて行動すること。紅花と違つて、誰かにその存在を証明してもらわなければならない。だから、式神を独りだけにしては駄目なんだ。紅花、式神を顕現させている時に式神とのつながりを絶つことは、絶対にしたら駄目だぞ。存在意義を失つたものがどうなるか、もう、分かつてゐよな？」

あの時のこと引き合いに出すことば、卑怯だ。しかし、これは紅花が式神達を使う上で絶対に知つていて欲しいことだつた。

元々、話し相手が欲しくて作ったのが式神だ。しかし、彼女達に紅花のような自己を持たせることは出来なかつたため、今ではその在り方もずいぶんと変わつてゐる。紅花を作り、それでも俺が彼女達を使うのは俺にとつて必要な存在だからだ。俺は式神達を道具だと考へてゐる。しかし、だから積極的に顕現させ使つてゐる。それが俺にとつての、式神を使う上での責任だと考えていた。

紅花が式神に対してもう感じるかは彼女自身の問題だ。だが、意思ある者は道具《力》を使う時はそれに対し何らかの責任を負わなければならぬ。それが、最低限俺が紅花に理解していく欲しいことだ。

「よく、わかんない・の。でも、わかつたよ、おかあさん」

俺の言うただただ難しい事を、紅花は眉根を寄せて聞いていたが、やがて顔を上げて俺の顔を見つめ、そう言った。必死で考えて、出した答えはきっと感覚的なものなのだろう。だが、俺はそれでもよかつた。紅花が、自分の在り方に迷うことではないと確信したからだ。紅花を俺の子供だと感じた時から、ずっと気がかりだつた。紅花が式神と自分のいくつもの共通点に気づいたとき、それをどう思うのが、ということを。

しかし、やつと肩の荷が降りた気がする。

そういうえば、実は世界から恐竜が絶滅してしまつた。原因は、ある時地球に激突した直径数キロの警級隕石である。凄まじい速度で迫つていたそれも、物体が大きすぎるゆえに目ではとてもゆっくりしたものだつた。しかしその影響は尋常ではなく、余波で地球を覆いつくしてしまつたほどだ。

俺は早い段階に察知していたため、いつかのように強力な結界を張つて紅花と引きこもつていた。

巻き上がつた塵は空を覆いつくし、いくつもの粒が地上に降り注ぎ、隕石直撃を生き延びたものも環境の変化に耐え切れずばたばたと死んでいった。俺は式紙をいくつも飛ばし中継していたのだが、それ

はまさに地獄絵図と言えよう。実際に地獄を知っている俺が言うのだから、間違いない。

つまり、その急な変革で次々に倒れていったのが恐竜だったのだ。さすが爬虫類と言わざるをえない。

恐らく、これを生き残り進化するもの達が次の地上の覇者になるのだろう。このまま、後世に知られるとおりに進むのならば、人間が恐竜に台頭するようになるのだろうが、そんなのは恐竜が滅んで6000万年は経つてからのことだ。

俺も正確に時を計測していたわけではなかつたが、チンパンジーとヒトがわかれ始めるのにそれぐらいかかつたように思う。彼らは他の動物と違いいち早く道具を有効的に使い始め、そしてそれに適した状態にどんどん進化していった。ちなみに、つい最近久しぶりにヒトに襲われてなんとなく感動したところだ。懐かしすぎる。結局力関係的には俺の方が何倍も上だつたので、逆に追い散らすことになつたのだが。どうやら同じ人型をしていても、俺は彼らには尻尾や耳で異属と認識されたらしい。

「おかあさん。さつきなんだか、ワタシたちとそつくり、なのを見たよ？」

引きこもつていた結界から出て、俺達は安住の地を求めて各地を旅していた。場所を変えるたびに、俺の目に映る猿人は進化していく。そしてある時俺の隣を歩いていた紅花がそう言つた。

「尻尾は？ あつたか？」

「んーん、なかつたの。あの、ナマモノたちは、なになの？」

紅花はもつふもふの尻尾をゆらしながら、首を振った。そう、昔は尻尾が一本しかなかつた紅花も既に九尾へと変じている。ただ、俺と同じように尻尾が靈体化することは恐らくないだろう。なんとかくそんな気がする。力もそれに合わせて大きくなり、能力の使い方も俺と遜色の無いレベルに近づいてる。ただ何故かまだ言葉が物足りず、長文を口にすることはあまりない。俺以外の誰かと話す機会があれば、いつか改善されるかもしれないが。今はまともな話し相手が俺しかいないのだ。

「今まで、サルは時々見ていただろう？　あれらが変化、進化してゆくと、俺達そつくりになる。『人間』、とこの先呼ばれるものだ。紅花が生まれる前にはずいぶんと発展してたぞ？　地上一帯破壊して月に逃げてつたけどな」

「ああ、アレを思い出すと恵々しくなるな。永琳を思い出して和もう。」

「ワタシたちとは、違う、いきものなの？」

「そうだな。似てはいてもまったく違うものだ。俺や紅花は、…そうだな、『妖怪』が一番あてはまるかな。少なくとも、『人間』とは本質的に相容れない存在だ。あるいは共存出来るのかもしねないが、共感は出来ないよ。絶対にね」

人間がでてきたのなら、直に本丸の妖怪達も姿を現すだろう。いや、もういるのかもしねない。何せ、人間にとつてこの世界は未知に溢れているのだ。

「…おかあさんの、言つては、いつもむつかしい」

「難しい方が、紅花は頭を使つことになるだろ？ 使えば使うほど、頭も成長していくものだ」

「ワタシも、おかあさんみたいに、なれる？」

「なれるさ、紅花ならな。まあ俺と違つて淑女になつて欲しいがな。俺は今更そんなものにならうといつ氣は起きない」

今では紅花と俺の体格はまるで同じものになつてている。手を俺の頭ぐらいいの位置に持つていかないと、頭を撫でられないのなんとか寂しい。

外見だけ見れば紅花と俺はそつくりに見えるだろ？ が、しかし実際はまったく違う。髪の色は違うし、服のデザイン、色も違う。俺は相変わらずの無表情だが、紅花は俺と違ひ表情豊かだ。腰についている尻尾の色も違えば、数も違う。紅花は普段から九本だが、俺は七本を擬態し一本だけ出している。

さすがに九本もあると邪魔にならないんだろうか、尻尾。

「人間があの形になり始めたつてことは、住む場所も急いだ方がいいな…」

「どうして？」

「あと数百万年もすれば、連中はこの地上に偏在する種族になる。版図を広げられる前に、俺達の領域は少なくとも確保しておきたいや。」

「でも、たまをひとつなげたら、にげていった、よ?」

「「ひー！ 僕達と似てるからって、そんなことしけやいけませんー！」

「「ひー！ めんなさい… でも、にんげんは、よわいよ？」

「人間の強みは、並外れた向上心とほこの増えていく繁殖力、そして適応力だ。力が弱いからこそその能力だらうな。それに、ごく稀に強い人間も生まれるはずだ。…まあ、そういう存在は異種族に牙を剥ぐ前に同種族の人間に潰されるだらうがな」

スサノオやツクヨミも、確かにそうして捨てられたと聞いている。それでいて都市のトップに立てたのは、バックにイザナギがいたことと、明確な力を知らしめられるほど成長できたからだ。不確かな力ほど恐いものはないだらうからな。

「どうして？ 同じにんげんなのに？」

「それこそ、弱いからだ。人間に限つた話じゃない。出る杭は打たれるといったところか、同じ杭でも、突出していればそれは違う存在に見えるらしいな」

はて、人間だつた時、俺は弱いから強くなろうとしたんだっけか。もう昔のこと過ぎてほとんど覚えてやしない。一応名前は忘れてないんだがな。

「ふーん。へん、なの」

「…そうだな。しかもな。だが紅花、否定してはいけないぞ。俺達がこうこうナマモノであるように、彼らはそういう生き物なんだ。

彼らを否定すれば、それは俺達を否定するも同然だ。違うのは、当たり前のことだからな

またもいちいち難しい事を選んで言つ俺の言葉に、紅花は眉根を寄せた。あの時から、紅花の向上心は強くなっている。紅花は、自分がわからない事に対しても『理解しようとする努力』を怠らない。それが今の紅花の強みだ。

「そういうえば、おかあさん。どうづ、ばしょ、さがしているの？」

「ん？ そうだな、見晴らしや景色が良く、縁があつて、それから肥沃な土壤の土地がいい。そうそう見つかるわけじゃないが、だからこそ選ぶのは楽しいし見つけた時の感動は大きいだろ」

酒は酒虫が造つてくれるが、食物はそつはいかない。別に自然にあるものを獲つてもいいが、折角なら安定した収穫をしたいものだ。うーん、畑が形になつたら近くには無い新しい作物を探しに行くのもいいな…夢が膨らむ。

数百年の後、俺達は条件に合う小高い山を見つけ、その頂上に陣取つた。当初の予定通り、和風の屋敷を建ててだ。俺と紅花の式神を使つたので、建築はすぐに終わつた。ちなみに、山の周囲を散策してみたがまだ人間はおらず、様々な動物は住んでいるが妖怪もいなかつた。

この世代の人間とともにに出会つことになるのも、それからずいぶんと経つてからのことだった。

恐竜はあつせいフロードアウト（後書き）

ちなみに狐の特技はあと二つ出す予定です。某种程度の能力つてわけ
じゃありませんが。

一つは仄めかせてた分霊ですかね。某人柱力の多重影分身みたいな
あれより高度であれより利便性に大きく劣る代物ですが。あれはチ
ートすぎます。

食べ物の妖怪（前書き）

ようやく狐無双のターン。でも戦わない。

まともな人間との絡みつて、これが初めてじゃないでしょうか。人間が普通過ぎてうまく書けない。笑笑

この山に来て随分経つた頃、世界では縄文時代の終り辺りだったようだ。各地に集落が増え始め、稻作が始まっている。石器などはただ不便そうで脆いものから、質実剛健のものへと。そして狩りや採集も前ほどは行われなくなつた。

また、外に目を向けるようになつたのか他集落同士の戦争も流行っているようだ。多分そのうち、クニーにでもなるんぢやないだらうか。

俺もその波に乗り、山の上だけでは飽きたらズ麓に水田を始め様々な烟を作つた。時折山の屋敷から遠くへと旅をし、その度に新しい何かを見つけてくることは俺の楽しみと化している。世話は俺や紅花が直接することもあるが、大体は式神に任せていた。ちなみに、俺が世話をする時は神氣を振りまいている。何故か知らないがその方が発育がいいのだ。その分俺は樂をさせてもらつたのだが、しかし途中でまずいことに気がついた。式神に任せていることが多かつたために気づかなかつたが、自分達が消費する以上のものを作つてしまつていたのだ。仕方がないので、余つたものはとあるところに貯蔵してあるが、烟を削減するのも少し勿体なく、過剰にある田畠を俺はどうしようかと迷つっていた。

さて、そこいら一帯の開墾に調子に乗りすぎて、そうして少し困ついた頃だ。俺は屋敷の方で昼飯を作つていた。毎日食べる必要はないのだが、紅花は何かを食べることが好きなので俺達は定期的に食

事を摑つていい。俺もたまに一日中何かを食べていることもあるが、そういう時は酒の方がメインだ。

人参やたまねぎを親の敵の「」とく切り刻んでいると、紅花が少し困つた顔でやってきた。

「おかあさん、にんげんがちかくまで、きてるみたいなの」

「ふーん。とうとうこの辺りにも来たか。ま、遅かったぐらいだな。ほつといてもいいだな」

「でも、はだけに、びりびりしててみたいなの」

「何だと？」

「いま、ワタシの式神が、とめてるの。でもひとり、つよこにんげん、いるの」

「今畠の方で見張りしてるのは、どの式神だけ。それから何体で相手してるんだ？ ついでに、人間は全部で何人ほど？」

「しろいろ、ひとりなの。にんげんは、えと、さんじゅうぐらい、いるみたいなの」

いちいち式紙式玉の式神というのが面倒になつた俺は、それぞれに呼称をつけた。式紙のものが白色しらいろ、式玉のものが朱色あかいろである。一応バージョンアップは終わつており、白色には三尾、朱色には五尾がついている。とは言つても、俺が三尾や五尾の時の力と比べると確実に力は小さいのだが。

しかし、白色一体とはいえ人間が相手を出来るとは驚きだ。そこの

らの妖怪に負けない程度の力は持つているはずなんだが。
それにしても。

「三十人…？ どういう大所帯だ…、もしかして泥棒じゃなくて土地の略奪に来たんじゃないのか？ いや、土地の所有権を声高に主張するつもりはないが、少なくとも俺達の作った田畠なんだがなあ

「あ…。しろいろ、やられちゃった…。このにんげん、つよいの」

「…俺が行くわ。連中が何しに来たのかも分からんしな」

「わかったの。あ、おかあさん、ワタシはどひよひつ。」

「昼飯作つといてくれ。今日はみんな大好きハンバーグがメインだからな」

「わあい。わかったの」

ウカノの領域にやつてきた人間三十一人。

誰もが疲れた顔をしていたが、今はその中に希望を宿している。

彼らは、元いた場所を追い出された者達だった。この時代でもそう珍しくはない、里同士の戦争。満ち足りた生を手に入れられると、むしろさらなる欲に走るのが人間の性というものだ。しかし、彼らはその被害者と言つていい。小さな里で細々と暮らしているところにやつてきたのは、大きな里からの略奪者達だった。純粹な物量差

で勝てるわけもなく、被害を甚大に出しながら彼らは自分達の土地から逃げ出した。

逃げ出した当時は五十人ほど、しかし、この人数が移動するなど楽なことではない。外敵疲労飢餓疾病、様々な要因により徐々に一人二人と数を減らし、既に二十人が生存競争から脱落してしまった。残つた者達も疲労困憊し、次々と病にかかるつてゆく。もうだめか、そう思われた時彼らは楽園を見つけた。

見たこともない多種多様の野菜、色とりどりの果物、そしてまだ遠方の一部でしか作られていないされている稻が、ここには広大な地でもつて植わっていた。

類がこけた一人の男が、恐る恐る赤い実に手を伸ばしもぎ取ると、口へ運んだ。普通ならば警戒して食べないようなそれも、飢餓にも脱水にもなりそうな彼にとっては、何かを食べること自体がそれ以上に急務だった。

そして、他の人々も「ぐくりとつばを飲み込み男を見守つていた。

「びやあああああああうまいいいいいいい

赤い実を食べた男が枯れた喉でそう吠えるとともに、それを見守つていた人々がその赤い実へと群がつた。あまりの空腹に、そこが誰かに整理された畑であることも気づかない。

「危ない！」

実際に群がつた人々を止めたのは一人の少女、それと同時にいくつもの力弾が地面に着弾した。幸い少女の対抗弾幕が間に合い、怪我人はいない。

見た目は幼いが、ある意味彼らの命綱はこの少女だった。道中の外敵からの襲撃を、多少の犠牲で切り抜けられたのも彼女がいたからなのだ。何の訓練などもしたことがない、天然の強者である。彼女は種族人間よりも強い、いわゆる人間の突然変異だった。それでも里を守れなかつたのは、純粹に数の差だが。

子供、ということもあるが、その理由から彼女はみなより優先されて食料を回されていたので俊敏に動くことが出来る。

力弾を撃たれた人々をかばうような位置に彼女が立つた時に、その彼女の前にさらに幼い少女が空から降りたつた。顔は狐のような仮面で隠しているので見ることが出来ないが、身体は人間そのものに見える。しかし、その腰には三本の真っ白な尻尾があつた。

「妖怪！？ ここはこの妖怪の縄張りなの！？」

「て、テケ！ 大丈夫なのか！？」

「大丈夫です！ 相手は一人ですし、それに勝たないとみんなが下がついてください、すぐに終わらせます！」

テケと呼ばれた少女は、紅白の装束を着た妖怪の後ろにある色とりどりの作物に目を向け、心配そうに声を掛けた人々に力強い言葉を返した。そして少しも動かない白い妖怪へと飛び掛る。

戦いは、熾烈を極めた。この白い妖怪は、今までテケが相手をしたどの妖怪よりも手強かつた。力云々の優劣ではない。とにかく戦い方が正確無比な、厄介な相手だった。

いくつもの弾幕が飛び交い、幾度となく両者の拳が交差する。テケとて幼いとはいえ、強者として弱いものを守り続けた戦士である。

仲間である人々は、人間としては珍しく異物とされるテケを仲間だと認めていた。だからこそ、テケも人々を全力で外敵から守る。

戦いはテケが優勢だつたが、テケは時間が経つにつれ疲労に見舞われてゆき、しかし反対に妖怪は少しも疲れを見せない。

双方の衣服は衝突と時間を重ねていく毎にぼろぼろのものになつていつた。人々はその様をつばを飲み込み見守つてはいる。テケが負ければ、人々が目の前の楽園に届くことはないだろう。戦うことも出来ないほどに入々の身体は疲労し、そして精神すらも憔悴していたのだ。

果たして、最後に競り勝つたのはテケの方だった。

疲労で完全に力を下回る前に、彼女は渾身の靈弾を白い妖怪に当たるのである。途端、妖怪は人々の前でふつと跡形も消えてしまう。人々は歓喜の声を上げ、テケを取り囲んだ。そして生きる活気とともに、赤い実へと手を伸ばす。

と、そこでテケはまたしても人々に待つてと叫んだ。

その視線の先には、またしても真っ白な獸耳と一本の尻尾を持つ一人の少女のような妖怪。先の者とは違ひ顔を隠しておらず、美しい顔を無表情で固めていた。テケと同じほどの身長で、そのほぼ同じ位置にある一つの瞳は金色に光りテケと人々を見据えていた。

「よお。俺の畠に何か用か？ 盜人共」

容貌に違わぬ綺麗な声が妖怪の口から漏れるが、その口調は彼女のどこにも似合わず粗暴なものだった。

テケは一番手の妖怪に対し、危機感を覚える。

尻尾の数は劣るのに、こちらの方が強い。

テケの経験には合致しないものだつた。テケが戦つたことがあるのは尻尾が1～2本のものである。そして、尻尾の数は先刻戦つた三本の妖怪が最高だつた。尻尾が多いものの方が強い、今まででは確かにそうだつたのだ。

疲労に肩を大きく動かしていたテケに変わり、人々が奮起する。手の届きそうな楽園に元気を取り戻し、そしてテケの奮闘に触発された特に若者を中心に、人々がめいめいの得物を手に前に出た。

「ここで退いてたまるか！ 今度は俺達で妖怪をやつつけるぞ！」

『応！』

「あ、危ないですよ！ みんなやめてください！」

「いつまでもテケ一人にはまかせてられないさ。大丈夫だ、相手は妖怪とはいえ小娘一人、こつちは三十人はいるんだぞ」

「よ、妖怪を見た目で判断しては…！ 私も戦います！」

「すまない…」

フラグたくさんのお会話を黙つて聞いていた妖怪に向き直ると、妖怪は首をかしげてまた口を開いた。

「なあ。俺は『何用か』と聞いたんだがな。俺の質問は無視か？」

その口調はとてもんびりしたもので、言葉は粗暴でも無視されることに対する怒りなどはなかつた。純粹に彼女は人々に対して疑問

を呈して云ふ。

それに対し、若者勢が敵意をもつて返そうとした時。

「待て、お前達」

と、人々の間から一人の老人が姿を現した。

白いひげをたくわえた、往年の男である。この時代においてこれほどの長生きをするものは珍しい。それも、これまでの辛い道程すら耐え切つたのだから、なおさらだ。

老人は妖怪を目の前にして臆さずに答えた。

「我らは、元々は遠くの小さな集落に住んでいたのですが、戦いで土地を追われ、安住の地を求めて旅していたのです。ですが、見ての通りもう食料もなく、我々の体力も限界に近い。名も知らぬ妖怪の方、願わくば、食料を少しでも分けて欲しいのです」

「ふーん。それでここのは實を勝手に食つたと」

「それは、申し訳ございません。ここのは物が誰かの物とは存じ上げませんでしたので…」

どちらもそういう氣質なのかのんびりと会話していると、業を煮やしたのか若者勢がまた騒ぎ出した。そもそも、彼らももう限界の状態なのだ。続く飢餓状態の中、いつまでもたくさん食べ物を前にお預けを喰らつていられるはずがない。

「長老！ この妖怪はここのは食べ物を独り占めして、来て食べようとする者を困らせて云々だ！ 俺達の手で、ここを勝ち取りましょー！ 行くぞみんな！」

応と、再び答えた若者達は老人やテケが止めるも聞かず、妖怪へと足を踏み出した。人々の様子をただ見ているだけだった妖怪は、そこで初めて動く。

それは、袖が広く手の先も見えない服の両腕を横に掲げただけの動作だったが、間も置かずその広い袖が『ごぼり』と揺らめいた。次の瞬間、『どばつ』と薄っぺらいものがその袖から大量に飛び出し、一つの生き物のように集合して宙を泳いだ。そして弧を描きながら人々の周りを取り囲む。老人もテケも若者もその光景に呆気にとられ、足を止めていた。

そして薄っぺらいものは次々に発光し、光が辺り一帯を覆い尽くす。人々はそのあまりの眩しさに思わず目を閉じていたが、光が止み恐る恐る目を開いた時には逆に限界まで目を見開き言葉を失った。

『
…』

「う、嘘…」

テケの口から、かすれた声が漏れる。

それも当然か、光が止んだ後に現れたのは、自分が必死になつて倒した仮面をつけた三尾の妖怪だったのだから。それと同じ姿をした妖怪が自分達をゆうに上回る数で取り囲んでいたのだ。

「血氣盛んなのはいいがな、人間。それでは早死にするぞ。そもそも独り占めも何も、自分達の作った物の所有権を主張して、何が悪い」

人々も、三尾の妖怪達も一言もしゃべらない。前者は驚愕と絶望で、後者は純粹な無口。百近い人型がいるその場が不気味に静まり返っている中、二尾の妖怪の声だけが無情に響く。

そして、その沈黙の中最初に動いたのは長老だった。彼は頭を下げながら、ほぼ地に伏した格好で声を上げる。

「申し訳ございません！ 彼らはまだ若輩、彼らを止められなかつた私に責任があります！ お怒りはごもっとものこと、ですがどうか、どうかお許しください！」

既に食料だのなんだの言つている問題ではなくなつていて。少なくとも、彼ら人間からすればその通りだつた。相手の領域で、圧倒的戦力を持つ者に喧嘩を売つてしまつたのだから、当然か。

長老は長く生きてきた中でも、人間の中で自分以上に長生きしているものを知らない。ゆえに、彼には最年長としての矜持があつた。自身よりも若いものを導く、それに従い、彼は長らく人々をまとめてきた。

だからこそ、彼は自身で責を背負い妖怪に頭を下げていた。それが、みんなの先頭に立つ者としての責務と考えていたからだ。

ただ謝罪を受け取る妖怪、ウカノとしてはどうでもいいことだつた。白色を倒されたことも、勝手に作物を食べられたことも、自身に得物を向けられたことも、人間と違い果てしない時を生きてきた彼女にしてみれば、これらることは取るに足らないことだと感じていたのだ。白色は死んだわけではないし、作物を少し盗られたところで自身にさしたる痛痒はない。そして人間に攻撃されたところで、毛ほどの傷も受けることはないのだ。

そもそも、この大所帯で移動し食物を食らつた理由の所在を聞きたかつただけで、ウカノに人間を攻撃する意思はない。そして既に理由は聞いているので、『まあいいか』程度に考えていた。

式神を大量放出したのも、身の程を知らない者に立場を理解させようとしただけのことだつた。その効果は観面だつたが、ウカノにと

つては予想以上の成果を見せる。

困ったなど、土下座する老人を前にウカノは思案していたが、急に顔をあげると老人に向かってこいつ言った。

「いいや」

「は？」

「！」にあるものは、好きに食べていって構わない。ただし、その後である山の頂上まで來い。別に全員じゃなくていいぞ、お前達のうちの代表者だけでもな。じゃあな」

「…………え、あの！？」

人々の前で彼女は自分の住む山の頂上を指差し、そして来た時同様そこに向かって空へと飛び上がった。同時に、人々を囲んでいた妖怪たちは次々にうすべらい物に変わり、彼女の袖へと出てきた時と同じように「ぼじぼじ」と吸い込まれてゆく。

人々はその様を呆然と眺め、長老が我に返り声を上げた時には既に妖怪の姿は見えなくなっていた。

「ただいまー」

「あ、おかえりなさい、おかあさん。はんばあぐ、できたの」

「だから帰つて来た。いい匂いだな、早速食べるか」

「うん！」

こんな飛び飛びでいいのかな。でもだらだらせりつても飽きるので、このペースで行きますけど。

食べ物の神様（前書き）

そして重要でも無こよひな気がするので、やつやつやつてこあましよつ。結構ひけらかになつてきましたので、更新亀になるかも知れません。

「意見等もよろしければば」遠慮なべじつ。がくがるしながり待つてます。

残された人々はしばらく呆然としていたが、やがてぼそぼそと相談し始めた。ぼそぼそこつそりする必要などないのだが、彼らの戸惑いを示しているといえよう。話し合いはなかなかまとまらず、食物を前に手を出せない状況が続く。それが白い妖怪の残していくた多大な影響だった。『食べても構わない』と言われても、どうしても警戒が先に立つてしまうほどの力を示していったのだ。

しかし、十数分ただただ話し合っていた彼らも、結局色々と/or>の食物で腹を満たすことになる。

『お腹すいた』。小さな子供の一言が、彼らの我慢を解いた。そう、恐れでなかなか手を出せなかつたものの、彼らも我慢をしていたのだ。三十二人が固まり、そろそろとたくさん生つた赤い実へと手を伸ばす。もぎ取り、みながゆっくりと食べ始め、それはだんだんと速くなつていった。

「こんな美味しいものは食べたことがない」

実を食べた人々の感想は、その一言に尽きる。

その実の元々の味もさることながら、彼らの知らない、未来の技術で培われた作物。さらにウカノの神氣で育つたものが、美味しいわけがない。

その上、食べれば食べた端から失つていた体力が戻り、それとともに元気をも取り戻していく。病人に食べさせれば、その状態もみると見る良くなつてゆく。

小さいなれど、それはまさに奇跡だった。ウカノ自身は、デジタル思考ゆえに自分の神氣の本質には気づいていなかつたが、神とは元来人にとって奇跡を起こすものである。その力に、理屈は存在しない。

一度食べてからは、彼らの行動は早かつた。他の実にも手を伸ばし、子供や病人、体力の少ないものから順番に食べさせていった。もちろん、ここに煙には全員がたらふく食べてもまだ余りある作物が実っている。この時代の人間が小食であることもあるが、それぞれの実が丸々と肥えていたということもある。まさに、神氣恐るべし。

三十一人、全員が腹を膨らまし、満足した頃、新たな話が持ち上がる。

自分達に食べ物を恵んだ白い妖怪のことである。妖怪が煙を、それも自分達ですら不可能なほど整然としたこれらを、作ることが出来るだろうか？

そもそも、彼女は妖怪なのか。そんな話まで出る始末である。しかし、そう思うのも無理はないかもしれない。彼らにとつて、妖怪とは人間に危害を加えるものである。長老が頭を下げたのも、本当なら無駄に近かつた。話の通じる者と判断した上で、苦肉の策だつたのだ。

だが、長老が頭を下げた結果はこうして食物を全員が満腹になるほど恵まれただけではなく、その食物で病人たちもみるみる元気を取り戻している。

そして刃を向けられても、圧倒的戦力を持つても、彼女は人間に敵意を向けなかつた。むしろ、助けている。

さて、次に話の中心になつたのは、誰が山の頂上に行くかという話だった。

既に長老とテケが行くことは決定していると言つていい。あとは一人か二人、山道で長老あるいはテケのサポートをする者の選抜である。

ウカノのイメージが妖怪のままであつたならば、誰も立候補しなかつたであろうし、そもそも異と判断し山に登ろうとすらしなかつただろう。

だが彼らは、もらつた恩を裏切るほど礼儀知らずではなかつた。そして、ある意味自然に対し信心深くもあつた。見たこともない烟を嘗み、慈悲深く多くの食物を恵んだウカノを通して、何かを見ていたのかもしれない。

自分が、いやいや自分がとなかなか決まらず、結局力の強い者を長老が選ぶことになり、三十人の中でも特に屈強な男一人が選ばれた。

長老にテケ、一人の男は、残る一十九人に手を振り白い少女の指示した山へと足を向けた。

山の麓には、例の仮面をつけた一人の三尾の少女が待つていた。二人の姿は全く同じで、そして先刻見た者達とも同一であつた。

「「こちらです」」

声をそろえて簡潔にそれだけ言つと、一人は歩き出す。三人が慌てついていくと、少女達の歩いていく先には綺麗に舗装された石段があつた。二人は淡々とそれを登つてゆく。三人もそれに黙つてついて行きながら、直にそのうちの一人、テケが沈黙に耐え切れず口を開いた。

「あ、あの」

「「何か?」」

振り返りもせらず足も止めず、平淡な声で即座に返され少し氣おされながらも、テケは続ける。

「あの、あそこの番をしてらした、女の子を、あの、私、やつつけちやつたんですけど……」

烟を守っていたらしい少女と、前を行く二人、ひいては頂上で待つ白い少女が無関係とは到底思えない。しかしその烟にいた少女を、テケは攻撃して消してしまった。つまり、率直に言えばテケは彼女達の仲間を殺してしまったのだ。先に攻撃されたとはいえ、それはこちらから相手の領域に入り、増してやそこの物を盗つてしまつたからだ。

非はこちらにあるのではと、少なくともテケはそう思つていた。そのことについて、何か咎めがあるのでないかと心配していたのだ。しかし、一人は相変わらず薄つぺらい声で返答した。

「はい。しかし、」

「それが何か?」

「え、でも、彼女はあなた達の仲間ではないのですか?」

「仲間……」

「私達に、個は存在しません」

「ですので、『仲間』という言葉が

「定義付けられることはありません」

二人はテケや長老でも首をかしげるような事を交互に口にし、そしてなおも続ける。

「私達には死の概念はありません」

「ですので、私達を下したあなたに咎はありません」

「そ、そなんですか…。あなたたちは、いったい…」

「私達は」

「式神」

「「ウカノ様と紅花様に使つていただいています、道具です」」

「えと…」

「着きました」

「こちらです」

テケが返答に窮していると、二人はテケが何かを言つ前にそう言つた。気づけば、上が見えないほど続いていたはずの石段は終わっていた。

そして頂上にやって来て、三人は幾度目かになる驚愕を表情に表した。

山の頂上にあつたのは広い平地で、地肌はあまり見えずふわふわとした草が一面に植わつていて、その草がないところにはちんまりとした畠が作られていた。

さらにその向こうには、これまで見たことのないような建物が建つていて、自分達の住まう堅穴式とは違い、地につかない造り

になつており、屋台骨も木材でしつかり細部まで作りこまれていた。そして、大きさなど豊穴式住居とは及びもつかない。

『二二』だと言わなければ、住まいとすら氣づかないほどの隔たりがあった。

「おう、来たか。まあ上がれ。茶は あつたつけ」

その大きな家の裏からすたすたと歩いてきたのは、テケ達、というより代表者を選んで遣せと言つた白い少女だった。その肩に大きな瓢箪を引っ掛けているのが印象的と言える。

彼女は家の、入り口らしき場所へと歩いて行くと、からからとそこを開きテケや長老達に手を振り誘つた。そして、ついつと中へと入つていく。

三人をここまで案内してきた二人の少女は、いつの間にか三人の後ろに立ち、その背中を静かに見つめている。

三人はその視線に押されながら、顔を見合わせてからぼっかりと開いた引き戸の向こうへと入つていった。

「二二、この度はたくさんのお食事を恵んでいただきありがとうございました。みなも元気を取り戻し、感謝の次第もございません」

「ああ、いいよ。そのことで話があるしな」

立派な造りの家の中を進み、連れてこられたのはこれまた立派なお座敷。そこで三人は真っ白な少女と向かい合い、落ち着かずにそわそわと出された飲み物にも口をつけられず、所在なげに周囲をきょろきょろと見回していた。

しかしこつまでもやうじているわけにもいかず、最初に長老が話を切り出した。

反対に、少女は自分の瓢箪を傾け、ふうと息をつくと長老に短く返す。

その言葉に、三人は身を引き締めた。そもそも、何の理由で呼ばれたのかが分からぬ。食物の対価か、はたまたその他何か。渡せるモノといえば、ヒトしかない。彼らとしては、そんなことは無論避けたいところであるが。

少女はそんな心配などお構いなしに言葉を続けた。

「お前達は確かに安住の地を探しているのだったか」

「は、はい。しかし、三十人も住むとなるとなかなか良い土地も見つけられず、見つけても既に住んでいる者達も居る場合がほとんどです。彼らもいっぱいいっぱいの状況、その近くに里を構えるわけにもいかず、またしばらく旅をして探すことになるでしょう」

何故そんなことを言うのか分からず、長老は内心首をかしげる。しかし、その後で続けられた少女の言葉に顎を落とした。

「ふーん。じゃ、下の畠を世話をしないか？ もちろん、獲れた収穫物はお前達のもんだ」

「…………は？」

「ん？ もちろん条件付だぞ。収穫された物の一部を、いっただに上納してくれ。まあ、俺がお前達を雇う、といった形だな。…この言い方じや難しいかね」

「……に、住んでもよろしいのですか……？」

「住まなきや畠の面倒は見られんだろ……。三十一人が十分に住めるだけの土地はあると思うんだが」

「その、畠も、いただけるのですか……？」

「さつきも言つた、条件付でだがな。ああ……別に半分寄越せとか一割寄越せとか無理言つてるわけじゃないぞ。適当にくれりやいい。俺としては、少々畠や田んぼを作りすぎて困つてたところだ。ただ貯蔵していくも仕方ないし、お前達が消費してくれるんなら、それが一番いいのかもな」

『…………』

長老を含めた三人はぱかっと口を開き、まるで阿呆のように少女を見つめた。少女は怪訝そうにそれを見返していただがすぐに興味を失い、瓢箪を振つてその中身を口に流し込んだ。そしてもう一度三人へと視線を戻し、まだ呆けた顔をしているのを確認すると何かを言おうとした。

「何かまずいことでも……」

『ありがとうございます……』

「おお？」

それ故、突然声をそろえて頭を下げた三人に、少女の身体も少し引いてしまう。

三人が呆けていたのは当たり前、住み場所も、作物も、三十一人分

が一気に保証されたのだ。少女の言葉一つで、今の彼らの現状全てが救われたと言つてもいい。

すぐに頭で理解出来なかつたのも、当然のことである。

しかもその両方をもらえる条件は、ただ収穫の一部を彼女達に供えるだけ。そもそも、言われずとも彼らならば自発的にやつているだろつ。

人間に奇跡を起こす者、人は時にその者を『神』と言つ。畏れ敬い、そして彼らにとつて絶対なる者。

ウカノミタマは、彼らにとつてまさにそんな存在だった。絶対的な力を持ち、奇跡を起こし、彼らを救つ者。そこに彼らが超上者の姿を見るのは必然といえよつ。

未だ驚き高揚する頭で、甚だ興奮しながら彼らは山の上の屋敷を後にした。その前に幾度も頭を下げていく事を忘れずに。人は、強制されずとも自然に頭が下がるものである。彼らはまさにそれを体現していた。

これから、彼らは様々な理由で何度もこの場へとやつて来る。

みながみな進んで歩を進め、人を代え、代を代え、何年何十年何百年となく、それでも絶え間なくやつてくる事を、ウカノは知らなかつた。

ウカノは、以前は人間であつた彼女は、この時代の人間の信心深さを舐めていた。

なんか知らんが神様と呼ばれるようになつていた。処遇に困ついた田畠を、丁度やつて来た人間達に提供しただけなんだが。イザナギ、お前つて予知能力あつたんだな。名前教えてなかつたのに、あいつらいつの間にか『倉稻御魂』とか呼んでんだ。どういうことだし。

「ビーしたの？　おかあさん」

「親友の偉大さを垣間見た」

「？？？」

食べ物の神様（後書き）

はこやつくり書きました。でも時間がかかりました。どうしまじゅうこの板ばさみ。でも書くぜ、何でつてまだ原作にからんでやしねえ。永琳一人だけとかさみしす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3229y/>

東方空狐道

2011年11月29日20時39分発行